
迷宮の魔王さま 改訂版

井戸端 康成

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷宮の魔王さま 改訂版

【Zコード】

Z3388Q

【作者名】

井戸端 康成

【あらすじ】

数千年の時を生き、そして死んだ魔王。だが彼の魂はそのままあの世へ行くことはなく……！？

元魔王が迷宮で繰り広げるファンタジーの開幕です！

第一話 ある魔王の死

第一話 ある魔王の死

魔界の果て、闇深き地に城がそびえていた。魔を統べる象徴たる城はすべてを威圧し、見下ろしている。高く厚い壁は何者の侵入をも拒み、尖塔は天へと睨みを効かしていた。

その城の最深部にある玉座の間。艶やかな深紅の絨毯が敷き詰められ、高貴な空気に満ちたそこには数え切れないほどの者たちが集っていた。その者たちは皆一様に玉座に向かって頭をたれている。その顔は虚ろでどこか悲痛な面持ちであった。その光景はなにか喪に臥しているかのようであった。

数百もの瞳に見つめられていた玉座の主は、弱々しく息をするばかりであった。深く皺の刻み込まれた皮膚は蒼白、唇は土氣色。彼に死が差し迫っているのは明白であった。しかし、未だにその青い瞳は刺すような光を保っていた。

「みな集まつたようであるな」

玉座の主が口を開いた。威厳溢れるその声に、場の空気が一気に張り詰める。一切の物音がその場から排除され、無音の空間が出来上がった。玉座の主は場が静まつたのを確認すると、再び口を動かす。

「もう知つていると思うが、余の命は持つてあと数刻。最後にみなの顔が見たくてな。こうして集まつもらつたというわけだ」

「魔王様、そんなことをおっしゃらないで下さい。」

魔王の言葉に、集まつた家臣たちは動搖を隠せない。すでに知つていたことではあったが、本人から言われたのと人づてに聞いたのとでは重みが違つた。不安、恐怖、死への嫌悪。様々な感情が渦巻き、集まつた者たちの心を揺らす。やがて、玉座の間がざわめきによつて乗つ取られた。だがそれとは対照的に魔王は落ち着き払つていた。

「落ち着くのだ。余とて氣分の良いことではない。数千の齢を重ねてきた中で一番嫌なことだ。だが避けられぬ、故に騒がぬ」

魔王はこの一言で場をおさめた。そして手に握つてゐる黒光りする杖を揺らして、一人の男を呼び寄せる。漆黒の甲冑を纏つた男は神妙な態度で玉座へと上り、うやうやしく膝をついた。

「顔を上げよ」

「はつー。」

魔王は魔を統べる者は思えない慈悲深い目で男の瞳を見た。男は緊張で身体を強張らせる。

「つむ、良い瞳をしておる。これからも国を頼むぞ」

「ありがたき幸せー。」

男は涙で頬を濡らして下がつていつた。魔王は満足げに頷くと、また別の男を呼び寄せる。そしてまた同じような行動を繰り返した。

魔王の別れの挨拶はしばらく続いた。そして、いよいよ最後の家臣と挨拶をしようとしたところで、魔王の命が戻ってきた。彼は胸を抑え、苦しみに喘ぐ。

「魔王様、大丈夫でござりますか！」

「もつとゞの昔に大丈夫ではない。構わんから早く最後の者よ、来るのだ」

魔王は駆け寄った家臣の手を振り払った。そして最後尾に座つている男を執拗に呼ぶ。男はきぬ擦れの音を響かせながら魔王の玉座の前に早足で移動した。

魔王はその男の姿を見ると、少し驚いたような顔になつた。最後の最後に、もつとも信頼していた男が残つていたのだ。

「最後はおぬしか宰相。さあ、顔を上げるがよい」

宰相はゆつくりと顔を上げた。魔王は最後の力を振り絞り、声を出す。それはしわがれ、小さな声であつたが、宰相の心を打つた。

「おぬしには世話になつた……。実によく余を支えてくれた。今後は王子たちを……ぐうつ……支えてくれ」

「ははっ！ 命に代えましても！」

宰相は頭を下げる。しかしそのまま下がることはなく、魔王の手を握ぎりしめる。魔王の手からわずかずつ、わずかずつではあるが体温が失われていた。命が燃え尽きていくのが、はっきりと宰相には感じ取れた。

「魔王様……」

宰相は魔王から手を離した。手がだらりと垂れ下がる。その身体はもう、力を失っていた。悲しみが玉座の間に溢れ出て、嘆きの声が幾度となくこだました。

一人の偉大な魔王が今、死んだのだ。

魔界とも、そこから繋がる人間世界ともまったくことなる世界にある、神秘の大陸アルゲニア。魔界の魔族とはまた異なるがモンスターたちが息づき、人間たちがいくつもの国を建設している世界である。

その大陸のほぼ中心に位置する迷宮都市と呼ばれる都市。そこは地の奥へと続く神秘の建造物、迷宮を中心として成り立っている都市である。それゆえ今日も迷宮へと赴く者たちで騒がしいその街の端で、一人の男が目を覚ました。

「うう……ここが地獄か？　だいぶ想像とは違っているが……」

男は立ち上がると、困惑したようにつぶやいた。彼は艶やかな深紅のマントと銀に輝く髪をゆらして辺りを見回す。その困惑した声はかなり若返っていたが、さきほど死んだはずの魔王とほぼ同一であつた……。

第一話 魔王から冒険者へ

第一話 魔王から探索者へ

夕焼けに染まり、昼の顔から夜の顔へと移ろつとしている迷宮都市。ある者は家路を急ぎ、またある者は稼いだ金を手に街へと繰り出す。その人々で「」つた返す街の中では割合静かな裏通りを、魔王は辺りを見回しながらゆつくりと歩いていた。

「あの世のどこかではなさそうだな。霧囲気から言つと人間世界か？ だが余は死んだはず……」

夕焼け空に太陽が昇り、家や商店の立ち並ぶあたりの様子に魔王は思い悩む。彼の知つていてる限り、このような光景があるのは人間世界だけであった。

しかし、魔界から人間世界に行くのは特別な大魔法を使わなければならぬし、第一彼は死んだはずだ。それらの事実が魔王の頭を悩ませていた。しかもさらに理解しがたいことに、すでに老齢であつたはずの彼の肉体は何故か若返つていた。

色が抜けていた髪は元の鮮やかな銀に染まり、しわに埋もれていた顔は本来の彫りの深い容貌をあらわにしている。魔力や筋力も衰え始める前にきちんと戻つているようであった。

「……今はとにかく情報が必要だな」

魔王はそうつぶやき、一端思考を打ち切つた。そして辺りを歩いて人の姿を探す。冒険者の街の裏通りには到底似合わない豪奢なマ

ントが揺れ、杖がかつかつと音を立てた。

「よひ、兄ちゃん。金もつてそつじやん？ 僕達にわけてくれよ」

魔王から放たれる高貴な気配に金の香りを嗅ぎとつたのか、よからぬ輩が近づいてきた。人数は三人、それぞれくたびれた革の鎧を身に附けている。大方冒険者崩れのチンピラだらう。

「余は金など持つてはおらぬ。他を当たれ」

魔王は氣怠い顔をしてけんもほろろに男たちを追い返した。まったく相手になどしていられない様子である。男たちはその態度にナメられたと苛立ち、腰から獲物を抜き放つた。

「おい、なめたこと言つてんじゃねえぞ！」

男たちはナイフをちらつかせ、魔王を威圧した。しかし、魔王は眉をひそめるだけだ。それも当然、魔王にとつてこの男たちの威圧など、子犬に吠えられた程度のことにしか感じられなかつた。

「金を持つてないのは事実だ。無い袖は振れぬ」

「ちいつ、なら身ぐるみ置いていけ！」

男たちは魔王に襲い掛かつた。荒事には慣れているのか、なかなかの速度だ。三つの刃は滑らかな直線を描いて魔王に向かつ。

しかし、その程度の攻撃が魔の頂点に君臨していた魔王に通用するはずがなかつた。

「弱い者をいたぶる趣味はないが……余はやられたらやり返す主義だ」

魔王は身を翻すと、瞬く間に拳を繰り出した。右、左、正面。計三発の拳は男たちをくの字に曲げた。男たちは悲鳴すら上げずに白目を剥き、泡を吹く。

「うむ、若返つたせいが入りすぎたな。だがまあいい」

魔王はやれやれと呆れたような顔をすると男たちを通りの端に寄せた。そしてそのまま通りを歩き去ろうとする。だが、そこで彼はふと妙案を思いついた。

「そうだな、感謝料代わりに記憶を覗かせてもらおう

魔王は男に近寄ると顔を上げて額をさらけ出した。そして一言、呪文を紡ぐ。

「ジャックイン」

魔王は目を閉じ、男の額に手を重ねた。魔王の頭に男の記憶や知識が流れ込む。文字、歴史、生活の知識……ありとあらゆる膨大な量の情報に、魔王の頭の中はたちまち埋め尽くされていった。

だがさすがに魔王といつべきか、しばらくすると情報処理を完了し、彼は男の知識をある程度は自分の物とした。だが所詮は街のチノピラの知識、ごく基本的なことしかなかつた。もつとも、それだけでも魔王を興奮させるのには十分であったのだが。

「面白い、アルゲニアに迷宮か。何者が余を導いたのかは知らぬが、

感謝しなければな」

魔王は口元を歪め、愉快そうにつぶやいた。未知の世界に未知の存在。特に、この迷宮都市に存在する迷宮は魔王を興奮させた。深い階層に潜む強大なモンスターに彼らの残す秘宝。さらに祝福を受け迷宮を探索していく冒険者、通称シーカーたち。

チンピラ男は迷宮にはあまり詳しくなかつたようだが、その表層的な知識だけでもこれらの中存在は魔王に少なからずある好奇心をくすぐつた。

魔王本人は決してそうは言わないだろうが、魔王城に時折現れる勇者と戯れたのも彼が勇者という存在に好奇心を覚えたからである。それぐらい、彼は好奇心旺盛であるのだ。

「守るべき国もここにはない。気楽に冒険して暮らすのも悪くないな」

当面の生活方針を決定した魔王は、男の記憶にあつたシーカーたちの拠点、シーカークランへと向かうことにした。だがその前に、機嫌の良くなつた魔王は男に施しをしてやろうと考へた。魔王とはやはり気まぐれなのだ。

魔王は道端に落ちていた石を拾うと魔力を込め始める。石が透明な宝石のようになり青く輝き出した。魔王は満足そうな顔をすると怪しい輝きのそれを男の懷に滑り込ませる。

「良かつたな。十年は餓えずに済むぞ」

魔王はそう言つて笑つた。彼が数分で造つた宝石には、この男の

稼ぎ十年分ぐらいの価値はあったのだ。

魔王は立ち上ると今度こそその場から歩き去る。そして、周囲から奇異な目で見られつつも通りを歩き、十分ほどでシーカークランに到着した。

「ほつ、ここか。神の気配がするが……致し方ないか」

魔王が目にしたシーカークランはその後ろにある神殿と半ば一体化していた。ちょうど長方形に近い形のシーカークラン建物が三角屋根の神殿に接合したような形である。魔王は少し嫌な顔をしたが、そして気にはしない。

神と魔王の仲は悪いが、人間たちに思われているほどは悪くない。どちらかがどちらかを害したといつてあれば容赦しないが、普段は互いに無関心。それに世界規模の危機に陥った時には協力したこともある。ちょうど同じ建物に住んでいる仲の悪い住人同士のような関係だと思えばわかりやすい。

だから、マナーを守れば神殿に入るぐらい大したことでは無いだろう、と魔王は考えたのだ。そのため、彼はゆっくりではあるがシーカークランへとためらうことなく足を踏み入れたのだった……。

第三話 シーカークラン

第三話 シーカークラン

夕闇が深まる中、シーカークランは今日もシーカーたちでざわつた返していた。シーカーたちのがやがやとした声が響いていて、とても混沌とした様子である。その中に、一人の男が足を踏み入れてきた。艶やかな紅いマントを揺らすその姿は魔王のものだった。

「いらっしゃいませ。何の用ですか？」

カウンターに座っていた受付嬢は少々動搖しながらも魔王に、錆び付いたような営業スマイルで応えた。そしてその心の中で思つ。またどこかのアホな貴族が来たのかと。

シーカーになるためにシーカークランに来る貴族というのはたまにいる。そういうのはたいてい自身の腕に自信を持つていて、それを見せつけてやろうという連中だ。だが、そんな連中は普通シーカーになつて三日ぐらいでその自信を打ち砕かれ辞めていく。

豪奢な紅いマントを着てこれまできらびやかな杖をついていた魔王は、どこからどう見てもそういうアホ貴族にしか見えなかつた。

「シーカーになる手続きをしたいのだが」

「はい、わかりました。……ではこちらにきて下さい」

魔王は受付嬢が笑顔の裏に放つた『場違いだ、帰れアホ貴族』というメッセージを黙殺した。というよりはそもそも気がついていな

い。受付嬢は仕方なく魔王を手続きのできる奥の個室へと案内した。

魔王が受付嬢に案内された部屋はとても小さな部屋だった。椅子が一つ、真ん中のテーブルに向かい合つように置いてあり、さらにその真ん中のテーブルの上には水晶球と書類が置かれている。部屋にはそれだけしかなく、またそれだけしか置けるスペースがない。

「こちらにお座りになつて下さい」

受付嬢は魔王を先に手前の椅子に座らせた。そして自身は奥の椅子に座る。椅子に腰を落ち着かせた彼女は書類をぽんぽんと整えると、魔王に説明を始めた。

「手続きを始める前にシーカーの義務と危険性について説明します。

……

魔王が聞いた受付嬢の説明はかなり長かつたが、その主な事柄だけを抜き出すとこうだ。

まず、第一にシーカーとなるとシーカークランに税金のような物を納める義務を負うということ。このお金は用ごとに支払うもので、シーカーによつて金額がことなる。収入が多い上位のシーカーほど多い仕組みだ。なお、シーカーになつて最初の一月は払わなくとも良いらしい。

第一に、シーカーになるとこの街から出るのが面倒になるということ。優秀な戦力であるシーカーに勝手気ままに動かれては困るからだそうで、街を出るのに非常に煩雑な手続きが必要になるのだそうだ。ちなみにその手続きには最低でも半年はかかるらしい。

最後に、シーカーたちの死亡率について。何でも初心者シーカーの死亡率は三割近くになるそうで、熟練者の死亡率も良くあるらしい。ただし、魔王はこの部分の説明をほとんど聞き流していたが。

「説明が終わりましたので、いよいよ登録作業です。まずはこの書類に必要事項を書いて下さい」

受付嬢は魔王にペンと書類を手渡した。魔王は書類を受け取ると、必要事項をサラサラと記入していく。文字の知識はさきほどの男から得ていたし、書き込む情報は適当でもばれないと魔王は高を括つていた。

「全部記入できただぞ」

「はい、どれどれ……名前がプロイス・フリード・ハイン……」

名前の欄を見た受付嬢の顔が曇った。欄いっぱいに小さな字で書かれている。覚えるのに苦労するどころか、読み上げるだけで大変だ。

しかし、ここで魔王が助け舟を出した。彼自身も名前が長すぎることは自覚していたのだ。何故自覚しているのかはつきり言つてしまつと、彼自身も思い出しながら記入したからである。

「魔王で構わん。長いからな」

「魔王ですか？　はい、わかりました。そう呼ばさせていただきますね」

受付嬢は妙な顔をしたが、何も聞かなかつた。この世界にはモン

スターはいても魔族はいないので、魔王といつ言葉に特に意味はないのである。

しばらくして、受付嬢は書類に目を通し終えた。そして彼女は一仕事終えたような顔をすると、水晶球に何か薄い紙のような物を差し込む。彼女は紙が奥までわざわざしたことを確かめと、魔王の方に向き直った。

「ではいよいよステータス測定です！ この水晶球に手を当ててみて下さい」

魔王は受付嬢に促されるまま、水晶球に手を触れた。しかし水晶球は何も反応しない。受付嬢が高価な水晶球が壊れてしまったのかと困ったように首を捻つた。だがその瞬間、水晶球が太陽のように明るく輝き出した。

「うわああ！ 何でこんなに光るんですか！！ いつもはこんな風にはならないのに！」

「何のつづりものなのか？」

「はー、いつもはぼんやり明るくなる程度です！ あつ、カードが出てきましたよー！」

受付嬢は未だにチカチカとする目を擦りながら、水晶球の隙間から出てきたカードに目をやつた。そしていまだに痛い目を労りながらゆづくつ目を通してゆく。

すると、その顔色がどんどん青ざめていった。やがて彼女は震えながら、カードと魔王の顔を見比べる。そして次の瞬間。

「な、なんでこんな人がレベル五百もあるんですかああ！」

受付嬢の渾身の叫びがシーカークランにこだました。窓ガラスが割れそうな程の音量だ。さしもの魔王もこの音波攻撃には耐えられなかつたのか、ギュッと耳を抑える。彼の耳にキーンと耳鳴りがした。

少し後で、耳鳴りが収まつた魔王。そこで彼は空氣を読まないことを承知で、受付嬢に気になつたことを質問をした。

「雰囲気を壊して悪いが、レベルとは何だ？ それが五百とはそんなに驚くことなのか？」

この質問に受付嬢がまた叫んだことは言つまでもないだろう。

第四話 魔王とおせつかい少女

第四話 魔王とおせつかい少女

曇りの日には街が照らされる宵の口。シーカークランも少し人が減つて空いてきていた。その奥にある個室では、受付嬢が魔王をどこか疲れたような目でみていた。

「えーと……はあ。レベルというのは強さの単位です。一般的には高ければ互いほど強いということになります。それがあなたの場合はなんと五百！ 今まで最高とされた人でも百三十程度でしたのに……。あなたは一体何者なんですか？」

「さきほどそなたに言つたような気がするが、余は魔王だ」

「いや、そういうことではなくて」

「別に余が何者であつてもそなたに迷惑がかかるわけではあるまい。気にするな」

受付嬢は言葉に詰まつた。確かに、魔王の言つ通りではあつた。彼が何をしてきたのかなど、シーカークランは知る必要はない。むしろ、無理に詮索して臍を曲げられたりしたら困る。彼ほどシーカークランに貢献しそうな人材はいないからだ。

そのような理由で無理矢理に自分を納得させた受付嬢はため息をつき、肩を落とした。そして小さな声で魔王に話しかる。

「わかりましたよ魔王さん。確かにあなたの言つ通りです。ですが、

あなたのレベルのことについては絶対に言いふらしたりしないでくださいよ！ 混乱が起きるのは田に見えていますからね」

「余は不要なことは言わぬ質だ。言いふらしたりはせぬ

「本当の本当にしてですね？」

「ああ、本当の本当にだ」

受付嬢は魔王の目をじっと見つめた。魔王もまたそれに応えて動きを止める。一人はまるで氷のようになつた。

辺りが静けさに覆われた。一人は互いに互いの顔を見たまま動かない。部屋の中は空気まで動かないほど変化になってしまった。その状況はしばらく続いた。

「信用しましょう。はい、これがクランカードです」

受付嬢はとうとう魔王のことを信用して、シーカーの証であるクランカードを手渡した。魔王はそれを受け取り、興味津々な様子で入念に観察する。

クランカードは光沢のある黒で、表には大きな文字で魔王と書かれていた。そして裏にはたくさんの数字が書き込まれている。攻撃、とか守備とか書かれている。魔王の能力を数値化したものだろう。だが、魔王はそれには興味を示さなかつた。簡単なこと、自分の力は自分が一番良く知つていたからだ。

「良くできているな。これで登録は完了か？」

「はい、一応クランですべきことはすべて完了しました。ですがまた何かありましたら気軽に尋ねて下さいね」

「ふむ、手間をかけたな。礼を言ひついで」

「いえいえ、これが仕事ですから」

魔王と受付嬢はそういう言葉を交わすと席を立ち、受付のカウンターの方へと戻つていいく。魔王は気分が乗つてているのか、足取りが軽い。

「ではわざわざ行くとじよひ」

「えつ、ちょっと待つて……行つちゃつた」

受付まで戻つてきた魔王は一言つぶやくと、受付嬢が止めるのを聞かないで出て行つてしまつた。気がせいっていたので受付嬢の制止など気がつかなかつたのだ。

取り残されてしまつた受付嬢はクランの奥の方へと視線を向けた。ちょうど、クランと繋がつてゐる神殿の方である。そして彼女は眉を歪めて困つたような顔をした。

「神殿で洗礼を受けて行かなくて良かつたのかな？ まあいつか、困つたらまた戻つてくるでじよひ」

そういうと受付嬢は魔王の相手をしている間、滯つていた仕事を再開するのであつた。受付嬢の仕事は意外と多いのである。

「えーと、確かにこちらであつたな」

一方、シーカークランを出た魔王は迷宮の入口に向かつて歩いていた。月明かりに彼の銀髪が揺れ、マントがたなびく。人々は浮世離れしたその姿に、好奇や憧憬の眼差しを送った。夜の魔王はとても絵になるのだ。

魔王が街を歩き始めて数分後。彼は大きな広場に到着した。その中心部には大きな長方形の石でできたモニメントのような物があり、その根元の部分に大きな穴が空いている。

鎧を着て武器を携えたシーカーらしき姿が多数出入りしているところを見ると、そこが迷宮の入口らしい。そこで魔王は夜の闇よりなお暗いその穴に入ろうとした。だが……。

「うぬ、結界か？」

魔王の行く手を何か透明な壁のような物が阻んだ。魔王は足に力を入れて入ろうとするものの、入れない。なかなかどうして頑丈な結界のようだった。

「うぬぬ……！」

しばらくしても、結界は破れなかつた。痺れを切らしてきた魔王は力をさらに込め、強引に入ろうとする。魔王を阻む結界が光を放ち、稻妻がほとばしつた。迷宮の入口がみしめしと軋みはじめる。

魔王のただならぬ気配に、シーカーたちが集まつてきた。彼らは何か言いたげな顔をするが、魔王の必死の形相に言つことができない。

さらに魔王の服装も災いした。紅いマントに宝玉をあしらつた漆黒の杖をもつっていた彼は、どこかの貴族にしか見えなかつた。そのせいで貴族を恐れる一般人のシークーたちは彼に話しかけにくいくてこの上なかつた。

そんな折、一人の少女が迷宮の前を通りかかつた。紅い髪を長く伸ばし、革の鎧を身につけた少女だ。その少女の顔は姫といつても通りそうなほど纖細な美しさを誇つていたが、引き締まつた細い身体を見る限りではシークーのようだつた。

彼女は騒ぎを見つけると、集まつていたシークーたちに話しかけてみた。するとシークーたちは魔王の方をちらつと見て困つた顔をする。そのシークーたちの様子に彼女はだいたいの事情を察した。

事情のわかつた少女は魔王に近づいていった。そして貴族のように見える彼の機嫌を損ねないよう、できるだけ丁寧に話しかける。

「あの、何をやつているのですか？」

「見ての通り、中に入ろうとしているのだ」

「……ぶつ」

魔王の返答に少女は吹き出しそうになつた。赤い髪を揺らして、その小さく整つた顔を歪める。笑いを堪えるのに必死なようだ。

「……あの、もしかして洗礼を受けてないのですか？」

「洗礼？ なんだそれは」

魔王はぽかんとした顔をした。少女はその様子にいよいよ笑いを堪えられなくなつてくる。笑つてはいけないとわかつてはいたが、限界が近かつた。

「……くつ……誰か供の者から洗礼についてお聞きにならなかつたのですか？」

「供の者など余にはそもそもおらぬ」

魔王の言葉に少女は彼を上から下までくつくりと観察した。そして、恐る恐る彼にあることを尋ねてみる。

「供の者がないって……もしかしてあなたは貴族ではないんですか？」

「貴族……ではないな」

「なんだ、脅かさないでよ！ 貴族にしか見えなかつたじゃない！」

少女は貯まりに貯まつていた笑いを爆発させた。ほつそりとした腕で腹を抑えながらカラカラと鈴がなるように笑う。そんな少女に釣られて周りにいたシーカーたちも笑いはじめた。辺りの妙に重かつた空気は一変し、軽くなる。

だがそんな中で、魔王はじつしてこんなに笑われているのかわからなかつた。なので彼は困惑したような顔をして、前で笑う少女に尋ねてみる。

「……どうがそんなにおかしいのだ？」

「あはは……いやが、この迷宮は洗礼を受けないと入れないのにあんたが無理に入らうとしたから……笑えちやつて」

「なんだと。いひむむむ……」

魔王は唸り出した。実にまずい事態であつた。洗礼など魔王のすることではないし、だいたい魔王に加護を授けてくれる神などないだらう。だが、この迷宮には是非入つてみたい。

腕を組み、厳めしい顔をして魔王は考え込む。ダメでも洗礼を受けてみるか、もうあきらめるか。魔王の心の中が大きく揺らいだ。すると、何を勘違いしたのか少女が笑うのをやめて、心配そうな顔をして彼に話しかけてきた。

「もしかしてあんた……迷宮に入れないと行く当たがなかつたりするの？」

「やう言われねばそうだな」

魔王は心ここにあらずといつた様子で応えた。嘘は言つていない。もつとも、魔王にかかれば行く先などどうとでもなるが。

すると少女は魔王の格好を踏みみするような目でみた。そしてぶつぶつと何か考へ込むようにつぶやく。その顔はさきほどまでは違つて真剣そのものであった。

「それならうちに来ない？ 今から洗礼は無理だし、宿屋も空きがないわよ」

しばらくして少女は、魔王にとつて予想外の提案をしてきた。魔王は不意に訪れた驚きで田を丸くする。とりあえずこの落ち着いたいと思つていた彼には願つてもない提案だ。しかし、一応礼儀としてもう一度聞き返しておこうと彼は考える。

魔族というのは、上位になればなるほど規律や秩序を重んじる。その最高位である魔王は、基本的には思慮深く礼儀正しいのだ。

「本当に良いのか？ 迷惑になるかもしれぬぞ」

「良いの良いの。だつてあんたほつといたら死にそうじゃない。世間知らなさそうだし」

少女は魔王のマントと杖を指差した。そして少し呆れたように笑う。世間を知らないことは事実なので、魔王は言い返せなかつた。ちなみに魔王が手に入れたチンピラ男の知識は、世間一般では役に立たない物ばかりであつた。

「よし決定。私はシェリカ。よろしくね」

「余は魔王だ。世話になる」

魔王とシェリカは互いに見交わして笑つた。シェリカはそうしてひとしきり笑うと、魔王を手招きしながら彼女の家へと歩いて行く。

いつして魔王はシェリカに連れられて、彼女の家へと向かつたのだった。

第五話 同居人

第五話 同居人

迷宮都市の北部一帯。俗に富豪街とよばれるそこは、成功した一部のシーカー や豪商たちが競つて屋敷を構える高級住宅街である。南部とは違つて、立派な屋敷の並ぶそこはアウトローの多い迷宮都市らしからぬ閑静な場所であつた。

そのはずれをシェリカと魔王は歩いていた。住む人間が夜の外出などしない人間ばかりからか、広い通りには人気がなく閑散としている。そのだだつ広い空間を、一人のカツカツという足音だけが響いていた。

「ここが私の家よ」

シェリカは立ち止まると、一軒の屋敷を指差した。人の背丈よりずっと高い塀と、大きな黒鉄の格子でできた門が見える。その門の格子の隙間からは広い芝生の庭と噴水が見えた。さらにその奥には赤い色調の一階建ての家がそびえている。赤い煉瓦の壁に三角の屋根、さらに正面には広いバルコニーも見えた。

しかし長年手入れをされていないのか、庭に雑草は生え放題で噴水の水は緑に変色している。さらに建物の方も煉瓦の赤がくすみ、バルコニーの手すりが錆び付いているさまはさながら幽霊屋敷のようであった。

「……古いが立派な家だな」

「ほろいが、でしょ。別にお世辞言わなくても良いわよ。さ、中に入りましょ」

そういうとシェリカは屋敷の門に手をかけた。鉄をギシギシと軋ませて顔を赤くしながら門をこじ開ける。そして野原のようになっている庭を抜けて、屋敷の中に入つていつた。魔王もそのあとに続いて屋敷へと向かいその扉をくぐり抜けた。

屋敷の中はその外観に相応しく、豪奢であった。紅い絨毯が敷き詰められ、天井からはきらびやかシャンデリアが下がつていて。だが絨毯は色あせ、シャンデリアは埃まみれであった。それに夜であるといふのに、明かり一つついていない。

「さつきから人の姿が見当たらないが……。もしかしてこの広い屋敷に一人暮らしなのか？」

屋敷の中に明かりがついておらず、人気がまったくなかつたので魔王は半ば呆れたようにシェリカに尋ねた。これだけ広い屋敷なのだから、使用人の一人や一人は居るべきだろうと思われた。

すると、シェリカはどこか寂しげに顔を俯けた。白い肌に光が当たらなくなり、よりいつそう白く見えた。そしてシェリカは小さく口を開いた。さらにそこから物悲しい声を絞り出す。

「ええ、そうよ。お父さんとお母さんが死んじゃってね。使用人も昔はいたんだけど、給料を払えないから暇を出したわ」

家の中が石化した。魔王はシェリカの弱々しい様子に口をつぐむ。しばし、微かに流れる風の音だけがした。二人は沈黙したままだ。

月が陰り、ヒュウと一際大きく風が唸つた。ここによつやく魔王は重々しく口を開ける。

「そつが、すまない。変なことを聞いたな」

「謝らなくても良いわよ。一人ともシーカーだつたから……。そんなことよりもあんた、もつ晩ご飯食べた？」

シェリカは話題を変えると顔を上げた。そして、魔王に向かつて笑いかける。その笑みにはどこか陰があつたが、魔王は気にせず笑つてシェリカに答えた。

「いや、まだだ」

「それじゃあ一緒にご飯にしない？ 私もまだなのよ」

「そつだな、そつさせてもりつじょつ」

「じゃあこつち来て。ご飯にしましょ」

シェリカは食料のある厨房に向かつた。魔王も誘われるまま着いて行き、シェリカと食事をとつた。保存食中心の簡素な食卓であつたが、魔王はおいしく食べられた。魔界の食べ物は総じてまずいかつたのだ。

こつして食事を食べた後、魔王はシェリカに家の東にある小さな部屋へと案内された。茶色を基調とした落ち着いた部屋で、調度は必要最低限しか置かれていない。だが、埃っぽい屋敷の中での部屋は手入れが行き届いていた。

「「」」は手入れがされているな。良く使うのか?」

「まあね、景色が良いから。……それじゃ、また明日」

「つむ、明日な」

シリカは自分から部屋のドアを閉めて去つて行った。すとんすとんと軽い足音がだんだんと遠ざかる。それが聞こえなくなつたところで、魔王は部屋にあつたベッドに身体を埋めた。そして横にある窓からふと、月を眺める。

「月か……。魔界のものとはやはり違つな」

アルゲニア大陸の月は、魔界の紅い月とは違つてどこか悲しい光を帯びていた。その光を見た魔王はわずかに感傷的な気分になる。残してきた国や家臣のことが魔王の頭を満たしていった。

だがそこは魔王というべきか。精神力も人間比ではなくすぐに物思いにふけるのをやめた。そしてしばらくすると気を取り直して月を見る」ことをやめる。

その後は特に何事もなく魔王は眠りについた。そして彼は魔族にとつては眩しき朝の口差しで目を覚ましたのだった。

「ねえ、物は相談なんだけど……」

「なんだ? 言つてみるが良い」

シェリカの家の食堂で朝食を食べていると、シェリカがぼそぼそと魔王に切り出した。何を照れているのか、手を顔の前で盛んに動かしている。魔王はその様子に首を捻った。何を言つつもりなのだと。

「あんたさ、家に住むつもりはない？ お金は取らないから」

「なんだ、そんなことか。住ませてくれるのならむしろあつがたいぐらいだ」

魔王はなんでもないかのように答えた。すると、シェリカの表情がみるみる明るくなつていぐ。よほど魔王と一緒に住めることが嬉しいようだ。

「そう！ 良かつたあー。実はね、一人で少し寂しかつたのよ。だからあんたを泊めたんだけどね。でもあんたボンボンみたいだからさ、こんな家すぐにしていくんじゃないかな、って心配してたのよ」

「それなら心配いらない。余はこの家を気に入つたからな」

嘘ではない。魔王はこの家のこと我が本当に気に入つていた。彼の故郷である魔界にこの家の暗く寂しい雰囲気が似ているのだ。もつとも、シェリカにはそういう理由だとは言えないが。

「ありがと。そうと決まつたらご飯も食べたし、神殿に行くわよ。また昨日みたいにされたら同居人の私が恥ずかしいからねー」

「あ、ああ……」

シェリカは皿を片付けると、魔王の手を引っ張つて強引に出掛け

ようとした。魔王はそれにおおいに困惑。

実はまだ、洗礼を受けるかどうか決めかねていたのだ。しかし、シェリカはそんなことお構いなしに連れて行こうとする。彼女は突つ立つて、魔王の手を強く引っ張つた。

「ほら、行かないの？」

「ううむ……仕方ない、あの結界の突破は難しそうだからな」

しばらくして、散々悩んだあげく魔王はシェリカに着いて神殿へ向かうこととした。洗礼を受けなければ迷宮に入るのが難しかったことと、何よりシェリカの押しが彼にそう決断させた。

魔王とシェリカは家を出て、神殿へ歩いた。すると、シェリカはシーカークランの方向へと向かっていく。そして彼女と魔王はシーカークランの前に来てしまつた。

「ここ」の神殿だつたのか……

「知らなかつたの？」

「ああ、なにぶん余はこの世……街に不慣れなのでな」

シェリカは魔王の世間知らずに肩を竦めると、クランの扉を開けて中に入つて行つた。そして奥の神殿へと入つていく。

魔王もシェリカに続いて神殿の中に入つてみると、存外に広かつた。白亜の大理石の通路が広がり、太い柱が立ち並ぶ。クランに繋がっているのは数ある出入口の一つに過ぎないようで、神殿はシ

カー以外にもたくさんの人で賑わっていた。魔王はしばらく神殿といつ苦手な空間と人の熱気に圧倒された。

「えへっと、あつ、そこの神官さん！」

魔王が固まつていると、通路の奥にシェリカが暇そうにしている神官の姿を見つけた。彼女はそのまま神官の方に走つていくと、大きな声で魔王を呼んだ。

「おへい、こいつちよーー！」

「ちよつと待つてくれ」

魔王はシェリカの後に続いて神官の後ろに立つた。すると神官は魔王たちの方に振り向く。神官は年若い少女だった。短めの白く光る銀髪と透き通る蒼い瞳が可愛らしく、肌も透けるように白い。

だが、神官であるはずの彼女はどこか黒い気配を漂わせていて、さらに不機嫌な顔をしていた。

「私は暇を満喫するのに忙しいの。用なら他をあたつて」

「それは忙しことは言わないわよー！」

「そう……仕方ないわ、何の用？」

少女はいかにも面倒くさそうに言った。どうにも仕事をするのが嫌らしい。シェリカはその態度に閉口しながらも魔王の肩をポンと叩いた。

「10回の洗礼をお願いしたいんだけど」

「わかったわ……。ついてきて」

そういふと神官の少女は通路の脇の扉を開け、魔王を手招きした。魔王はショリカの方を向いて困ったような顔をする。だが、彼女は頑張つてと笑うだけだった。

洗礼には一人で行くしかないらしい。そう悟つた魔王はどこか重い足取りで神官のいる扉に向かつた。その顔はとても曇つていた。

その様子に、神官の少女は生暖かい目をして、口元を抑えた。そして、魔王をして魔族のようだと思わせる笑いをしながら言つ。

「ぐすくす……後ろめたい」とがあるのね。でも大丈夫、あなたが悪の代名詞のような存在でも神は加護してくれるわ。ただし、そういう神だけね……ふふふ」

「や、そうか」

魔王はギクシとした。少女の指摘はまさに図星であった。まさかこの神官……と思って少女の方を見る。しかし、少女はニヤツと腹黒い笑みを浮かべ、その氷のような青い瞳で魔王を見つめるばかりであった。

「うふふふ……安心したならこっちに来て。早くしないと私の休憩時間があなたの洗礼で潰されてしまうわ」

少女はそういうと扉の向こうへと消えた。魔王も渋々ながら扉の向こうへと向かう。

こうして魔王は多大な不安を感じながらも洗礼に臨むのであった。

第六話 混沌神

第六話 混沌神

神殿の奥深くにある洗礼の間。円形の空間に太陽光が射し込み、正面のステンドグラスが色とりどりに輝いていた。その床には星をもした魔法陣が金色に揺らめき、その頂点に一つずつ水晶が置かれている。

少女が魔王をそこに連れて来た時、すでに先客が何人かいた。彼らは魔法陣の前に一列に並び、緊張した顔をしている。少女は魔王をその列の最後尾に並ばせると、こほんと咳ばらいをした。

「あそここの魔法陣で洗礼の儀を行うわ。もし位の高い神に加護をいただければ能力が上がるから精々よく祈つておくことね。あと、洗礼の儀はかなり痛いから気をつけること。……他に何か聞きたいことは？」

「特にないな」

「そう、じゃあ私は戻るわ」

用がすんだので神官の少女はさつさと魔王を残して帰つて行こうとした。だがそこで、魔法陣の近くの椅子に座つていた神官らしき男が彼女を呼び止める。

「シア、そろそろ君の順番だ。戻つて来なさい」

「むう……」

少女ことシアは頬を膨らませながらもしぶしぶ男の方へと歩いていった。そして男と入れ代わりで椅子に座る。彼女は仏頂面になりながらも仕方なく、仕事をはじめた。

「……今からは私、シアが洗礼を担当するわ。……それでは次の方、前へ」

「はい」

先頭に立っていたシーカーが魔法陣の中へと移動した。緊張から足を引きずるようにゆっくりとである。そして時間をかけて彼は魔法陣の中心へと到着した。すると、水晶球が青白い光を放つ。光はもやのように辺りをつつみながらも、やがて朧げな人型の輪郭を描いた。

「むむむ……」

魔王は急激に膨れ上がった神の気配に、思わず杖を手に取り身構えた。神がここに顕著しようとしているのだ。だが、神と戦うわけではないのすぐ構えをとぐ。

魔王がそうしている間にも、神はその姿を現した。ぼんやりとした光の塊がその輝きを増していく。

「汝は力を望むか?」

光の塊は心に染み入るようなずしりと重い声を発した。その問い合わせに男はただ頷くだけだ。

「では汝に我が力の一部を『えん

神がそう告げると同時に、水晶から光が飛び出て男にぶつかった。すると男は顔を形が変わりそうなほど歪め、膝を屈する。身体全体から脂汗が吹き出していて、その息はすでに絶え絶えだ。

「うがああー ぐおおー」

男は聞く人間の耳を引っ搔くような大きな悲鳴を上げた。ステンドグラスがじりじりと揺れ、シーカーたちはその苦悶に満ちた様子に顔を歪める。

男がもはや叫ぶ力すらなくなつたところで、水晶の光が収まつた。男はぐつたりと血の氣のない顔をして立ち上がる。すると、水晶から再び光が放たれ男を包み込んだ。男の顔色が赤く変わっていき、その手足に力が戻つていく。

「終わりよ。戻つて」

男があらかた回復したところで、シアは男に声をかけた。男は魔法陣からゆつくりと出て行く。そして鎧の中からクランカードを取り出した。

「やつたああ！ 大地神アーシア様だあ！」

男はカードを見ると大声を上げた。その様子に周りのシーカーたちががやがやとどよめき始め、場が騒然となる。

「マジかよ。羨ましいなあ、おい！」

「すげえ、どんだけ神殿に寄付したんだ？」

シーカーたちは口々にわざやきあい、わきほどの男に羨望の眼差しを送った。その一方で、魔王には何が起きたのかよくわからなかつた。

「なんだ？ おい、何が起きたとこりのだ？」

首を捻った魔王はとりあえず前にいたシーカーに聞いて見た。するとそのシーカーは魔王を田舎者でも見るよつた目でみる。

「大地神、しかも最高のアーシア様の加護だぜ。みんな驚いて当然だ」

「ふうむ、余にはいまいちその凄さがわからんな」

シーカーの男はハアとため息をついた。そして魔王の方に呆れたような視線を送る。魔王はその態度に不機嫌になるが、何も言わない。すると男は、何も言わない魔王に少し得意な顔をして説明を始めた。

「あのな、神にも格があるんだ。それで格の高い神が加護してくれればそれだけ強くなれるというわけなんだよ。えーと、確か大地神のアーシア様は五番目くらいに格の高い神だ。みんな羨ましくもなるだ」

「ほつ、そういう」とか。それでは逆に普通はざれくらいの格の神が加護をするものなのだ？」

「そうだなあ……。人からの受け売りだが、三十位くらいが普通で十位の加護となるとなかなか受けられないだそうだ。そんで、三

位以上となると歴史上に一人しかいないらしい。そいつの姉前はジーア・アルハルト。あの有名な聖銀騎士団の創始者だな。まあもつとも、大昔の人間だから誇張されてるんだと俺は思うがな

男は一息にこれだけのことを言つて、魔王にどうだ、とでも言わんばかりの顔をした。魔王はそれに素直にほつほつと頷く。すると男は気分が良かつたのか、笑いながら再び前を向いた。

それからしばらくの間、特に大したこともなく洗礼は進行していった。そして、前の男も洗礼をすませてしまい、とうとう魔王の順番がまわってくる。

「次の方、前へ」

シアの呼び出しに従い、魔王は魔法陣の中心に立つた。すると、水晶が不気味に紫に染まる。その様子にシアやシーカーはいぶかしげな顔をした。

「うーん、こんな色になるなんて……珍しいわ。面白い……

「おいおい、あつややばくねえか?」

「まがまがしい……」

シアやシーカーに混乱が広がった。水晶は青く輝く物で、紫に染まるなどありえないのだ。そのことを知つていいシアや一部のシーカーたちが、何が起きたのかと騒ぎ出したのだ。

魔王自身もただならぬ気配に身を固めた。神経を張り詰め、不測の事態に備える。すると、水晶から障気のよつた霧が噴き出して、

魔王の周りを包み込んでいった。

「これは障気……いや、微かに光の力も感じる……」

障気のような霧は魔王にも未知の物であった。少なくとも魔界に満ちている障気とは違う。微かに光の力が感じられたからだ。障気には光の力が混じるなどありえない。

魔王が霧の正体を考えあぐねていると、霧はいよいよ密度を増してきた。ステンドグラスにヒビが入り、太陽光がにわかに遮られる。魔王の後ろにいたシーカーたちは恐怖にかられて後ずさる。

「ろくでもない存在が現れるようだな」

魔王の鋭い感覚が何者かの接近を感じた。ひたひたとゆっくりだが確実に近づいてきている。光とも闇ともつかぬその存在は途方もなく巨大で計り知れない。下手に知ろうとしたならば、発狂しかねないほどの存在だった。

「へえ、あなたが客人か……。なかなか面白いわね」

洗礼の間にどこからか若い女の物とおぼしき声が響いた。ただしそれは、聞きようによつては男の声にも聞こえるし、はたまた老人の声にも聞こえる。ありとあらゆる声がそれぞれに不協和音を奏でたような声なのだ。

その声を聞いた途端、洗礼の間にいた魔王以外の人間たちは脳の情報処理に限界をきたしたのか気絶した。およそ人間に耐えられる声ではないのだ。しかし、人ならざる魔王は超然とした態度で虚空を睨みつける。

「何者だ？ 貴様は神なのか？」

「人間や他の連中はそう呼ぶわね」

「ならば姿を現せ」

「いいわよ」

霧が一点に集まり始めた。そしてだんだんと人の形になっていく。その存在感はさきほどの大蛇の神の比ではなかつた。文字通りの意味で存在している次元が違うのだろう。そのあまりの力に魔王すら背中に冷や汗を垂らす。

霧の塊の輪郭がはつきりとしてきた。若い女のよつな姿だ。長い髪を流し、ローブのようなゆつたりとした服を着ている。その顔は秀麗で、各パーツの調和を限界まで突き詰めたような感じであった。まさに人知を超えた美しさである。

「私の名はヘカテ・メンリ。天地開闢の前より生きる古き神よ。司るものは混沌ね」

姿を現した恐るべき超越存在は、魔王にそう名乗つたのであつた

……。

第六話 混沌神（後書き）

あらかじめ説明しておきますと、今回登場した聖銀騎士団というのは改訂前の銀の杯のことです。改訂にともない名前を変更したのでよろしくお願ひします。

第七話 はじめの一歩

第七話 はじめの一歩

暗雲立ち込める洗礼の間。そこは氣絶した人間が重なり合つて横たわり、ステンドグラスはひび割れ、淒惨な状況に陥つていた。

その部屋の中央で魔王と混沌たる神、ヘカテ・メンリは睨み合つていた。あたりの空気は張り詰め、時折火花を散らしている。魔王の顔は険しく、額から汗が滴つていた。

「なにゆえにここに現れたのだ？」

魔王は重い口を開くと、至極穏やかな口調でそう言い放つた。それを聞いたヘカテ・メンリは目を細めてけらけらと笑つ。

「なにゆえかって？　あなたが面白そつだからねえ、加護してあげよつと思つて。ただそれだけ、他意はないわ」

「ほつ……」

魔王は少し驚いたように言つた。そしてヘカテ・メンリの顔を見る。その顔は背筋を凍らせるような笑みを浮かべるばかりだ。

「他意はないよつだな」

「ええ、わかつたくれたよつね。それじゃあ形式に乗つ取りまして……。汝は力を望むか？」

「へカテ・メンリはからかうようにそう言つた。すると、魔王も曰元を歪めて、その称号に相応しく不敵に笑う。

「ああ、望もう」

「よろしい、では汝に我が力の一部を与へん」

ヘカテ・メンリは他の神に似せたのか、重々しく威厳のある声で、そう告げると去つていった。その存在感が空気に溶けるように消え、魔王の背筋が緩む。

だが次の瞬間、魔王の身体に激痛が襲来した。熱い物が皮膚の下や筋肉の中をうごめくような強烈な痛みと、果てのない違和感が魔王を襲う。しかし、魔王は無表情で眉一つ動かさない。痛みで騒ぐようなことは、彼の魔王としての矜持が許さなかつたのだ。

「……ふう。収まつたようだな」

魔王にとつて長い時間が過ぎたところで、ようやく身体の感覚が正常に戻つた。その時、魔王の顔がわずかだがやつれたように見えたのが、洗礼の儀式の凄まじさを物語つていた。

水晶が光つた。白い光が魔王の周りだけでなく、洗礼の間に満ちていく。すると、時が逆行していくように洗礼の間がもとに戻つていつた。ステンドグラスのひびが治り、気絶していた人間たちが目を覚ます。

「終わったようだな、どれ……」

魔王は手を握つたり開いたりして身体の具合を確かめた。さらに、

指先から小さな炎を出して魔力の具合も確かめる。すると、わずかではあるが力や魔力が増えていたのがわかつた。じつやら、これが混沌神の加護の効果であるようだ。

「むう、儀式が終わつたのならば早く魔法陣から出て。後が詰まつてゐるわ」

シアが魔法陣の中から出てこないに魔王に言つた。冷静でそつたない物言いは、さきほどのことなどしらないようである。どうやらヘカテ・メンリが気を効かせて記憶を改竄したようだつた。それは他の人間も同様のようで、魔王は騒ぎにならなくてほつと息をつく。

「早くと言つてゐるわ……」

「すまない、考え方をしていたのでな」

魔王はシアの冷たい声に、足早に移動した。そして、前に通つた道を通りてシェリカのいる場所まで戻つていつた。

「あつ、お帰り。結果はどうだつた？」

通路の扉を開けると、早速シェリカが声をかけてきた。心配で待つていたようだ。魔王はその様子に苦笑いを浮かべる。

「それなりと言つたとこだつた」

「はあ、それなりつてあんた……。まあいいわ、ちゃんと加護されたみたいだし。……じゃあこれから迷宮へ行くから、あんたのカードを見せてくれない？」

シェリカは頬を膨れさせると、魔王が手に取っていたカードに視線を向けた。魔王はその行動に、変な顔をしてカードを背中の後ろに隠す。

「どうして見たいのだ？ そなたには関係あるまい」

「関係ない訳ないでしょ。これから一緒にパーティーを組もうと思つてるんだから」

シェリカは腰に手を当て、ビシッと言い放つ。魔王はそれにきよとんと固まつた。シェリカがどうしてそんなことを言うのか彼にはわからなかつた。

「パーティー？ どうして？」

「はあ……あんたもシーカーで私もシーカー。それで同居してる。さらにお互いにソロで仲間募集中！ これでパーティー組まないなんてなかなかありえないわよ」

「……そういうものか？」

「やうこつものよー」

魔王はふつむと考え始めた。顎に手を当て、思考をめぐらせる。知識のない魔王にとつてシェリカの知識は魅力的だつた。だが、シェリカは足枷となりかねない。

しばらくして魔王は顔を上げると、見定めるような目でシェリカを見た。そして、軽いため息をつく。

「素質はあるな。ついて来るぐらになら出来るか」

魔王はシェリカには聞こえない小さな声でそういうと、カードを改めて出した。そして、険しい顔であらかじめシェリカに注意しておく。

「シェリカ、何が書いてあっても騒ぐなよ」

「そんな、別に騒がないわよ。はいこれ、私のカードよ。……ふふ、何が書いてあるのかな……」

シェリカは魔王に自分のカードを手渡すと、ワクワクした表情で魔王のカードを見た。そしてみるとつちに固まつていいく。そして次の瞬間……

「レベル五百に混沌神の加護！ あんた、冗談は服装と行動だけにしなさいよ！」

固まっていたシェリカが爆発した。顔を赤く染め、炎のような勢いで魔王に詰め寄る。しかし、魔王は詰め寄ってきたシェリカを冷静に宥めた。

「騒ぐなと言つたであらう。落ち着け」

「騒ぐなって言われてもねえ、限度つて物があるでしょ！ が！」

「騒ぎ立てたといひで事実は変わらんぞ。落ち着くのだ」

魔王とシェリカのやり取りはしばらく続いた。だがどうとう、シリカは怒鳴ることに疲れたのか肩をすくめて黙つた。そしてまた

しばらく経つてから口を開く。

「もういいわ。強いぶんには困ることはないし。では早速、今から家に戻つて迷宮へ行く準備をしましょうか」

「そうだな」

いつもして洗礼を終えた魔王とシェリカは、迷宮へ赴くべく一端家へと戻るのであつた。

陽光が街をあまねく照らし、腹を空かせた人々で街の店がいっぱいになる毎。迷宮都市の中央には今日も巨大なモニュメントのような石がそびえ、大きな影を作っていた。その影の中にある迷宮の入口に、一人のシーカがやつてきていた。魔王とシェリカだ。

「昨日も思つたんだけど、あんたその格好で迷宮に入るつもり？」

シェリカは魔王の昨日から変わらぬその格好を指摘した。深紅のマントに黒い杖をついた魔王の服装は、どう見ても迷宮には向いてなさそうだったからだ。

ちなみにシェリカ自身は動き易さを重視した軽い革の鎧を着ていて、腰には剣を下げている。駆け出しのシーカーに良くあるスタイルだつた。

「このマントと杖は共に最高級の品だ。これを超える装備などそうはない」

魔王は自信たっぷりにそう断言すると、杖を地面に叩きつけた。地面に敷かれていた石が割れ、深い亀裂が生まれる。

一方、杖の方はまったくの無傷だった。先端に付けられた纖細な装飾にもまったく変化は見られない。それが最高級の装備であることは明白だった。

「へえ、たしかに言うだけのことはあるわね。それなら装備に問題はないし、行くわよ」

シリカは納得したようにそう言つと、迷宮の入口へと入つていった。魔王もゆっくりとその後に続いていく。

魔王がわずかながら緊張した面持ちで、迷宮に一步を踏み出した。迷宮を守る結界は働くことはなかつた。魔王はようやく、迷宮に入ることができたのだ……。

第八話　迷宮第十階層

第八話　迷宮第十階層

「ほひ、これは見事だ」

迷宮の中に入った魔王は、その光景に感嘆したように声を上げた。黒く光る石が紙一枚入らないほどの精度で組み合わせられた壁に床。高い天井は神秘的に輝き、迷宮の中を暖かく照らし出す。さらに、一定の感覚で壁がへこんでいて、そこには人の背丈ほどの緑色の結晶が置かれていた。その様子はまさに超越的存在が造り出した迷宮にふさわしい。

シーカーたちは緑の結晶を中心に集まっていた。彼らは結晶に手を触れると次々とどこかに消えていく。魔王が田をこらして見てみると、一瞬ではあるが魔法陣が浮かんでいた。どうやら結晶には転移の魔法が込められているようだ。

「すごいでしょ。」こが迷宮第零階層、転移の広間よ。みんなここ

のクリスタルで迷宮の他の階層へ向かうの。」

シリカは別に自分の物でもないのに少し自慢げに言った。そして、魔王をさきほどの結晶の前に連れていく。これがクリスタルのよつだ。

「迷宮での階層移動は全部これを使うわ。使い方はね、手を触れて行きたい階層を言えばいいだけ。ただし、パーティーの中の誰かが行つたことのある階層か、今いる階層の一つ下にしか移動できないからね。」

「ずいぶん簡単だな。転移魔法はそう易しい魔法ではないはずだが……」

シェリカの説明したにあまりにも簡単なクリスタルの使い方に、魔王は少し驚いた。そして、クリスタルを軽く叩いてみたり、撫でてみたりして調べる。

だがその結果、魔王にも未知の技術が使われていることだけがわかつた。

「ちょっとあんた何やつてるの？ クリスタルなんて調べても何もわからないわよ。学者が何年かけてもわからんないんだから。そんなことより、早く行くわよ」

魔王の不可解な行動に、シェリカは少し苛立つたように言った。その手はすでにクリスタルに置かれている。出かける気満々のようだった。

「それもそうだ。我らはこれを見に来たのではないからな。ならばシェリカ、そなたはどこまで深く潜れるのだ？」

魔王はシェリカのもつともな意見に、クリスタルから目を離すと、ついでに質問をした。シェリカは不意の質問に戸惑つたがすぐに答える。

「一応十階まで行けるわ。だけどどうして？ まさかあんた……そこから行くつもりなの！」

「ああそりだが」

「あんたね、弱い初心者が最初から……ってあんたは強かつたわね」

ショリカは注意しようとしたところで魔王がレベル五百だったことを思い出した。初心者だが、レベル的にはレベル十のショリカの五十倍は強いのだ。十階層ぐらいのことはないはずだった。

「わかった、十階に行きましょ。ただし、迷宮の中は危険がいっぱいなんだからね！ 気をつけなさいよ」

「もちろんだ」

「よし、じゃあ迷宮第十階層へ！」

ショリカが気合いを込めてクリスタルに告げた。すると景色が歪み、浮遊感が魔王とショリカを襲う。魔王は初めての感覚になんとも言い難い不快感を覚えた。

「気持ちの悪いものだな。毎回こんな感覚なのか？」

十階層にはすぐについた。歪んだ景色が元に戻り、魔王の目に見慣れない景色が広がる。だが、魔王は額にしわを寄せて頭を抑えた。その様子はちょうど、一口酔いをしたようであった。

「酔ったのね。でも慣れれば感じなくなるわ。ほら、そんなことよりも周りを見てよー」

ショリカは魔王を立たせると、周りの景色を指差した。魔王はその熱心な様子に顔を上げて辺りを見回す。

「これはなかなかの物だな」

辺りには美しい鍾乳洞が広がっていた。滑らかな乳白色の鍾乳石が天井から下がってきていて、そこに滴る水が光を虹色に反射している。水は滴り落ちるたびにポシャリと音を立てて耳に快い。空気はひんやりと清涼で、そのわずかな流れが爽やかだ。

魔王はその様子に感心したようにつぶやいた。その顔色はすでに酔いから回復しているように見える。さすが魔王、こういう場合の回復力も尋常ではないようだ。

「感心するのも良いけど、そろそろ行くわよ」

シリカは感心しきりの魔王を引っ張ると、探索に出発した。曲がりくねった鍾乳洞の中を、二人はその天井に灯るわずかな明かりを頼りに進んで行く。辺りには水の滴り落ちる音と、二人の足音だけが響いた。

一人が奥に向かって歩いていると、岩の陰から黒いモンスターがたくさん飛び出してきた。モンスターは人間の上半身ほどの大きさで、闇色の翼と刃のよう光る牙を持っている。

「キラーバットよ！ 噛み付かれたら最後、血を吸い付くされるわ！」

シリカはそう叫ぶやいなや腰から剣を抜き放った。鉛色の剣が鈍く輝き、閃く。長い髪がはらりと広がり、シリカはキラーバットを袈裟に切り裂いた。モンスターの悍ましい断末魔とともに鮮やかな血の花が咲き、シリカの鎧が紅に染まる。その一連の動きは舞っているかのように流麗だ。

シェリカはその後も舞を続けた。一回、二回と鉛色の刃が閃くたびにキラーバットの命は露となる。彼女はその白く華奢な身体を紅に染めながら、美しい顔に凄惨な表情を浮かべていた。その凜々しく戦う姿は天上の戦乙女に匹敵するだろう。

しかし、キラーバットは無数にいた。しかも、後から後から無尽蔵とも言えるほど出てきている。これがこのキラーバットの恐ろしいところだ。一匹では弱いものの、数の力で敵を圧倒するのだ。その数の暴力とも言えるキラーバットの群れに、さすがのシェリカもわずかづつではあるが息が上がっていく。それを見ていた魔王は、キラーバットの群れに煙たいよつな顔をした。

「うつとうしいな。余がまとめて退治してやろう。シェリカ、少し下がつておれ」

「わかつたわ、任せたわよ！」

魔王は、そう言ってシェリカを下がらせた。そして彼女が自身の後ろに下がったことを確認すると杖を振り上げ、不敵に笑う。そのまがまがしい様子にキラーバットは何かを感じてキイキイと騒ぐものの、手遅れだった。

「カッター・ストーム」

魔王の唇が呪文を紡いだ。杖の宝玉が魔性に輝き不可視の力、魔力が渦巻く。周囲の空気が引き締まり、痺れるようになった。その変化にシェリカは思わず身を竦める。

暴風とともに、無数の見えない刃が放たれた。刃は唸りを上げな

がら、キラーバットを切り刻む。キラーバットは悲鳴すら上げずに肉の塊へと変えられていった。鮮血の雨が降り注ぎ鍾乳石を紅く染め上げていく。辺りはたちまち醜惡な肉の塊と血が流れるのみとなつていた。しかし、その血や肉の塊は淡い光を放つて無に還つていった。そしてそのあとには無数の球体だけが残される。

じつしてキラーバットをあらかた倒したところで魔王は満足そうに頷いた。彼の前には無数の球と、魔法に巻き込まれたのか鋭利な切り口を晒す岩だけが残つていた……。

第九話 換金所にて

第九話 換金所にて

薄暗い鍾乳洞のような迷宮第十階層に魔王とシェリカはいた。彼らの周りには無数の黒い球が散乱していて、シェリカはその様子に唖然している。その目は飛び出しそうなほど開かれていて、口も半開きだ。

「さすがレベル五百……あれだけの群れを一撃とはね……」

しばらくして精神的に復活したシェリカは呆れ果てたようにつぶやいた。魔王が魔法で倒したキラーバットはたしかに弱いモンスターだ。だが、数十単位で一掃しようとしたらかなりの大魔法が必要だろう。とても、今のシェリカには無理な芸当だ。

数値の上ではわかつたつもりであつたが、この出来事でシェリカは改めて魔王の力を認識した。そして微かな畏怖と大きな頼りがいを感じるのであつた。

「これで邪魔はいなくなつたな。先へ進むぞ」

「ちょっと待つて！ 魔力球を回収しなきや」

魔王が先へ進もうとすると、それをシェリカが呼びとめた。そして彼女は腰に付けていたポーチに落ちていた球をどんどんとほうり込んでいく。魔王はその様子を物珍しそうに見ていたが、やがて小さな疑問を抱いた。

「こんな球をそんなに集めてどうするのだ？ それに、どうしてそのポーチは膨らまない？」

魔王はシェリカのポーチを指差した。すでにその体積以上に球が詰め込まれているはずのポーチは何故か膨らんでいない。シェリカはこりやだめだとため息をつくと、魔王の質問に答えた。

「はあ、戦闘力は最強だけど知識はルーキー以下ね。仕方ない、教えて上げるわ。この球は魔力球と書いてクランで換金できるのよ。だから集めてるの。で、このポーチはシーカー愛用のデラックポーチ。魔法が掛けられていてどれだけ物を入れても膨らまないし、重くもならないのよ」

「なるほど、それならば余も手伝ってやるわ」

魔王はそう言つと、球を集めのを手伝い始めた。一人でやればさすがに作業は速く、たくさん落ちていた球もあつという間に少なくなつていく。

「これで最後だ」

魔王が最後の一つをポーチに入れた。シェリカは辺りを見回して他に落ちていないことを確認すると、立ち上がって腰をぽんぽんと叩く。

「全部拾えたよ。それじゃ先に行きましょ。うか

シェリカはそう言つとまた歩き出した。魔王も後から続していく。二人で歩いていくその様子は娘とそれを後ろから見守る父のようだつた。

その後は特に何事もなく探索は続いた。シェリカや魔王は軽い足取りで迷宮の奥へと進んでいく。時々現れるモンスターたちも、シェリカの剣と魔王の魔法の前に、またたく間に魔力球と化していった。

そうして迷宮を探索している時の魔王は散歩しているかのようだつた。いや、散歩よりも緊張感がなかつたかもしれない。なぜなら彼がいつも散歩していた魔王城周辺には、野生の上級モンスターたちがうるさいしていたのだから。

「もう帰らない？ もう足と集中力が限界よ」

迷宮第二十階層。そこクリスタルの前で、ついにシェリカがそう提案した。彼女はパンパンに張つた足を抑え、辛そうにしている。魔王がいるからそれほど負担はなかつたにしろ、一度に十階も潜つたのはやはりきつかったのだろう。

「仕方ないな。戻るか

「ええ、すまないけどやうしましょ」

シェリカは申し訳なさそうにうなずいた。こうして魔王とシェリカは今日の探索を終え、地上に戻つたのだった。

シーカークランの中にある換金所。迷宮で手に入る魔力球をはじめとするさまざまなアイテムを換金できるそこは、今日もシーカーで賑わっていた。三つあるカウンターをシーカーたちが入れ替わり

立ち替わり利用している。そこへ、魔王とシリカがやつてきた。

「あーり、Jの間の魔王さん！」

魔王たちが向かつたカウンターに座つてはいたのは、いつかの受付嬢であつた。彼女は魔王とシリカの姿を確認すると、にっこりと微笑む。

「そなたはいつぞやの受付嬢か。換金もしているのだな」

「はい、そうですよ。クランも人手が足りなくて。あなたこそ、そちらの女の子はお仲間ですか？」

「まあそんなどうだ」

魔王と受付嬢はそのまま談笑を始めそうな雰囲気になつた。だが、その流れをシリカが打ち切つた。彼女は魔王の前に出ると、カウンターの上にポーチを置く。

「そんなことは良いわよ。それよりこれ、換金して」

「はい、少々お時間を……あらら、ずいぶん集めましたね」

受付嬢はポーチをひっくり返すと、その中に入つていた魔力球の数に目を丸くした。そして虫眼鏡を取り出してひとつひとつ確認していく。

「全部で百一十三個、十一万三千ルドになりますね。……ふう、しかしよくこれだけ集めましたね。つて魔王さんなら出来ますか」

受付嬢は一瞬訝しげな顔をしたが、相手に魔王がいたことを思い出した。魔王だったら何が起きてても不思議ではない。

受付嬢は気を取り直すと、カウンターの中から袋を取り出した。そして金貨を十一枚と銀貨を三枚シェリカに手渡す。シェリカはその金額に顔をほころばせた。

「結構あつたわね。今田はこれでじ馳走でも食べるわよ」

シェリカはホクホク顔で換金所から出て行こうとした。するとその時、換金所の中の雰囲気がにわかに変わった。そして換金所の入口付近にいたシーカーたちがざわめき始める。

魔王やシェリカが何事かと入口の辺りを見てみると、そこには十人ほどの異様な雰囲気のシーカーたちの姿があった。いずれも歴戦の強者という雰囲気を放っていて、鎧や服に揃いの銀のブローチを嵌めている。魔王が目を凝らして見ると、ブローチは杯とそれに巻き付く蛇をあしらった物であった。

「また嫌な連中が……。魔王、行くわよ」

彼らの姿を見ると露骨に顔を歪めたシェリカ。彼女はささつと魔王の手を引いて換金作業をしている彼らの後ろを通り抜けようとする。

だがその時、集団の先頭にいた女が後ろを歩くシェリカに気づいた。そして彼女はシェリカたちの前に立ち塞がる。ちょうどシェリカと同じくらいの年の女で、水晶のよつな水色の髪と翡翠色をした瞳、そして何より顔に張り付いた仮面のような笑みが特徴の女だった。

女はショリカの前に立ち塞がると、少し目を見開いた。そしてシリカの後ろにいる魔王を何回か見ると、耳にかかる甘つたるい声でシリカに話しかける。

「おやおや、私たちを無視していかれるお積りでしたか？　まつたくずいぶん私たちのことがお嫌いのようですね。……それより、そちらの方はもしかしてあなたのお仲間ですか？」

「わうよ、悪い？」

「いえいえ、逆ですよ。私はむしろ私たち聖銀騎士団の誘いを頑固に断り続けていたあなたに、果たして仲間なんてできるのか心配していたくらいなのですからね」

女は形の良い薄い眉を寄せた後、すぐに芝居がかつた動作でおどけて見せた。シリカはそれを見た途端、きつに目つきで女を睨む。だが、女は軽薄な笑いを浮かべるだけだった。

「心配ありがと。でもこの通り、ちゃんとできたわ。……もう少し
いから行くわね」

「そうですね。では」機嫌よつ

シリカは何か言いたそうな魔王を引つ張つて換金所から出た。そして拳をにぎりしめ、顔を真っ赤にする。そのただならぬ様子に魔王はシリカに質問をした。

「あの女は？」

「あいつはコリアス。一応最強と言われてるギルド聖銀騎士団のリーダーよ」

「ほひ、ならどうしてそんなに仲が悪いのだ?」

「あいつは氣味が悪いのよ。それで生理的に合わないというかなんとか……。それに私の親が有名なシーカーだったからか、やら熱心に自分のギルドに勧誘してくるし。でね、それを断り続けてたら仲が悪くなつたというわけよ」

「そういうことか。たしかにあの女は得体が知れないからな」

そういうと、魔王はコリアスの目を思い出した。人間のものであるはずのその目からは、何故か魔族にも似た邪悪な気配が感じられていた。加えてその身体からもどこか形容しがたい違和感を魔王は感じている。シェリカは無意識にそれらを感じてコリアスを避けていたのだろう。

「もうあんな奴のことは気にしないで置きましょ。お腹も空いたし、早くご飯を食べたいわ」

少しして機嫌を直したシェリカが魔王にそう告げた。魔王もそれにたいして素直に頷く。彼も腹は空いていたようだった。

こうして意見の一一致した一人は夕食を食べるべく街へと出て行つた。だがその一人の姿を後ろからコリアスが目を細めて睨んでいた。

「あの男……どうにも気になりますねえ。ちょっと試してみましょうか……」

コリアスの微かなさやきは虚空に消えていった。そして、その
つぶやきに魔王やシリカが気づくことはなかった。

第十話 酒場での話

第十話 酒場での話

迷富都市は夜になると昼とは異なる顔を見せる。昼には営業しない酒場やその手の店が営業を始めて妖しい雰囲気を醸し出すのだ。

あちこちに灯る明かりに朱く照らされながら、魔王とショリカはそんな迷富都市の繁華街を歩いていた。通りにはすでに酔っ払ったシーカーが眠りこけていたり、もはや服とは呼べないぐらい大胆な服を着た商売女が愛想を振り撒いていたりする。通りの酒場やそういう店はおおにぎわいで、夜だというのに昼以上の喧騒にあふれていた。

魔王は歩きながら騒々しい街の様子を興味深そうに見ていた。すると、前を歩いていたショリカがくるりと横を向き、細い路地に入つていく。魔王はスッと眉を寄せた。

「ビ」へ行くのだ？ 店は「」にあるだろ？

「私の行きつけの店は「」にあるの」

「ほひ、そうか。なら良いのだが

魔王が納得すると、ショリカはすたすたと歩き出した。表通りとは違つて暗い裏通りを足早に歩いていく。周りの建物からわずかにこぼれる光だけが、彼女の足元を照らしていた。

そうして少し歩いたところで、ショリカの前方に明るい建物が現

れた。暗い海にぽつんと浮かぶ光の島のようである。それはどうやら酒場のようで、『ヒヨドリ亭』とかされた文字で書かれた看板を掲げていた。

「着いたわ、ヒヨ

「ふむ、なかなか趣のある店だな

魔王はヒヨドリ亭の外観をあらかた見てうなずいた。時代を感じさせる木の看板に、わずかに苔むした壁。その扉はこじんまりと小さく、瀟洒な取っ手がついている。それらは全体として品の良さを感じさせた。

シリカは取っ手を握ると、少し力を込めて引いた。木の軋むギシリといつ音が響いて扉がゆっくりと開かれていく。そして、扉が開かれると中から微かな酒の香りが漂ってきた。さうにその香りとともに、老人のものとおぼしき声も一人の耳に届く。

「おや、シリカちゃんか。よく来たのう。……ややつ！ その男はもしかして彼氏か？」

「違うわ、ただの仲間よ」

「なんじゃ、びっくりさせおつしから。わしの心の癒しが取られたかと思つたぞい」

「心の癒しつて……まあいいわ。魔王、いらっしゃに来て

シリカはカウンターの真ん中の席に陣取ると、その隣の椅子をぽんぽんと叩いた。魔王はその言葉に従い、促されるまま椅子に腰

掛ける。椅子に座った魔王がざつと見渡すとカウンターには他に客はおらず、店全体でも数人しかいなかつた。

マスターは一人が席につくと、水の入ったグラスを差し出した。さらにそれと一緒に薄い紙も差し出す。その紙の一番上にはメニューと書かれていた。

「何にする？ 私はブフーの石焼きステーキセットにするけど」

「ならば余もそれにあわせようか」

魔王はメニューに目を通した後でそう言つた。それを聞いたシェリカは手を挙げて、すぐにマスターに注文する。するとマスターは目を細めて満面の笑みを浮かべた。

「ずいぶんと景気が良いのうー。何か儲かつたのか？」

「今日はこの魔王のおかげで迷宮にたくさん潜れてね。だから結構稼げたのよ」

「ほう……」

マスターがにわかに手を止めた。そして持つていた包丁を置いて真剣な目つきで魔王を見る。その表情は険しく、直踏みをしているようであつた。その小さな身体から刺すような殺気が放たれて、魔王はそれに背筋を冷やす。

「なるほど……確かに凄まじい達人のようじや。……レベルはどう見ても百は超えるの」

「良くわかつたな。その通りだ」

魔王は感心した様子で老人を見た。すると、老人は照れたのか頭をカリカリと搔きはじめる。魔王はそんな老人を見てわずかに緊張を緩めた。

一人を見ていたシェリカはホッと大きなため息をついた。そして、店の中をズイツと見渡す。シェリカの目に青い顔をして食事に手がつかない客の姿が飛び込んできた。

「ちょっとあんたたち、殺氣の出し過ぎよー。みんな怖がってるじゃない！」

「いや、すまんかった。昔の癖でついな……」

「余もやつすぎたな。すまぬ」

魔王とマスターはそういうとおとなしくなった。そして、マスターは注文の料理を一人の席に運んできた。鉄板の上でジュー・ジューと音を立てるステーキは、いかにも美味そうである。魔王もシェリカもそれを見て、頬を緩ませた。

「いただきま～す！ はぐはぐ……う～ん、おいしいー！」

「肉の味といい柔らかさといい、素晴らしい出来だ」

魔王もシェリカも次々と勢いよく料理を食べて、皿を空にしていった。マスターはそれを見てウンウンと頷いている。そしてあつという間に一人は食事を平らげた。シェリカは満足そうに腹をさすつて恍惚とした顔をしている。だがその時、ふと魔王があることを

口にした。

「……そういえばさきほど、昔の癖が出たといつていたがそなたはもともと何をしていたのだ？」

「うぬ？　ああ、わしも昔はシーカーをしておつたんじゃ。これでも若い頃は闘神祭に優勝したこともあるのじゃぞ」

「闘神祭？」

魔王はあごに手を当てて首を捻つた。そして困ったようにショリカの方を向く。ショリカは魔王の言わんとしていることを察すると呆れたような顔をした。

「闘神祭といえば、毎年この迷宮都市で開かれる地上最強を決める武道大会じゃない。世界的に有名だけどあんた、知らなかつたの？」

「閉鎖的な土地で暮らしていたのでな」

「閉鎖的ねえ……」

ショリカは疑わしげな顔になった。彼女は魔王の顔を細い目でじつと見つめる。魔王はその視線から罰が悪そうに目をそらした。それによつて二人の間に何とも言い難い悪い空気が流れる。だがここで、マスターが気を効かせたのか一人に話しかけた。

「まあまあ、仲間なんじやから仲良くしなさい。それより一人とも、肝心の探索はどこまで進んでるのかの？　五十階層を超えれば闘神祭に出られるぞい」

「二十階層までよ。でも五十階層か……まだ遠いわね。マスター、闘神祭まであとどれくらい？」

「え~と、確かあと一月ほどじゅったな

「何とかいけるかな？ 魔王、どう頑張り？」

シェリカは身体を魔王の方に向けた。その目は上目遣いで何かを魔王に訴えかけているようだ。魔王はそのまま見てしばし考え込む。

「一月か……。この迷宮に特別に強い門番のようなモンスターはないか？ いないのであれば十一分に可能だろ？」

「門番ねえ……。確かに五十階層に巨大な龍がいるって聞いたことがあるけど、数百年もずっと眠ってるそつだから大丈夫よ」

「そうか、ならばよかつたな」

魔王がそういうとシェリカは白い歯を見せてニッと笑った。そして、彼女は力強く宣言する。

「よし決めた！ 私たちの当面の目標は、五十階層まで到達して闘神祭に出ることよー！」

魔王はシェリカの宣言に笑つてこたえた。マスターもその様子を微笑ましく見守っている。こうして魔王とシェリカは、当面の目標として五十階層を突破し、闘神祭に出ることを決めたのだった。

第十話 酒場での話（後書き）

話の展開上、新キャラが登場しました。ですが今後の展開は改訂前から大幅に変えるつもりはありません。

第十一話 巨大龍、復活！

第十一話 巨大龍、復活！

魔王の迷宮初探索から一週間が経った。あれから一人は順調に探索を続け、今日も朝から迷宮に潜っていた。

「エイ！ ヤアア！」

薄暗い鍾乳洞のような迷宮第一十七階層。岩だらけで狭く水の滴るそこで、シェリカと魔王は襲い掛かってきたモンスターと戦っていた。暗闇にあるわずかな光で剣先が煌めき、魔王の杖が風を切つて唸る。剣が光り、杖が唸るたびに一人を襲う小さな黒い影は、血と命を散らしていった。

二人に襲い掛かっているのはダークゴブリンというモンスター。黒い小さな子供のような姿をしていて、岩陰から飛び出して攻撃してくれるモンスターだ。だが小さな身体に反してその腕力は強く、手に持つこん棒での打撃が厄介なモンスターである。

それをシェリカと魔王はさきほどからずっと相手にしていた。迫るこん棒を巧にかわし、すれ違い様に剣や杖の一撃を放つ。そして一体一体、倒しているのだがなかなか数が減らない。相当大きな群れに当たってしまったようだ。

「魔王、私はもうちょっと限界よ！ 一人でなんとかできる？」

「任せておけ」

腕が動かなくなってきたショリカは魔王に後を任せた。後を任せられた魔王はシェリカの前に立つと、杖を構えて呪文を紡ぎ出す。

「カッター・ストーム」

暴風と風の刃が放たれた。刃は硬質な音を奏でて、死神の鎌よろしくダークゴブリンに襲い掛かかる。またたく間にゴブリンの外皮は裂かれて血や醜悪な肉が飛び散り、迷宮の岩が紅に染め上げられる。何だつたのかわからぬほど原形を留めなくなつたゴブリンたちは、すぐに魔力球へと姿を変えていった。だが、キラーバットとは違つてゴブリンには多少の知恵があつた。いくらかのゴブリンがすばやく岩陰に隠れて、吹き荒れる破壊と殺戮の嵐をやり過ごしたのだ。

「逃げるか。ならば……」

魔王の口が今度は違う呪文を紡いだ。辺りの空気がゾワリとして、ダークゴブリンたちはギャアギャアと奇声を上げる。そして手にしたこん棒を次々と魔王に投げつける。だがそんなもの通用するはずもなかつた。

「ファイア・フロッズ」

魔王の杖から炎が巻き起こつた。炎は迷宮の中を赤々と照らし、熱の大洪水を起こしていく。ゴブリンたちはまたもや岩に隠れてやり過ごそうとしたが、圧倒的な熱波の前に岩の盾は役に立たなかつた。巻きのように渦巻く業火は岩」とゴブリンたちを飲み込んでいく。その炎の前にゴブリンの身体はたちまち焼け焦げた。炭と化した外皮は崩れ落ちて、沸騰した血が身体中から吹き出す。吹き出した血は蒸発して、辺りに鼻が効かなくなりそうなほどの鉄の匂いが

充滿した。その地獄の中で、ゴブリンたちは魂を凍えさせるような断末魔を上げて、魔力球になつていつた。

「終わったな」

魔王は血と肉の焦げた臭いに顔をしかめながら、そうつぶやいた。その言葉に後ろにいたシェリカもホッと一息つく。そのとき彼女の顔は青く、さきほど繰り広げられた光景に衝撃を受けているようだつた。

「……ずいぶんたくさん居たわね。普通は出ても四匹がいいところよ

「他のモンスターにも良く遭遇したからな。何があるのやも知れん」

しばらくたつた後で魔力球を拾いながら、シェリカと魔王は眉を歪めた。いつもと比べてその数が多く過ぎるのだ。モンスターというのは変化に敏感だ、こういう場合は何かある。嫌な予感を一人は覚えた。二人の背筋がひんやりとする。

その後二人は、大量に現れるモンスターたちに辟易しながらも、三十階層まで潜つた。そして、シェリカが集中力と体力が限界を迎えたので二人は今日の探索を打ち切つたのだった。

一人が迷宮から帰ろうとしていた頃、迷宮第五十階層を一つのパ一ティーが探索していた。男一人に女三人という編成の彼らは、こなれた様子で迷宮を奥へと進んでいる。

迷宮第五十階層というのは三つの空間が連なるような形をしてい

た。最初のクリスタルが安置されている空間に、下へと下がるためにクリスタルがある空間、そしてその二つの空間の間に有る巨大な空間だ。

その四人のパーティーは、今ちょうど始めのクリスタルがある空間を抜けて、中央の空間へと差し掛かるところであった。空間と空間の間に有る人に倍する大きさを誇る鉄の扉をこじ開け、彼らは中に入っていく。

「り、龍ですか～！」

彼らの目に小山のような龍の姿が飛び込んできた。わずかな光にもぎりつく刃のような牙に、燐し銀のような鱗。その身体は小山のように大きく背中の上に人が数十単位で乗れそうなほどだ。さらに生物として圧倒的なまでに高位のその存在は、極地の風のように凍てつくプレッシャーを放つていた。

その姿を見た神官服を着た少女は顔を強張らせて叫んだ。だがそれを見ていた戦士とおぼしき男は、キザな笑いを浮かべると少女の頭をくしゃくしゃと撫でる。そして、余裕ぶつた態度で少女に言った。

「あの龍はもう何百年もああして寝ているんだそうだ。動くことはないよ」

「はふう……そうなのですか。なら安心ですか」

少女は頬を朱く染めて安心したような顔をした。男はそれを確認すると悠々とした態度で歩き始める。その後を、神官服の少女を含めた三人の少女たちはどこかふわふわとした足取りでついていった。

その時、彼らの足元がわずかに揺れた。四人の間に緊張が走り抜け、彼らは歩くのを止める。まさかと思って彼らは恐る恐る龍の方を見た。

すると、眠れる龍の下に魔法陣が浮かび上がっていた。紫に揺らめく光を放つそれは、巨大な龍を煌々と照らしだしている。そこからあふれる膨大な魔力は洪水のように辺りを満たしていった。

「やばくないですか、フレイトさま！」

「だ、大丈夫だ！ それにもし襲ってきたとしても俺が守つてやるからな！」

パーティーの少女たちがすがるような目で見つめると、フレイトことさきほどの戦士はどこか寒い笑いを披露した。そして、腰の剣を抜くと龍に向かって構える。だがその腰は引けていて、とても勝つ自信はないように見えた。

その間にも自体はどんどんと悪化していた。魔法陣からあふ出する魔力の量は増え、地面の揺れは大きくなる。数百年の歳月をかけて龍の身体に積もっていた埃や砂はあらかた舞い落ちて、その中から銀に輝く身体が現れ始めた。

そしてとうとう、龍の瞼が動き出した。数百年もの間、閉じられ続けていたそれがゆっくりと開いていく。その中からは白い光と殺気がほとばしり四人の身体を石のことく固めた。殺気と魔力が交錯して辺り空中にバチバチと青い火花が咲く。

やがて、完全に目を開いた龍はギシギシと金属が擦れあうような

音を出しながら起き上がった。その身体は数百年の停滞から解放されて生命力がみなぎっていた。

「グアオオオ……」

天へ届きそうな咆哮が迷宮内に轟き、空気が激震した。地面はわずかに裂けて天井から石が降り注ぐ。その雄叫びをまともに聞いた四人はその場にへたり込んだ。こうして龍が、実に数百年もの眠りから目覚めたのであった。

第十一話 仲間の必要性？

第十一話 仲間の必要性？

五十階層の龍の復活は、逃げ延びた四人のシーカーたちによつて即座にクランに伝えられた。その噂はたちまち迷宮都市中に広まり、シーカーたちに騒ぎが広がる。その騒ぎの範囲には、シェリカや魔王も含まれていた。

「なんでも五十階層にいた龍が復活したそうよ……」

朝日に照らされたシェリカの家の食卓。そこでシェリカが困つたように切り出した。その顔はしょんぼりとしていて、元気がない。昨日、クランに張られた貼り紙を彼女は見たのだ。

だが、そんなシェリカの顔を見ても魔王はまったく動搖しなかつた。そして彼はスープを一口啜るとシェリカの方にゆっくりと振り向く。

「大丈夫だろう。昨日の貼り紙にはすぐに対策をすると書かれていたではないか」

「確かにそうだけど……」

魔王の言う通り、貼り紙には確かに対策をすると書かれていた。だが、シェリカにはどうにも嫌な予感がしたのだ。それに、貼り紙にしても対策しませんなどと書くはずないのだから、あてにはならなかつた。

シリカが内心で不安になつてゐる一方で、魔王はいつもと変わらぬ様子であつた。温かいパンとベーコンエッグを行儀良く食べて、時折スープを啜る。しばらくして、それが無くなると、彼は探索の準備をするために部屋へと戻つていつた。

そのまつたくいつもと変わることのない超然とした態度に、シリカは呆れたような感心したような不思議な気分になつた。だが、そうして感慨に耽つてゐるわけにもいかないので彼女も出掛ける準備をする。

いりつして出掛ける準備をした二人は朝からクラランへと出掛けいつたのだった。

シーカークラランにあるクエスト専用のカウンター。朝からたくさんのシーカーたちが出入りしているそこで、クラランの職員とシーカーたちが揉めていた。おなじみの受付嬢とユリアス率いる聖銀騎士団である。

「これは……一体……」

「書いてある通りですよ。なにぶん我々も忙しいものでしてね」

「しかし、これは……！」

受付嬢はさきほどユリアスから手渡された紙を手に憤慨した。そこには大きく『依頼辞退届』と書かれている。ユリアスたち聖銀騎士団は、クラランの出した龍討伐の依頼を受けないつもりなのだ。

普通、このようなクラランからの依頼は義務でこそないが引き受け

るのが通例だ。それを突っぱねられたのだから受付嬢が怒るのも無理はなかつた。

だがユリアスも彼女が怒ることくらい計算済みだつた。彼女は口元を歪ませてにやりと笑うと、そのまま畳み掛けるように受付嬢へ話を始める。

「闘神祭まであとだいたい三週間。我々はその間、少しだつて危険を冒すわけにはいきません。なにせ四連霸がかかってるのですからね。それくらいあなただつてとっくに存知のはずですよ」

「それはそうかもしだせんが……」

ユリアスの主張は筋が通つていた。そのため受付嬢は言葉に詰まつてしまつ。しかし、彼女はここで認めるわけにもいかなかつた。ユリアスたちが辞退すれば、他のギルドも辞退するのが目に見えていたからだ。

なので彼女は険しい顔をしたまま引き下がらなかつた。すると、ユリアスの顔がだんだんと険しくなつていく。そしてその迫力に受付嬢が押され始めた時だつた。

「まったく……とにかく無理な物は無理なのです。ちゃんとおきましたからね。それではみなさん、帰りますよ

ユリアスは苛立たしげにそれだけ言い残すと、ギルドのメンバーたちを引き連れてクランから出でていつた。そのあとには呆然とした表情の受付嬢だけが残される。するとその時、魔王とシェリカがクランの中に入つてきた。

「あー、どうしたの？　まかーんとした顔して」

「あー、シリカさん！　実はですね……」

受付嬢は話かけてきたシリカたちに事情をすべて説明した。するとシリカの顔がどんどんと赤くなつていぐ。コリアスたちの行動に怒つていいようだつた。

「あいつ何を言つてゐのよ！　私がガツンと言つてきてやるわ！」

義憤に燃えたシリカは、足を踏み鳴らしながらコリアスの元へと歩いて行こうとした。その顔は赤く額に何本ものしわが寄つてゐる。どうやら相当腹に据えかねてゐるようだつた。しかし、そんなシリカの肩を魔王の手が掴んだ。

「ちよつと何をするのよー」

「そなたが怒つたといひでコリアスは態度を変えないだらつ」

「だからつて放つておくれのはダメよー　龍は誰が倒すの？」

「ううむ……」

魔王は少しばかり困つたように頭を捻つた。彼は顎に手を当ててしばらく考え込む。そして、魔王が考えたあげく自分で倒そうと思つた時、シリカが妙案を思いついた。

「そうだ魔王。私たちで新しくギルドをつくりしや、それでこの依頼を受ければ良いのよー　どのみち五十階層はいかなきやならないんだし。魔王もいるし、強いメンバーを集めればきっとなんとかな

るわ

シェリカはそういう魔王と受付嬢を交互に見回した。受付嬢の方は顔が明るくなり、すぐに頷く。そして、遅ればせながらも魔王も頷いた。

「そうだな。今ここを仲間を作つておくと後々に役立つかも知れぬ」

「よし、決定。じゃあ早速メンバーを三人集めるわよ。ギルドは五人以上じゃなきゃ登録できないんだから」

シェリカは魔王それだけ言うと、さらに準備することがあるからといって家に帰つていった。魔王も受付嬢に別れの挨拶をするとシェリカのあとを追いかける。

こうして二人はギルドを結成するべく仲間を集めることとなつたのだった。

第十二話 真つ黒神官シア

第十二話 真つ黒神官シア

眞過ぎになり、けだるい太陽が迷宮都市を満たしている。その光をうつとうしく思いながら、魔王は自室の椅子で物思いに耽つていた。するとバタバタと足音が近づいてきて、部屋のドアがトントンとノックされた。

「魔王、入つていいかしら」

「構わぬぞ」

「そり、お邪魔しま～す」

シェリカは部屋に入ると、わきに挟んでいた何か薄い紙を広げた。そしてそれを魔王に見せる。魔王はそれを見ると怪訝な顔をした。

「それは？」

「チラシよ、わざわ作ったの。見てみて」

シェリカはそのチラシを魔王に差し出した。魔王はそれを受け取るとすぐにサッと手を走らせる。

「なるほど、良くていいな。だがこれには具体的なことが書いてないが良いのか？」

魔王はシェリカに不安そうな目を向けた。シェリカが渡したチラ

シには色鮮やかな文字で『パーティーメンバー募集中！ 詳しいことは一番通りハ番地のシリカ宅まで』としか書かれていなかつたのだ。

「詳しいことを書こうにも、紙に書くような実績がないじゃない」

シリカはそう言ってふうっとため息をついた。魔王はたしかにそうだと言葉に詰まる。その魔王の様子にシリカはニヤッと笑つた。

「ま、そんなこと気にしないでいいわよ。チラシに頼れない分は私達が直接勧誘すれば良いんだから」

「たしかにそうだ」

魔王は田を細め、微笑んだ。それにシリカも頷く。そうして二人は話し合いを終えると、朝食を片付け、出かけていったのだった。

シーカーたちで今田も混み合つシーカークラン。その片隅にある掲示板に、シリカと魔王はチラシを貼っていた。魔王がチラシを抑え、シリカがその四隅をピンで固定していく。

「これでよしー わあ、勧誘しに行くわよー」

「そうだな。だがどこへ勧誘しに行くのだ？」

「やうねえ、まず最初は神殿かしら」

「神殿？　どうしてそんなところへ行かねばならぬのだ？」

魔王は露骨に眉をひそめた。神殿が嫌いな魔王にとっては死活問題だった。しかし、シェリカはそんな魔王を軽くいなした。

「まず必要なのは回復役よ。それには神殿の神官が最適なの。だからよ

「それはそうかも知れぬが……。神官という人種は苦手だ」

「苦手つて……。神官はたいてい良い人よ？　すぐに仲良くなれるわ」

シリカはそれだけ言うと渋る魔王を引っ張つて行つた。その途中からは魔王も諦めたのだろう。ゆっくりとではあるが自分から歩き出す。

そうして神殿へと向かつて歩く一人。だがその姿を、クランに集まるシーカーたちの陰から見守る者がいた。

「いいわね……ユリアス様の計画通りだわ……。ふふふ」

闇色の傘を手にした妖艶な女は、その白く怪しい美しさを持つ顔を歪めて笑つた。そのこぼれ落ちそうな豊満な胸元には銀のブローチが冷たく輝いていた。

昼過ぎという時間のせいか、人影も疎らな神殿。その中にシェリカと魔王が入ってきた。一人はそうそうに通路の端に移動すると、

話し合いを始める。

「いい、優秀そうな神官を狙うのよ。ただし、あんまり偉そうに見える人はやめてね」

「ふむ、わかつた」

「よし、じゃあ勧誘するときは……」

シェリカは口に手を当てて「じょじょ」のような形を作った。そしてそれを魔王の耳へと近づける。魔王の方も彼女の方へと頭を移動させた。だがその時、一人の後ろから不意に声がした。

「何をやっているの？」

一人が振り向くと、後ろにはいつかの腹黒そうな神官がいた。彼女はどことなくだるそうに一人の顔を覗き込んでいる。シェリカが辺りを見回すと、神殿にいた人の大半がシェリカの方を見ていた。その恥ずかしさのあまり、シェリカは思わず顔を紅潮させる。

「たつ、大したことはないわよ！」

「ふふ、そう。ならかまわないわ」

神官はにっこり笑つて満足そうにそう告げる、神殿の奥へと去つていった。神官がいなくなるとシェリカと魔王は一息ついて、気を取り直す。

「恥ずかしかつた……。さてと魔王、神官を勧誘するわよ。私があつちに行くからあなたはあつちで頼むわ」

シェリカは魔王と反対側を指差していった。魔王はそれに深く頷いて了解する。二人は一歩に別れて歩き出し、神官の勧誘を始めた。

「はあ……なかなか難しいわね……あんたの方は？」

数時間後、シェリカがくたびれたような顔をして戻ってきた。力の抜けたような様子からして、勧誘は上手くはいかなかつたようだ。それにたいする魔王もろくな結果ではなく、肩をすくめて首を横に振る。

「はあ……」

二人の口から同時にため息が漏れた。あきらめにも似た停滞感が二人を覆う。不安だけが今の二人の友達だった。

「あなたたちまだいたのね」

さつきの神官が一人に声を掛けてきた。声には少しの呆れと、何をしているのかという興味が多分に含まれていた。

「さつきの神官さん？ 実は私達……」

シェリカが神官の質問に自分達の事情の説明を始めた。龍が目覚めたこと、自分達がそれと戦うべく仲間を集めていること……シェリカはそういう事柄がある程度神官に話してしまった。

すると神官は口元を抑え、くすくすと笑いだした。とても神に仕える者は思えない底知れない笑いだった。

「へへへへへ……面白そうだわ。……そうね、シーカーって儲かるの？」

シヒリカが説明を全て終えたところで、神官は「タータ」としながらそう言つた。シヒリカはその質問に妙な顔をしたが、すぐに答えた。

「たぶん儲かると思うわよ」

「具体的にいくら？」

「週に三、四回探索して一回あたり七万から八万ルドかしら」

「……！」

神官は蒼い目を極限まで見開いた。そして、懐からそろばんを取り出すと神業的な速さで弾く。やがてその計算が終わると、彼女は花が咲いたような満面の笑みで一人に告げた。

「私が仲間の話を引き受けたわ。私はシア、よろしくね！」

その時、シアの目には大きくルドのマークが浮かんでいるように二人には見えた。

第十四話 貧乏侍サクラ

第十四話 貧乏侍サクラ

太陽がやや沈んできた黄昏れ時。夕日に照らされた白昼の神殿の中で、魔王とシェリカは固まっていた。一人は石になつたように動かない。それをシアは奇異な眼差しで見ていた。

「どうしたの？」の私が仲間になつてあげても良いつて言つているのよ」

シアはからかうよつこ、なおかつやたらと偉そうな態度で言つた。それにたいしてシェリカは苦笑いをして応える。

「……こつと相談するから少し待つてね」

シェリカは魔王を引つ張り通路の端に移動した。そして魔王と額を寄せると、ひそひそと話し合いを始める。もちろん、シアに聞き取られなつよう細心の注意を払いながらだ。

「あの子、仲間にして大丈夫かしら？ ビックりどうみても金の亡者よ」

「

「余にもそのよつて見えるが……他にいのだから仕方ないだろ

う

「う、そこを言わると……妥協せざるを得ないわね」

話し合にはものの十秒で終わった。そもそも残念なことだが、話

し合ひの余地などなかつたのだ。シェリカは蒼い瞳を燃え尽きたようにしてシアに向き合ひ。

「ありがたく仲間に迎えさせてもらひましたわ。私はシェリカ、こつちが魔王。これからよろしくね！」

シェリカは満面の営業スマイルを浮かべて、空元気いっぽいに挨拶した。それに続いて魔王も会釈をする。すると、シアもまたお世辞いいっぱいの笑顔で答えた。ただし、二コツではなく二タツといった笑顔だったのだが。

「ではあらためて、よろしくね。……ふふふ

一人はどことなくきこちない握手をした。続いてシアは魔王とも握手をする。その後、三人は顔をほころばせて柔らかく笑いあつた。しかし三人は曲がりなりにも仲間になつたのだった。

宵闇に沈む迷宮都市。その南の地区に魔王とシェリカは来ていた。さらにシアも神殿にさつさと届け出を出して一人について来ていた。シーカーの支援も仕事としている神殿は、神官がシーカーになることを修行の一貫として認めている。だがそれでも、手続きに丸一日はかかるはずなのだが……。不良神官シアは仕事をサボつたらしい。

三人が来ていた南地区はいわゆるスラムである。そのため街はボロボロで通りの石畳みは剥がれ、地面が露出していた。さらに周囲の建物は煉瓦が欠け放題、壁に落書きはされ放題。いかにも浮浪者らしきボロを纏つた人間や、髪の毛を尖らせた男たちが闊歩してい

て治安は最悪だ。

「ねえ……。あんたの知り合いのシーカーってこんなところに住んでるの？」

シェリカが疑わしげな顔をしてシアに尋ねた。三人がこんなところに来ていたのは、シアの情報があつたからだ。いわく、仲間になつてくれそうな知り合いのシーカーがここにいると。

「大丈夫。私の記憶力はパーフェクト」

「そうなの？ ならないけど……」

眉を歪めて自信たっぷりな様子のシアに、シェリカも魔王も胡散臭いと思いつつも納得した。二人は眉を寄せながらもシアについて歩くのを続ける。

三人がそうしてしばらく通りを歩いていると、一軒の酒場が見えてきた。壁に落書きがされていて、看板は傾いている。その中からはきつい酒の匂いと、がやがや馬鹿騒ぎをする男たちの声が漏れてきていた。

「確かにここにいるはず」

蹴られたのだろうか、外れかかった酒場の扉をシアが指差して言った。シェリカと魔王は騒然としている酒場の様子に顔をしかめる。まるでどこかの闘技場のような雰囲気の場所だった。

「本当にここなの？ だんだんあんたの紹介しようとしてるシーカーの素性が心配になつてきたわ」

「余も少しばかり……」「うむ」

「ふふ、それについては心配いらないわ。ばか正直で凄い美人の侍
よ」

「侍？　へえ……珍しいわね」

シェリカは興味津々な目をしてシアを見た。侍といえばここから
遙か遠い東方の剣士のことである。迷宮都市には世界から人が集ま
るといつても、珍しい存在には違ひなかつた。

侍といつことばには魔王も聞き覚えがあるようであつた。彼はど
こか遠い田をして虚空を見据える。昔のこと思い出していふよう
である。

「ふむ侍か……。だが侍といえば堅物な者が多くつた覚えがあるな。
それがどうしてこのような街にあるのだ？」

「なんでも宿で寝てゐる間に路銀と刀を盗まれたんだそうよ。私が
彼女と知り合つたのも、私が困つてた彼女にお金を貸してあげたの
がきっかけ」

「そりなんだ。運の悪い人もいるのね……。つてあんた神官なのに
人に金貸したの？」

「ええ。悪い？」

「悪くはないけど……。ちなみに利率はどうぐらいい？」

「トイチよ

「ダメだこの子。シェリカはひとつもそう思つた。そのため彼女は黙り、しばらく沈黙が訪れる。

するとその時、酒場の中から激しく言い争つような声が聞こえてきた。

「おいらめえ、なに人の服に水をかけてくれてんだおらあ！」

「それはそつちの言い掛かりだ。私は知らん」

「ああん？ なめとんのかわれえ！ 外に出やがれ！」

「怒鳴」とともに、女が外に突き飛ばされてきた。継ぎ接ぎだらけの紅の着物と藍の袴を着た女だ。彼女は艶やかな長い黒髪を肩に流すと、吊り目がちな目で宿の中を睨む。その様子は一幅の掛け軸のよじで様になつていた。

女が吹き飛んできたすぐ後に、中から大男が出てきた。男は着物の女よりも頭二つ分ほども背が高く、がつしりと筋肉のついた身体をしている。

男は下品な笑いを浮かべ、剣を手でぶらぶらとさせていた。それを女は貫くような眼差しで睨んでいる。まさに一触即発。いつ戦いが始まつてもおかしくない。

「た、大変！ 魔王、助けるわよ！」

「待て、あの女はできる。わざわざ我々が手を出すまでもない」

魔王はそういうと唇を少し上げて微笑んだ。シアも着物の女の実力について何か知っているのか、ニタニタと笑つていいだけだ。エリカは一人の様子に、助けに行くことをやめて見守ることにした。

「サクラ、お前の腰にあるのが刀じゃなくてただの竹の棒だつて俺は知つてんだぜ？ 痛い目みたくなかつたらさつさと金払いやがれ。……まあ、金がないようだつたらその身体でも良いけどな！」

男が女ことサクラの波打つ胸を見て、よだれを垂らしそうなほど鼻の下を伸ばした。そしてその大きな果物ほどありそうな膨らみに勢い良く手を伸ばす。しかし、サクラはその手をぴしゃりと払い退けた。

「誰がお前など相手にするか」

「いいやがつたな！ 後悔してももう遅いぜー！」

男は大きく剣を振りかぶつた。サクラも腰に手をかけ、刀を少しだけ引きだす。だが、鞘から見えたのは銀色の輝きではなく茶色の物体だった。

「マジでそれでやり合つつもりか？ まあいいぜ、お前が怪我するだけだからな！」

男は気合いと共に剣を振り下ろした。人の背丈ほどもあるうかという巨大な鋼の塊が空を切り、唸る。その重量に見合つ破壊力を持つであろう剣がサクラに向かつて突き進んでいった。だが、サクラはそれを見据えても逃げることはなかった。

シェリカはその脳裏を過ぎたサクラの末路に耐え兼ね、目を開じた。キシンと鉄がぶつかったような音が彼女の耳をつく。その後、地面に何かが落ちたような音もした。

「そんな馬鹿な……嘘だろ……」

しばらくして男のつぶやくような弱々しい声が聞こえてきた。シェリカはその声に、何事かと固く閉じていた目を開ける。すると……

「なんで剣が真つ一つになつてんのよ……」

中心を、くつつけたらまた一つに戻りそうなほど美しく分かたれた剣。それを見て地面にへたれこみ、口をぱくぱくさせている男。そしてそれを見下ろしているサクラ。シェリカの目にありえない光景が飛び込んで來たのであった。

第十五話 集まる仲間

第十五話 集まる仲間

闇に沈んだ夜のスラム街。ヒヤリと風が吹き抜けるその真っ只中に、魔王たち三人はいた。三人とも、前方にいるサクラと大男の様子に視線が釘付けになっている。特に具体的には、竹光によつて斬られたとおぼしき剣に視線を注いでいた。

「魔王、何が起きたのよ！」

「気をつかつたのだな」

「気？ でも気使つても竹じや鉄を斬るのは無理よ」

「ふふふ、それがサクラにはできるのよ」

シアが突然、魔王とシェリカの会話に割り込んできた。そしてさらに気味の悪い笑みをこぼす。そのシアの表情にシェリカは容赦のない目を向けた。

「どうしてことなの？」

「サクラはああ見えて千年続く対鬼剣術の流派、北神星明流の継承者。愛用の『秋雨』でなら金剛石だつて斬れると豪語してるほどの達人なの。だから気を纏わせた武器で剣を斬るぐらい、簡単なはず

「へえ……。凄いのね……」

ショリカは感心したように頷くと、サクラに憧憬にも似た眼差しを送った。その目は純粹で曇りはまったくない。

一方、見られている方であるサクラの側には少し変化があった。呆然としていた大男が突然、サクラに詫びを入れてきたのだ。

「ゆつ、許してくれよ……なつ頼む！」

大男は地面に血がでそうな勢いで頭を擦りつけていた。その大きな身体が卑屈に小さくなっているのは、いかにも哀愁が漂っている。その背中は冷や汗なのか尋常でなく濡れていた。

大男の情けない姿と言葉にサクラは何も言わずに竹光をしまう。その目は男に呆れたようだつた。それに助かったと思つた大男はサクラにヘイコラ頭を下げて走り去つていく。

「まつたぐ。困つた奴だ」

サクラは肩をすくめてため息をつくと、酒場の中へと戻つていこうとした。そこでシアがサクラの肩を叩き、声をかける。

「サクラ」

「おおつ！？ これはシア殿。……すまぬが金の都合はまだ……。酒場でのバイトの話が上手くいかなくてな……」

サクラはシアに気がつくと申し訳なさそうに頭を下げた。さらに両手で揉むようにして、上目遣いでシアを見る。達人といえども、金を借りてはいる以上シアにサクラは頭が上がらないらしい。

「今日は別にお金の催促に来たんじゃないわ。ほら、一人とも二つ
ちに来て」

シアはサクラに顔を上げると、魔王たちを呼んだ。サクラは近づいてきた魔王たちをきょとんとした表情で迎える。

「二の方たちは？」

「私のシーカー仲間よ。今一緒にギルドを立ち上げようとしているの。二つちがシェリカで、二つちが魔王。仲良しくして」

シアは一人の紹介を簡単にした。それにサクラは納得すると、乱れていた着物を整えて自身も自己紹介をする。

「そうか。私はサクラ、東方から来た侍だ。修行の旅であちこちを巡っていて今はこの街でシーカーをしている……と言いたいところだが、荷物を全部盗まれてしまつてな。見ての通り、迷宮にも潜れずその日暮らしだ」

サクラはそういうと顔を俯けてしまった。嫌なことを思い出してしまったようだ。場が何となく氣まずい雰囲気となり、四人は沈黙した。しばらくして、沈黙に耐え兼ねたシェリカが場の空気を変えるべく話を切り出す。

「……えーと、サクラさんだけ。今、シアも言つたと思うけど私たち仲間を探しているの。あなた強そうだし、仲間になつてくれないかしら」

「うーん、困るなあ……。今の私にはまともな得物すらない。こんな状況で仲間になつては迷惑をかけてしまう」

「迷惑なんかじゃないわよー。高いのは無理だけど安い刀ぐらいなら用意してあげるわ」

「しかしセリまで世話になるのは……」

サクラは押し黙った。首を前に傾けてウンウンと唸つくる。提案を受けるべきかどうか考えてこるようだ。だがそこで、魔王が囁きかけるよつよつぶやいた。

「借りた物は返せば良い。だが、時は還らぬぞ。決断は早くする」とだ

魔王の言葉が重々しい響きをもつてサクラの心に染み入った。すると、サクラの目が変わった。そしてゆっくりと顔を上げる。

「……わかった。このサクラ、武士道に誓つてそなたらの仲間とならう

サクラはそう仰々しく宣言したあと、はにかんだよつな笑顔を見せた。三人もそれに微笑みで応える。

「ううして、また新たな仲間が増えたのであった。

迷宮都市の北地区。俗に富豪街と呼ばれるこの地区の端に、シリカの家は今日も変わらず佇んでいる。シアもサクラも今日からの屋敷に泊まることになった。しかし……

「ひどい……詐欺なの。富豪街の家なんて言つから期待してたのに……。とってもか弱い私にこんな劣悪な環境で暮らせといつのね」

「す、すばらしい家だな！　えつと……とにかくすばらしい家だ！」

ボロボロの屋敷の様子に、嘆泣をしてごねるシアに強張った顔で必死に褒めるところを探すサクラ。その様子に、シェリカは額に指を当てて呆れた。

「はあ、騒いでも家は立派にはならないわよ。ほら、せつと入るわよ。いい加減あきらめなさい」

「むつ……儲かつたら手入れさせてもうつわ」

きつぱりとした態度で言い切ったショリカに、シアも膨れながらもあきらめた。サクラも若干の家の雰囲気に引き気味になりながらも、家の門をくぐり抜ける。

その後、シェリカの案内した部屋にシアが恨み言を言つたり騒いだりしたが、サクラは慣れているのかこれといって文句を言つことはなかった。そのため、シア以外の三人はそれなりに平穏な朝を迎えたのであった……。

第十六話 魔王と買い物

第十六話 魔王と買い物

朝日にサンサンと照らされたシェリカの家。朝特有の爽やかな空気が家中を隅々まで満たしている。その清浄な雰囲気漂う食堂で、シェリカはたちは何故か疲れた顔をしていた。

「さつさと認めたら？ その方が楽になるわよ」

シェリカが呆然としているシアとサクラに諭すように語りかけた。二人はどこか気の抜けたような表情でコクリと頷く。その手には魔王と書かれたカードがあった。魔王のステータスを二人は見たのだ。

「……無駄のない身体つきに漂う強者の気配。嘘ではないようだ…」

…

サクラは魔王をひとしきり観察した結果、フウとため息をついた。レベル五百というのは本当のようだとサクラは本能的に悟つたのである。気配や身体つきが常人とはわずかではあるが違うのだ。

「一人ともわかつたようね。なら今から買い物に行くわよ」

シェリカは一人が落ち着いたことを確認すると、高らかにそう宣言した。それにたいして魔王が怪訝な顔をする。

「仲間探しはどうするのだ？ あと一人足りぬのであるひつ？」

「あんたねえ、サクラにあんな格好で仲間探しをさせつもり？」

みつともないわよ

シェリカはサクラをちらりと見たあとで魔王にたしなめるように言った。その言われように顔を赤くして怒鳴りつとするサクラ。しかし、彼女がそれをすることはなかつた。

「悔しいが文句は言えんな……」

継ぎ接ぎだらけでくたびれた着物に袴。それらはもう何日も洗われていないのか、汗で黄ばんでいる。さらに、ろくに舗装もなされていない場所で生活していたためか砂などがこびりついていた。

サクラの身体自体は清潔なようだが、正直近づくのはご遠慮願いたいような格好を彼女はしていた。ちなみに、シェリカやシアがそれを見兼ねてサクラに服を借したのだが、彼女は着ることができなかつた。胸がつかえて入らなかつたのである。

一応、シェリカとシアの名誉のために言つておくと一人のそれは小さいどころか非常に豊かである。

「じゃあ行きましょう。買い物のお金は私がサクラに貸すわ。十日で一割で勘弁してあげる」

サクラが黙つていると、シアが懐からひよこの形をした財布を取り出した。財布はパンパンに膨れていて、ひよこのはずが二ワトリのような大きさだ。

シアが財布のがま口を開けると、中には金色の硬貨が溢れ出しそうなほど詰まつていた。驚いたことに、財布の中身は全部金貨らしい。

「あんたどうやつてそれだけの金を稼いだのよ……」

「皆様からのお志を私が少しづつ預かって貯めた。でも大丈夫、運用して増やして戻すもの」

シアはショリカの質問にこれらと答えた。悪いとはまったく思つてないらしい。ショリカは神官の恐ろしさを垣間見たような気がした。

「サクラ、お金は私が払つてあげるわ。シアからは借りちゃダメよ」

ショリカはしばらくしてやつぶやくよう言つた。それにサクラは黙つて頷いたのだった。

迷宮都市を中心で横切る大通り。そこはいつもでも混沌とした賑わいを見せていた。石畳の広い通りにテントの露店商からしつかりした店構えの少し高級店、さらには怪しげな店まで様々な店が軒を連ねている。その通りを行き交う人も同様でシーカーから近所のおばさん、小金持のオッサンまで実に種類が豊富であった。

「なかなか賑やかなところだな」

「ええ、この迷宮都市の中心だからね」

初めてここに来た魔王は感心したように辺りに見回していた。魔界にはこれだけの活気がある場所などなかつたのだ。なので、彼は興味の赴くまま視線をあちこちに飛ばしている。

シアやサクラも普段はあまりこないのか、魔王と似たような感じでキヨロキヨロとしていた。

「おっ、あの店など良さないではないか？」

やうやつて通りを歩いていると、サクラが一軒の店を指差した。その軒先にはたくさんの服がかけられていて、中にはサクラの着ているのと似たような着物があった。サクラはそれをたまたま見つけたようだった。

「サクラが良いくて喜ぶなりあいこじましょ。魔王もシアもそれで良い？」

「私は別にこじまでも構わないわ」

「余も特にこじだわりなどはないな。好きにするが良い」

「そう、じゃ決定ね」

シリカは一人の返事を聞くと、雑踏を越えて早速店へと足を踏み込んだ。魔王たちもまたぞろぞろとその後に続いていく。

店内はところせましと服やら鎧やらアクセサリーやらが積まれていて、移動にも苦労するほどであった。およそ着ることに関する物を全て集めたかのようで、統一感が感じられない。

「すいませ～ん、誰かいませんか～？」

店主の姿が見当たらなかつたので、シリカが声を張り上げた。すると、どたばたと足音を踏み鳴らしながら店主が現れた。店主は

天井が低く見えるほどの大男で、異様な風体をしていた。

彼は文物と思われるピッタリサイズのワンピースを着て、頭は紫色に染めていた。髭の剃り後の残る顔には派手な化粧をしていて、全身から甘ったるい香水の匂いを漂わせている。

その張り裂けそうなほど筋肉と派手な化粧の組み合せは、四人の視覚へ殴りかかった。その衝撃に、四人は言葉も出ない。

「ようこそ、服飾の店マリーへー 欅歓するわー」

「ど、どいつも。この子の着物を探しに来たんですけど……」

シリカは片言で用件を伝え、サクラの肩をポンと叩いた。すると、店主はサクラの身体を入念に見つめ始めた。その眼光は鋭く、サクラの身体を貫きそうなほどだ。サクラはその鬼神の「」ときたつきと迫力に身体を強張らせる。

「着物じやちよつと身体のラインがわからないわね。触つてもいいかしらん?」

「あつ、ああ！ 構わないぞ」

サクラが質問にひつくり返つたような声で答えると、店主はサクラの身体を触り出した。指輪をじやうじやうと嵌めたゴツい手で揉むようにサクラの身体を触つていく。

「あなたやつぱりす」い身体してるわねえ。触つてよかつたわ〜ん。目測でサイズを決めてたらおつぱいの部分がはちきれてたわよん。まったく羨ましい限りだわ〜」

「はあ…… そうなのか」

一通りサイズを確認した店主は自身の屈強な胸板をさすりながら笑った。しかし、サクラはすでに上の空。店主にツツ「ハリを入れるゆとりすらなかつた。

「サイズも測つたし、さつさと服を決めましょうね。ああでもこんなサイズは倉庫にしかないわね。しょうがない、みんなついて来て～」

店主はサクラを強制連行しながら奥に引っ込んでいくと、残った三人を呼んだ。ショリカたちはしかたなく覚悟を決めて歩き出す。しかし、一人だけ歩き出さない者がいた。

「魔王、ついて来ないつもりなの？」

ショリカが魔王にたいして恨みがましく言った。すると魔王はにべもない返事を返す。

「余は男だからな。女の服を選ぶのについて行くのは不自然であるう」

魔王の意見は「うへ」普通であつた。なのでショリカとシアは殺氣の籠つた目つきで睨むものの、反論はできなかつた。

「では、余は街を散策してくるからな。しばらくしたらまた戻つてくる」

魔王はショリカたちにさしつけざるとマリーの店からそそくさと立

ち去った。そして店から少し離れたところでもう一人へと戻つた。

「あれはあれで……勇者などよつもよせば危険だつたな」

魔王はかつての勇者たちを懐に抱きながら、しみじみと呟つぶやいた。そして、暇をつぶすべく通りへと繰り出したのであった。

第十七話 予言

第十七話 予言

陽射しに照らされた迷宮都市の大通りを、魔王はあてもなくぶらついていた。雑踏の中を速くなったり遅くなったりしながら、気のむくままに歩いている。周囲の人々は特徴的な格好をしている魔王に、時折足を止めたりしていた。しかし、魔王はそんなことは気にせず、商店を冷やかして見たり、いちいち店員に質問してみたりと街を満喫していた。

「うぬ？」

そうしてしばらく時間をつぶしていると、不意に魔王は妙な魔力をを感じた。彼は足を止めるとぐるぐると辺りを見回してみると、通りの脇にある小さな店の中に妙な気配を感じた。賑わう通りにあってそこだけ人気のない、何とも古びた店だった。その店が気になつた魔王は導かれるように中へとはいつていく。店の入口の古びた扉が軋み、微かに埃が舞つた。

店の中には濃密な魔力が漂つていた。足元さえおぼつかないほど暗い店の中を、魔力特有のぬめるような気配が満たしている。その密度たるや、魔界の中心にも匹敵するほどだ。

魔王はどこからこの膨大な魔力が発生しているのかと、注意深く店の中を観察した。端に置かれた揺らめく紅い蠟燭に、店の中心に鎮座している透き通るような水晶球。いちいち怪しいこれらを魔王は一つ一つ見てまわつた。

「おや、こりっしゃい。変わった気配のお方が来たもんだねえ」

魔王が店の中を見ていると、奥の扉から老婆が出てきた。その腰は曲がり、手足は枯れ木のよう。顔には渓谷の「」とさわが刻み込まれていて、百年は生きていたようであった。

「そなたがこの店の店主か？」

「ほほ、そうですよ。わしが店主のアガリアじゃ」

老婆はしげがわれかすれた声で名乗ると、水晶球の前の椅子に座り込んだ。そして、魔王に向かつてにんまりと微笑む。

「何か占つて欲しいことがあるだらつへ、そうだね、その顔だと人を探しているね？」

老婆はからかうような調子でそう言った。その言葉に魔王は愉快そうに唇を歪める。老婆の言葉は見事的中していた。

「確かに人を探している。だがすまないな、今は手持ちがないゆえ占つてもらうことはできぬ」

魔王は少し残念そうに言つと、店から出て行こうとした。だが、それを老婆が止める。その口調は穢やかだったが強かつた。

「待つておくれ、お代ならいらな」よ。あんたは面白がりだからね、特別にタダだよ」

「それはありがたい。頼むとしよつ」

魔王は申し出を受け入れ、老婆の向かい側の椅子に座った。すると、老婆が水晶を貴かんばかりに睨みつける。

「 ！」の水晶をじっと見ておくれ。それだけで良いからの

「 ！」か？」

魔王は水晶を正面に見据えた。すると、吸い込まれるような感覚が魔王を襲う。それはちょいちょい眠りに落ちるような感じで、不思議と不快ではない。

「 ふむ、見えてきたぞい。どうやらあなたは仲間を探しておるようじゃな。あつておるか？」

「 ああ、せうだ」

「 では続けよう。あんたの仲間となる者せうぢやうな子のよひぢやの。なかなかの別嬪さんが見えるぞ。それで肝心の今おる場所は……なんじゃ、すぐ近くではないか。この通りを西に数分歩いたところおるようだ」

老婆はそれだけのことを見王に告げると、田を水晶から放して占いを終えようとした。魔王も不思議な感覚から解放され、立ち上がりつとある。すると……

「 キヤアアー！」

老婆が不意に金切り声を上げた。そして、気が狂ってしまったように手を何度も振り上げてテープルを打ち鳴らす。魔王は驚いて老婆を押さえ付けようとした。すると、老婆は糸が切れたようにテー

ブルに臥してしまつ。

「大丈夫か？ しつかりするのだ」

「槍と杯……秩序と混沌。相克する力……」

突き刺す刃物のような声であった。老婆の口から発せられる声は鋭い氷のつぶてとなつて魔王を襲う。さきほどまではまったく異なる雰囲気に、魔王は身体を固くして老婆の話に耳を傾けた。

「始源の神の子になるは一人。汝、混沌の後継者にして槍の担い手は、秩序の後継者にして杯の担い手より杯を奪うべし。槍と杯、二つをあわせこの世の深淵にありし台座に備えよ。されば汝、始源の神の力を得ん」

「混沌はわかるが槍とはなんだ？ 余はそのような物は知らぬ。教えてはくれぬか？」

「すべては明らかになる。時を待たれよ」

老婆の身体から何か隠げな物が抜けた。魔王は倒れた老婆の肩を揺すり起こしてみる。すると老婆は起き上がり、身体を伸ばした。そして目を擦りながら魔王をみると、何故か顔を歪める。

「あんたまだいたのかい？ ほら、未来のお仲間が西で待つてるよ。早く行つておあげ」

「覚えておらぬのか？」

「何のことだい？」

「知らぬぼうがおそらくそなたの身のためだろ？」

魔王はそれだけ告げると、老婆の店から出て行つた。そして西へと歩く道すがら、老婆の予言に思いをめぐらす。

「混沌はおそらく混沌神の加護。槍というのはわからぬが、杯は聖銀騎士団と関係がありそうだな。すると秩序の神の後継者というのがユリアスか。だが……」

魔王は大きなため息をついた。秩序の後継者というのは秩序の神の加護を受けた者だとみて良いだろう。しかし魔王が神殿で聞いた話では、それに当てはまりそうなのは大昔にいたジーク・アルハルトなる者のみ。人間であるユリアスが数百年も生きていることなどありえないでの、話が矛盾していた。

神殿での話を話してくれた男の知識不足だとするのは簡単だったが、それはないよう魔王には思われた。人というのは過去のことより現在のことを重視する物だ。数百年前の人間のことを知つていて、現在生きているユリアスのことを知らないなどまずありえないだろう。

「……不毛だな」

散々考えたあげく、魔王はそつぶやいた。そして頭の中を切り替える。いざれわからることだと老婆も告げていたので、魔王はそれで問題なしとしたのだ。

じつして思考の海からあがつた魔王は通りを西へ歩いて行つた。

まだ見ぬ五人目の仲間を探して……。

第十八話 マップメーカー

第十八話 マップメーカー

けだるい暑下がり。うつとうしいほどに太陽が輝いている。だがここ迷宮都市の商店街では、そんな元気過ぎるお天道様にも負けない活気が満ちていた。しかし、その片隅の店で一人の少女が、どんよりとした雰囲気を醸し出していた。

「あかん、今日も売上が全然ないで……」

テーブルの上に置かれた数枚の銅貨と大量の地図。少女は栗色の髪を髪をかきあげ、がっくりと肩を落とした。

少女の名前はエルマ。この店で地図を売るマップメーカーである。マップメーカーというのは迷宮に潜つて地図を作り、それを売る者のことだ。だがそんな彼女は今、生活の危機に直面していた。

要はお金がないのである。

「ふう、あんなわけわからんモンスターをえでなければなあ……」

エルマは遠い目をして恥ま恥ましげにつぶやいた。五十階層に現れた岩龍というモンスター。このモンスターのせいで彼女はうまくいっていなかつた。

彼女が入っていたパーティーは岩龍を恐れ、五十階層を目前に事実上解散。仕方なく彼女自身も新しいパーティーまたはギルドに所

属しようとしたが、中途半端なレベルのせいで仲間ができなかつた。しかも彼女はサポート担当だったので一人では潜ることもままならない。

なので今まで作りためた地図を売つてゐるのだが、低い階層の地図のため売れ行きは低調そのもの。これではため息の一いつや一いつ出みつといつものである。

「しゃあない、もういつペんクランで仲間を探してみるか……」

思い立つたらすぐ実行。エルマはテーブルをバンと叩くと、店を畳む準備を始めた。地図を丁寧にしまい、準備中と書かれた札を手に取る。

するとここに重苦しい空氣で満ちていた店内に、爽やかな風が吹き込んできた。エルマは頬を撫でた風に入口の方に振り向く。

男が立つていた。鮮やかな紅のマントを着て、つやつやと輝く漆黒の杖を持つている。その色白で涼やかな顔は間違いなく魔王のものであった。

「こりつしゃーー！ いつの商品は全品良心価格……たべると買つていつてな！」

エルマは丸められた地図をすばやく広げると、満面の笑みを浮かべた。すると魔王は少々申し訳なさそうな顔をする。

「悪いが余は客ではない。人を探していてな、立ち寄つただけだ。
……すまぬがこの辺りでかわいい娘を知らぬか？」

「なんや……」

エルマはくたびれたように座り込んだ。そして、指でまっすぐ前を指差す。その指はちょいび、向かいの店を指していた。

「向かいのランド商店、そこのマゼンダお嬢様がこらで一番美人

「や

「やうか、世話になつた。そのついに何か買ひに来るることを約束し

よ

魔王はエルマにくるりと背を向けて歩き出した。エルマは疲れたよに椅子に身体を埋める。

しかしここで、エルマの頭でパチッと何かがひらめいた。彼女は慌てて店から出て行こうとする魔王を呼び止める。

「ごめん、ちょっと待つてくれへん。今思つたんやけどな、かわいい女の子なんかをどうして探してるんや？　まさか……ナンパでもするん？」

「こや、やうこいつではない。ギルドのメンバーを探しててな。占つてもうつたといひの辺りのかわいい娘が仲間になると言われたのだ」

エルマの田の色がにわかに熱を帯びた。彼女は魔王に近づき、上目遣いに彼の瞳を見つめる。

「ははん、なるほどそつこう訳かいな。それなら前言撤回つ！　こりで一番美人なのはうちや。うちを仲間にしておくんはれ！」

「……凄い熱意だが……ふうむ」

魔王はエルマの容姿を良く確認した。栗色の流れるような髪と猫のようないい輪郭をしている顔。その大きな琥珀色の瞳は澄み渡り、一点の曇りもない。さらにプロポーションも、胸元の布地が押し上げられていることなどからかなり良いようだつた。

「」の辺りで一番の美人といつのもあながち嘘ではないようだ。

「確かに美人だ。だが、そなたがわざ言つていたマゼンダという娘も気になる」

魔王はエルマが仲間かも知れないと思つた。だが一応、マゼンダという娘も見ておこうと思い、店から出て行こうとする。しかし、彼が店を出る」とはなかつた。エルマに腕を掴まれたのだ。

「待つた待つた！ あんたが探してるのはギルドの仲間やつ？」

「ああ、そうだ。それがどうかしたのか？」

「マゼンダは確かに美人やけどシーカーではないんや。そやからその占いに出てきたのはうちやや、間違いない！」

「確かにそれならそうかもしれんな……」

魔王は顔を伏せて、少し考え込むような顔をした。それを見たエルマは、ここぞとばかりに勢い良くしゃべりかける。

「うちはな、う見えても魔鏡つていう珍しくて強力な武器を使つ

てるんよ。だから仲間にして損はないで！」

エルマは腰に着けたホルスターから黒光りする物を抜き放つた。それはＬ字型の棒でレンコンを貫いたような形をした武器だった。その見慣れない形に魔王は興味を引かれてそれをまじまじと眺める。

「なかなか見ない武器だな

「ふふつ、わざわざ。これはいつの父ちゃんがまだ若い頃に……」

そこからエルマの長い話が始まった。彼女の口はペリペリと動き続けて、止まることが全くな。魔王はその濁流のような逆らいがたい勢いに徐々に飲み込まれていった。

「……でな、この武器は……ついしゃべり過ぎちゃつたわ。いらっしゃる

かん

エルマはふと時計を見て、いつのまにか自分の武器の血槽になつていた話を終えた。その時にすでに、エルマが話を始めてから一時間が経と/orしていた。

「……魔鏡が凄いのはよくわかった。良からず、そなたを仲間にしようではないか」

魔王はポカーンとしたような顔でエルマに言った。途中で疲れて半分寝ているようである。だがその魔王の言葉にエルマは拳を上げて、快哉の叫びを上げる。

「ありがとー、うちはエルマ、マップメーカーさ。ほなこれからよろしくな

「余の名は魔王、よろしく頼む」

一人は顔を見合せると互いに笑いあつた。そして手を出し合い、がつちりと固い握手を交わす。

じつして、魔王としては騙されたような気がしないでもなかつたが、エルマがギルドの仲間になつたのだった。

第十九話 結成、新ギルド

第十九話 結成、新ギルド

陽射しに照らされ、魔王はエルマとともに通りを東に歩いていた。一人は人波を搔き分け、どんどんと歩いて行く。遅くなつたことから、石畳を歩く足音はわずかに忙しかつた。

魔王とエルマの目に、軒先にたくさんの服を吊り下げる店が飛び込んできた。さらに、その前に立つてゐる三人の女の子も見える。その三人組は魔王たちに気づくと、すぐに歩み寄つて來た。

「遅い！ 何やつてたのよ。私たちもつい買い物ぜーんぶ終わらせて、ここで待つてたのよ！」

シリカが勢い良く魔王に口を尖らせた。そしてサクラの肩をバシッと掴む。魔王がサクラを見てみると、紅い着物が真新しい桜色の着物になつっていた。さらに腰には新しい漆塗りの鞘が見える。

「すまなかつたな。いろいろとやつていたら遅くなつてしまつた

「もう、今度からは気をつけなさいよ。それより、その女の子は誰？」

シリカは魔王にひとしきり怒つた後で、エルマに目を向けた。その容赦ない視線に、エルマはたじろぎ後ろに一步下がる。そこで魔王がエルマの前に出てエルマの紹介をした。

「この者はエルマという者だ。余が仲間候補として連れてきた

「あら、 そうなの。 どつかで引っかけてきたのかと思つたじやない」

シェリカはエルマの前に移動した。 それに他の一人も続く。 そして、 三人はエルマに次々と質問を投げかけていった。

「あなたの得意な武器は？」

「銃やな。 使うだけなら結構使い込んでるから腕には自信あるで」

「そりなんだ。 遠距離タイプはなかなかいいから役に立つてくれそうね。 ……じゃあ次の質問は……」

エルマはその後も三人の質問にそつなく答えていった。 三人は徐々に躊躇みするような目から、 納得したような目になる。

「いいんじやないか、 なかなか優秀そうだ」

サクラが真新しい桜色の着物を揺らして、 閑心したように息をついた。 シェリカもその意見に頷く。 だが、 三人の中ではシアだけは少し懷疑的な表情をした。

「シア、 なんでそんな顔するのよ。 何か気にいらないの？」

「別にそういう訳じやないわ。 ただ……この娘からはサクラと同じ貧乏神の気配がする」

シアはひよこの財布を取り出してギュッと抱きしめた。 その様子に、 サクラとエルマは目を丸くする。

「むむつ、今のはさすがに我慢ならんぞ！」

「サクラはん、協力するで！ 一人での悪徳神官を倒すんや！」

サクラとエルマは顔を真っ赤にしてアイコンタクトをした。危険を察知したシアはすばやくその場から逃げ出していく。

「あつ、逃げた！ 待て！」

「待てと言われて待つ馬鹿はいないの…」

シアとサクラたちの追いかけっこが始まった。追いかけるサクラとエルマに逃げるシア。三人は混み合つ人々の間をすり抜け、通りを縦横無尽に駆けていく。石畳を軽快に鳴らして、三人はずつと追いかけっこを続けていた。

「……こつまでやつてるのよ。魔王、三人を止めるから手伝って

「ああ。 そろそろ迷惑だからな」

やがて周囲の迷惑を省みない三人を止めるため、シェリカと魔王もそれに加わった。それにより逆に追いかけっこは一層激化して、日が傾くまで続いたのだった。

こうしているうちに、いつのまにかエルマはすっかり四人に溶け込んでいた。そして、彼女は何の問題もなく四人の仲間に加わったのだった。

そろそろ風が冷えてくる黄昏れ時。五人はシェリカの家の食堂に集まって会議をしていた。新たに結成するギルドのことで話し合つたためだ。ちなみに、恒例のカード交換イベントは終わっている。

「新しいギルドの名前について決めたいんだけど、何か意見のある人！」

シェリカがペンを片手にみんなに意見を聞いた。その手元には、『ギルド結成申請書』と書かれた紙が置かれている。

サクラが唇を歪めて押し殺したように不適に笑つた。皆の視線がサクラに集まる。サクラはその視線の中、勿体振るように咳ばらいをした。そして、無駄に自信たっぷりに自身のアイデアを披露する。

「ふふ、こんなこともあろうかとすでに名前を考えておいたぞ。その名もファイナルギャラクティカナイトだああ！」

時が止まつた。食堂にいるサクラ以外の全員の身体がにわかに固まり、動きを止める。絶対零度の沈黙が食堂の中を覆いつくした。サクラはその凍える時の中を、一人戸惑つたような顔をしてさようだけだった。

「……馬鹿は放置。私はシア様親衛隊が良いと思つ

しばらくしてようやく解凍されたシアがサクラの提案を一蹴した。そして、自分の意見を述べる。その自己中心的過ぎる名前にシェリカをはじめとしてみんなはまた頭を抱えた。

「……この一人はダメだわ。あんたたちは何か意見ないの？」

ショリカは希望を込めた眼差しで魔王とエルマを見た。すると、魔王もエルマもそれぞれ考え込み始める。

「…」

考えあぐねたエルマは、そう言ってショリカの方を見た。ショリカは両手を上げて、お手上げというポーズを取る。彼女もまたネミングには自信がないようだった。

「深層旅団、なにがどうだ？」

魔王がぼそつとつぶやいた。みんなは話すのを止めて、食堂は水を打つたようになつた。今まで唯一、まともな名前だった。

「大げさだけど良いかも。みんなはどう？」

ショリカはみんなに確認を取つた。シアとサクラがどことなく不満そうではあつたが、反対意見はでなかつた。

「よーし、名前は『深層旅団』に決定！」

ショリカは書類にササッと名前を記入して、次の空欄を見た。そこには『代表者名』と書かれていた。

「次はリーダーを決めなきやいけないみたいね。みんな、誰が良いと思つ？」

ショリカはみんなの顔を見渡して言つた。するとみんなは一斉にショリカの顔を見る。ショリカはその反応に戸惑つてしまつた。実

はこのメンバーの中では彼女が一番レベルが低いのだ。

「わっ、私！ それは無理よ！ そりやせ、」いつもやつてみんなをまとめてるかも知れないけど……レベルが低くてあてにならないんだから。それよりも魔王とかどうなの？」

困惑したシェリカは魔王の方に目を向けた。他の二人もそれについて魔王を見る。魔王は少し唸つたが、何も言わなかつた。

「レベルが高い方がリーダーに向いているのは事実。魔王はそういう点では問題ないわ」

しばらくしてシアはそつそつと歩いた。その一言に、他の二人は唸らされる。一人とも魔王の実力についてはリーダーに相応しいと思っていたのだ。シェリカが乗り気でない以上、魔王が最適かもしれない。そんな考へがにわかに広まつた。

「皆が推すのであれば、引き受けよう」

魔王は周囲の雰囲気を察して、リーダーを引き受けたことにした。その言葉にみんなは笑顔になり、シェリカは魔王に書類とペンを手渡す。魔王は渡された書類につらつらと長い長い本名を記入していった。

魔王は名前を書き終えると書類の全体を見渡した。すると右端に割合大きな空欄があつた。魔王がそこに書いてある文字を読むと、そこには『捺印欄』と書かれていた。さらに横に注意書きとして血判が望ましいと書かれている。

「最後にそれぞれの血判を押さねばならぬようだな。誰かナイフを

持つてあるか？」

「ナイフなら私が持つてるわ、はい」

シェリカはすかさずナイフを魔王に手渡した。すると魔王は親指を切り、紙に押し当てる。紅の指紋がはつきりと紙に残った。

それを確認したところで、魔王は隣のエルマにナイフと紙を手渡した。エルマは渡されたナイフをどこかびくびくとした様子で見る。

「チクリにするの苦手なんやけど……。しゃあないな

エルマは痛みに顔をしかめつつも、ナイフで指を切った。そしてゆっくりと血判を押す。そもそも魔王より明るい紅の血判が紙に残った。

その後、残りのメンバーは肃々と血判を押していった。そしてついに、最後であるシェリカに順番が回ってきた。

「いよいよ最後ね。みんな、本当に後悔とかない？ 今ならまだやめれるわよ」

シェリカは最後の確認をした。みんなは黙っている。それは明らかにシェリカが血判を押すことを肯定していた。

「ううう……これでよしー

シェリカは血を指からにじませ、力いっぱい紙に押し付けた。そして、ゆっくりと指を紙から離していく。紙には五つの血判が赤々と残されていた。

今ここに、新たなギルドが結成されたのであった。

第二十話 初陣

第二十話 初陣

ギルド『深層旅団』結成から一日が経過したある日。迷宮第四十五階層を、五人のシーカーが探索していた。集団の前を歩く赤髪の剣士に桜色の着物を纏つた侍、その後方を歩く大きな帽子を頭に載せた神官に地図とペンを手にしたマップメーカー。そして、そのさらに後ろを貴族風の男が続いていた。間違いなく魔王たちであった。

彼らは今日、五人で始めての探索に臨んでいた。うまく戦えるのか、連携できるのか。龍との戦いに備えた訓練のつもりとはいえ、少なからぬ不安が彼らを付き纏う。その不安が行動にも現れたのか、彼らは水の滴る洞窟のような通路にゆっくりとしたりズムで足音を刻んでいた。

「いきなり四十五階層なんて大丈夫かしら……」

最前列を歩くシェリカが不安げな顔をした。五人で始めての探索、しかも四十五階層は彼女にとつては未知の階層である。彼女は他の誰よりも不安でいっぱいであった。

すると、サクラがそんなシェリカの独り言を聞き付けた。彼女はシェリカの方に向き直ると任せとけと言わんばかりに胸を張る。

「大丈夫だ、私やみんながいるじゃないか」

「それもそうね。心配することなかつたわ」

ショリカは小さく息をこぼすと顔を上げた。その顔は晴れやかで、わずかながら不安が軽減されたようだった。するとその時、最後尾の魔王が足を止めた。そして辺りをゆっくりと見回す。

「ふむ、何か来たようだ」

魔王がつぶやくと、それ続くかのように足元がじりじりと揺れた。ほかの四人も足を止めてそれぞれの武器を構える。張り詰めた空気が辺りを支配した。

しばらくして天井につかえそうなほどの身体を持ったオークが、前の曲がり角から現れた。丸々と肥え太ったオークは脂肪で膨れた鼻を下品に鳴らし、腐ったような息を吐き出す。さらにその身に纏つた粗末な腰布にはハエがたかっていて、異様な臭気があたりに立ち込める。

「ちつ、ずいぶん大きなオークだな！ 鼻がもげそうだ！」

「そうね、さつさとやらないと臭いが染み付きそうだわ！」

ショリカとサクラは互いに目配せすると、一斉に武器を抜いた。刀と剣が閃き、鋭い切つ先がオークに向けられる。そして次の瞬間、二人は一気に踏み込んでオークへと跳んだ。

「せやあつ！」

サクラの刀がにわかに光り、一條の光を描いた。気を纏つた刃が滑らかにオークの腹を裂き、血がほとばしる。オークのたるんだ腹と腰布はたちまち血に濡れて、オークは絶叫を上げた。

「ブヒイイイ！」

オークは耳を焼くような雄叫びを上げながら大暴れを始めた。手に持つこん棒をやたらめつたら振り回して、周りの岩や地面を吹き飛ばしていく。その巻き込まれれば人間などひとたまりもない様子に、サクラもシェリカもたまらず後ろに下がってしまった。

「これじゃろくに近づけないわ！ エルマ、出番よ！」

「よつしゃ、任せときー！」

エルマは腰からサツと魔銃を引き抜いた。彼女はそれをくるりと回して構えると、安全装置を解除する。そして彼女はオークのたるんだ身体に狙いを定めると幾度となく引き金を引いた。軽快な音が迷宮に響き、銃口が青く光る。

魔銃から放たれた光はすべて過たずオークの腹に殺到して、その柔らかい肉を揺らした。たるんだ腹は激しく波打ち、今にもちぎれてしまいそうなほどだ。だがしかし……

「グオオ！ ブヒイイイ！」

「ちつ、あかん！ こいつデブやから銃があんま効かへんみたいや！」

エルマは腹を揺らしても一向に貫けない光を見て舌打ちした。威力も高く使い勝手もよい魔銃。だが、実は柔らかい敵には滅法弱いという弱点があるので。

結局エルマの攻撃はオークを怒らせただけであった。前にも増し

て暴れ出したオークに、エルマは茫然自失としてしまった。しかし彼女はすぐ気を取り直すと後ろの魔王をすがるように見る。だが、魔王はエルマの期待に反して首を横に振った。

「ダメだ。余が手を出しても訓練にならぬ」

魔王は毅然とした態度で断言した。今回の探索は、ギルドでの連携を高めるためである。それに強すぎる魔王が手を加えたら成果が上がらないのだ。

「そうかいな……。それなら自信ないけどやれるだけやってみるで！」

エルマは魔銃を一丁しまい、もう片方を両手で構えた。そして神経を研ぎ澄まし、オークの顔のあたりに狙いをつける。エルマの手の造形がにわかに蜃氣楼の「」とく揺れて、魔銃に膨大な魔力が流し込まれていった。

「バーストショットオ！」

氣迫の籠った叫びが響き、エルマの銃からこれまでになくまばゆい閃光が放たれた。閃光は迷宮の闇を切り裂いて一直線にオークに迫り、その右目に直撃。見事なまでにそれをえぐり取る。

「ウギヤアアア！」

鼓膜を破壊するような堪え難い絶叫が轟いた。オークはこん棒を放りなげ、頭を抑えてのたうちまわる。その腕は始めて獲物ではなく自身の血で紅く染まっていた。

だがここで、オークは致命的な過ちを犯していた。痛みに苦しむあまり、こん棒を放り投げてさらにほっぱらかにしてしまったのだ。

「そりあー。」

「えやああー。」

サクラとシェリカがオークの懷に飛び込み、その身体を血に染めていった。オークは慌ててこん棒を手に取ろうとしたが時すでに遅し。肉を裂かれ、ズブ濡れになるほど血を流した身体にはこん棒を振り回すような力は残っていなかつた。

「グウ……」

オークは弱々しい断末魔のみを残し、息絶えた。その死体はあつとこう間に光の粒となり闇に溶けていく。後にはメロンほどの大きさの魔力珠だけが残された。

「ふふ……大きいわ。お金になりそう」

怪我人でなかつたので暇をしていたシアが、すぐに魔力珠を抱えた。そして愛おしいかのようにほお擦りをする。その頭の中はお金のことでいっぱいだった。

「ひりひ、あんたなに勝手に持つてるとよー。それはみんなで山分けよー！」

「あつ……」

シェリカはシアに近づくと、その手から魔力珠を取り上げた。そして、腰のポーチに押し込む。シアは赤くなつて頬を膨らませたが、シェリカはまったく相手にしなかつた。

「まったく油断もすきもないんだから。……それよりサクラ、オークってみんなあんなに強いの？ あたしあれが続いたら結構きついんだけど」

「えつ？ …… そうだな、少なくとも私が知る限りではあれだけ強いのは始めてだ。普通なら最初の一撃で真つ二つになつている」

サクラはしばらく考えた後、シェリカの質問に答えた。サクラとしても、オーラの強さは予想外であった。

「なら良いけど……」

シェリカはサクラの答えにそう心配そうに言つと、また迷宮の中を歩き始めた。他の四人もすぐに後に続いて探索を再開する。

その後五人はオーラに何度か襲われたものの、シェリカの心配したようなことにはならなかつた。そして五人は四十九階層まで潜り、いよいよ次回の探索で五十階層に潜む龍と戦うことになつたのである。

第二十一話 開戦、巨大龍！

第二十一話 開戦、巨大龍！

深層旅団の初陣の翌々日。今日も変わらず厳かな雰囲気のただよう神殿は、朝にも関わらず人で混雑していた。そしてその混み合う建物中央にある祈祷の間に、魔王たちの姿があつた。

ステンドグラスから差し込む朝日で大理石が白く輝き、中央にそびえる女神像が彼らを見下ろしている。八角形をした祈りの間は女神に見守られて、白い輝きに満ちていた。

その神聖で引き締まつた雰囲気に、魔王は仮頂面をしていた。そして、隣のシリカを恨めしそうに見ている。

「もう帰つても良いか？」

「まだお祈りしてないじゃない。大きな戦いの前に加護神様にお祈りするのはシーカーの常識よ」

「ううむ……」

シリカは唸る魔王を放置して、女神像にお祈りを始めた。他の三人もそれに続いて祈り捧げる。この女神像というのは特定の神を表したものではなく、様々な神を象徴的に表すものである。そのため、四人が一緒にお祈りできるのだ。

他のメンバーが全員お祈りを始めたので、仕方なく魔王も混沌神に祈りだした。固く目を閉じ、胸の前で手を組む。そしてしばらく

の間、だまつて心を無にした。

「終わり。これで良いわ」

シアはそういうと身体を伸ばした。そして入口に向かつて歩いて行く。魔王たちもシアに従つて祈祷の間から出でていこうとした。すると、入口で良く見慣れたシーカーの集団とすれ違つた。胸元に銀のブローチを輝かせるその姿は、紛れもなく聖銀騎士団だ。

「おやおや、シエリカさんじゃないですか。聞きましたよ、最近ギルドを設立したそうですねえ。まつたくめでたいことですよ」

コリアスは口元を手で抑えて高笑いをした。その口は嫌みつたらしく歪んでいて、底知れぬ不気味さを醸し出している。シエリカはそのコリアスの態度に露骨に顔をしかめた。

「そり、祝つてくれてありがと。……それは良いとしてコリアスはなんでここにいるの？ あなたたちが神殿に来るなんて珍しいけど」

「いえいえ、今日は闘神祭の必勝祈願に来たのですよ。大会の一週間前から毎朝祈るのが私たちの流儀ですからね。むしろ、あなた方こそどうして神殿にいらっしゃってるのですか？」

「五十階層の龍と戦うから祈りに来たのよ」

シエリカは重々しい声でそう言つた。それと同時に彼女はコリアスに向かつて剣のような鋭い殺氣を送る。だがコリアスは大袈裟に驚いたような顔をしだだけであった。

「ほう、五十階層の龍ですか。そういえば最近話題ですものねえ。

あなた方が倒してくれるなりあつがたい」とですよ

「ほんと白々しいわね……。まあいいわ、忙しくからねよ」

「そうですか、ならば」機嫌よひ。勝てることを祈つておきまわよ

シェリカは隣にいた魔王の腕を掴んだ。そして腕をぐいぐいと引張り、どたばたと床を踏み鳴らしながら神殿を出て行く。辺りにはユリアスたちだけが残された。

残されたユリアスは脇に控えていた若いの方を向いた。いつぞやの、魔王たちを陰から覗いていた女だ。今日も長い傘を手にしていた彼女に、ユリアスは笑いながらゆつくりと話し始める。

「計画は順調のようですね。後はあのシェリカが死なない程度に龍にやられれば計画完了」。……アイリスさん、調整や準備に抜かりはありませんね？」

「万全です、まったく問題はありません

「ほほほ、それはよかつた。吉報を楽しみにしてますよ

ユリアスは目を細めると凍えるような笑みを浮かべた。そして祈りの間に向かってゆらりと歩き始める。そのあとをアイリスと呼ばれた女を筆頭にギルドのメンバーたちがぞろぞろと続いて行つたのだった。

ギルドや神殿のある場所から迷宮へと続く道の上。その石畳の迷

宮へと向かうシーカーたちが激しく往来している。シェリカたちもそんなシーカーたちのグループの一つだった。

シェリカは路上を無言でただひたすらに歩いていた。その口はへの字に曲げられていて、田は引き攣りそつなほどである。どうやらシェリカの機嫌はかなり悪いようだった。

「もうつ、なんだか腹が立つわね！ あいつはどうしてああも氣味が悪いのよー！」

「落ち着け、良くあることだ」

「良くある」とつて……。そんなにはないわよー！」

「それは言葉の綾だ」

「むへ……」

シェリカと魔王のくだらない言い争いはなかなか終わらなかつた。もつともそれは傍から見ていると微笑ましいレベルのものだったのでも、誰も止めようとしたのが原因であるが。

だが、それも終わる時が来た。いよいよ五人が迷宮の前へと到着したのである。

「二人とも、迷宮に着いたわ。だから気持ちを切り替える」

「せうやで、ほうあれ」

エルマが見慣れたモーニメントのような迷宮の入口を指差した。

それはもうすでに目前に迫っている。しかしシェリカはどこか気恥ずかしそうに一人を見て言った。

「今、良いところなのよ。もうちょっとだけ」

「ダメ」

「ダメやで」

シアとエルマはきっぱりと何のためらいもなく断言した。妥協するつもりは一切ないようだつた。だが、その二人の様子を目にしてもシェリカはどこか残念そうな顔をしていた。相当に議論が白熱していたようである。なのでだらうか、シェリカと同じく魔王もまた微妙な顔をしていた。

「二人ともテンション低いで……。しゃあない、こうなつたらうちのとつておきの方法で気分を盛り上げたるで！」

エルマの目にわかに炎が燃えた。彼女はそのまま手早くみんなに円陣を組ませる。そして、自分もその輪に加わって高らかに宣言した。

「龍を倒すぞー！」

冷たい沈黙が訪れた。ここは人々の集まる広場の真ん中。エルマ以外の四人は恥ずかしくて口をもぐもぐとさせるのが精一杯だつた。

だが、ノリと笑いにうるさいエルマがそんな四人を許すはずがなかつた。

「みんなノリ悪いなあ。ほらおーとかなんか言つてみー！」

「お、おーーー！」

エルマの勢いに押された四人は、まじつきながらも掛け声をかけた。威勢の良い声が広場に響き、高い空に吸い込まれていく。

こうして五人は龍と戦う前に、わずかながら団結感を感じたのであつた。

迷宮第五十階層。そこには異様な緊迫感が充満していた。岩や地面からむせかえるような猛烈な魔力が放たれていて、空気が濁んでいる。クリスタルで転移した途端に襲ってきたその魔力の波に、五人の緊張が張り詰めた。

五人が忍び足で探索を始めると、すぐ目の前に圧倒的な存在感を放つ門があつた。高さは人の背丈の五倍ほど、横幅はその高さの三分の一ほどの鋼鉄製の門だ。赤錆の浮いているその門の向こうからは、圧倒的な存在感が伝わってきていた。

「この門の向こうに間違いなく龍がいるわね。みんな、準備はいい？」

「もちろんー！」

四人の声が寸分違わず重なつた。ショリカは頷くと、ゆっくり門を押す。すると門はシェリカたちの訪れを待つていたかのように何の抵抗もなく開いた。そしてついに龍が姿を現す。

太古より続く大地を思わせるじつじつとした外殻に、氷よりなお冷たく光る牙。その目は研ぎ澄まされた刃のように冷徹で、哀れな獲物を逃さない。その山のような身体から吐息がこぼれるたび、迷宮の地面がわずかに揺れた。

龍は目の前に現れた五人を一瞥した。そしてぱらぱらと砂や埃を落しながらのつそりとその巨体を起こす。すると……。

「グギャアアアー！」

小瀕な侵入者にたいして、龍の悍ましい雄叫びが大気を切り裂き、洞窟を壊さんばかりに轟き渡つた。まるで哀れな獲物への死刑宣告だと言わんばかりである。だが五人はこれを聞くやいなや、龍へと向かつて走り出した。

いざして魔王たちと龍の戦いが始まったのである……。

第一十一話 脅威の外殻

第二十一話 脅威の外殻

迷宮第五十階層に広がる大空間。そこで今まさに、激戦の火蓋が切つて落とされた。空気が痺れるように張り詰め、視線と視線が交錯する。

「シャアアアア！」

先に仕掛けたのは龍であつた。長い前足を唸らせ、薙ぎ払う。膨大な質量に周囲の岩は吹き飛ばされ、粉塵が舞い上がつた。巨大な柱のごとき足は、風を切り裂き五人に迫る。

五人は後ろに跳んだ。迷宮の天井へと向かって、高く高く。数秒の空中散歩。それが終わると五人は地面へと軽く舞い降りた。地面につくたび彼女たちは武器を構え、互いを見交わす。

「行くぞ！」

「ええ！」

粉塵で視界が無くなつた龍に出来た僅かな隙。それをサクラとシリカが逃すことなく見つけた。一人は足音もなく走り、地面を蹴つて飛び上がる。

迷宮の風の中を翔ける一人を、後ろから魔鏡の光が追い抜いていつた。光は龍の顔にぶつかり、花火のように散る。一人はその花が散ると同時に、龍に襲いかかつた。それぞれ髪や服をばさばさと鳴

らしながら龍の身体近くに降り立ち、刃を一閃させる。

舞い散る火花、炸裂する金属音。鍛冶屋が力一杯に鋼を打つたような音が迷宮に轟き、紅く焼けた光の華が咲いた。

「ちいっ！」

「硬つ！」

二人の手に伝わった龍の皮膚の感触。それは鋼どころの騒ぎではなかつた。硬く、されど頑丈で脆くなく。それはちょうど、ダイヤモンドの硬度と鋼の耐久性を合わせたような未知の感触であつた。だが、二人は攻撃の手を緩めることはしない。

二人は攻撃の反動を活かして後ろに飛びのいた。すると、龍の前足が一人のいた場所を通り抜けていく。風が一人の髪を巻き上げ、頬を撫でた。

一人は前足をやり過ごすとまた龍に向かつて行くべく地面を蹴つた。硬い石の地面と、二人のブーツや下駄が擦れて小さな閃光を放つ。

シェリカたちと龍との戦いはそれからずっと続いた。龍の咆哮が轟き、その後を追うように金属音が響く。さらにその間隙を塗つて魔銃の光が炸裂した。

だが、その戦いの音は徐々に静かになつてきていた。シェリカたちが疲れてきていたのだ。

「なんて硬いんだ……。攻撃がまともに通じないぞ！」

「これじゃ勝てないじゃない……！」

二人は肩で息をしながら龍を見上げた。鉛色をした外殻は一人の猛攻にも関わらず傷一つついていない。一人の頭をわずかに絶望が包んだ。

一方、岩の陰から魔鏡でもつて援護をしていたエルマも一人と同様に絶望感を覚えていた。そして彼女は思わずぽつりと漏らす。

「どんだけ硬いんや……。あの龍、伝説のオリハルチウムでできてるんじゃないか？」

「オリハルチウム？ なんだそれは？」

「私も聞き覚えがないわ」

エルマの漏らした言葉に、魔王とシアの質問が殺到した。その二人の質問に、エルマは少し考え込むような仕草をする。そして、言い濁みながらもゆっくり答えた。

「オリハルチウムっていうのは神々の金属って呼ばれている金属やす」「一く硬くてその上強靱！ ただ、今はどこにも残っていないはずなんやけど……。でもそれぐらいしかあの硬さは説明できへんで」

エルマはそういうと心配そうに一人の方を見つめた。二人は岩龍の前足や長い尾を巧にかわしながら盛んに攻撃を続けていた。だが、その刃はことごとく弾かれていた。

エルマはその様子に唇を噛み締めた。何とか加勢したかったが、

もう彼女の魔力はほとんど残っていない。魔鏡は魔力を消費する武器であるため、残念ながら無理な相談だつた。

「二のままでは危険。なんとかならないの？」

シアが魔王をすがるような目で見た。しかし、魔王は険しい顔をしてつぶやいただけであつた。

「まだ手を出す時ではない」

「そんな……」

シアとエルマが絶望したかのような顔をした。魔王はそんな二人の顔を見ても何も言わなかつた。

その時であつた。龍が奇妙な動作を始めた。一人に対する一切の攻撃を止め、頭を高くかかげる。その口に光が満ち始めた。

「いかん！ 逃げるぞ！」

異変に気づいたサクラが絶叫した。そして全速力で駆け出す。それに僅かに遅れてシェリカも駆け出していく。

「グウオオオ！」

咆哮とともに光が弾けた。蒼く輝く光が一直線に放たれ、津波のように一人に迫る。熱で岩は溶け、光で視界があやふやになつた。光は熱をともなつて岩を沸騰させながら疾走する。もしまともに当たりでもしたら、一人は影すら残らないだろう。

「うひひひやー 速くうー！」

「急いでー。」

いち早く巨大な岩の陰へ避難したエルマやシアが、喉が裂けそうなほど叫んだ。一人はそれに応えてぐんぐん速度を上げ、光を振り切ろうとした。岩でできた地面を一人の足がかたかたとリズミカルに鳴らし、一人は風となる。

次の瞬間、サクラが光から逃げ切った。彼女は仲間たちに受け止められ、一息つく。それに続いてシェリカも仲間たちの隠れる岩陰へと飛び込もうとした。だが……

「ぐつ……はあ……」

シェリカの身体を光が掠めた。鎧は焦げ、沸騰した血が爆発する。シェリカの滑らかな肌は吹つ飛び中の肉や骨を晒した。

四人の感覚が引き延ばされた。素早く飛び込んで来るはずのシェリカの身体が、ふわふわ宙に浮いているように感じられる。その延びた時間の中で醜悪な傷口は強調され、血と骨からなる紅と白の破壊的な色彩を主張した。

「いやああー！」

一瞬遅れてシェリカの悲惨な状態に、エルマの悲鳴が響いた。目の前で人間の身体が一部とはいえ吹き飛んだのだ。血になれたシーカーといえど無理もなかつただろつ。

取り乱したエルマは何事かを口にしながら滅多やたらに泣き始め

る。だがその身体を、かろうじて冷静さを保っていたシアが抑えつけた。

「落ち着いて！ 大丈夫、あれくらい治せる

シアが叫び続けるエルマの肩を無理矢理に抑え、口に手を当てた。そして、エルマが黙つた後でシェリカの治療に取り掛かる。まずは彼女を横に寝かせ、傷口に手の平を押し当てる。

「イース・リウ・ハムナ・カタア……」

シアの口から呪文が紡がれ始めた。手の平の周りが淡く輝き、患部が癒えていく。その後あつという間に傷はふさがり、シェリカの身体は元通りに戻つた。しかし、今度はシアがその場にへたり込んでしまう。

「ふう、はあ……治療完了よ……」

「シア、大丈夫！？」

いつも白いシアの顔が、紫に染まっていた。慌てて治療されたばかりのシェリカがシアを抱き起こす。シアの目は少し虚ろであった。

「魔力を消耗したのだな。仕方あるまい、余が行くとしよう

魔王が岩陰から出て行こうとした。マントが擦れ、微かな音を立てる。その足取りはゆっくり重々しかつた。しかし、そのマントの端をサクラの手が掴んだ。

「待つてくれないか

魔王の足が止まつた。彼は振り向き、真つすぐな瞳でサクラを見る。サクラの黒く濡れたような瞳は澄み渡つていた。

「私たちをもう少し戦わせてくれないか？」

「構わないが、何故なのだ？」

「ここで魔王に頼つたら、これからも頼りっぱなしになつてしまつ。仲間といつのは支え合つもので依存するものではない」

サクラの口調にはどこか切迫感があつた。強い魔王と弱い自分達。彼女なりに何か思うところがあるのだろう。

沈黙があった。辺りにはすでに獲物を焼き殺したと思つてゐる古龍の鼻息だけが聞こえていた。

「サクラの言つ通りだわ。頼りっぱなしじゃ格好つかないもの」

シリカの言葉が重く響いた。その声は小さかつたが、心の琴線を震わせるものであった。

エルマとシアは、シリカの言葉にただ黙つて深く頷いた。二人にも、思い当たる節はあった。

「良かう。こつこつとは嫌いではない。だが勝算はあるのか？」

魔王は感心したような表情でそう言った。すると、サクラがゆっくりと首を縦に振る。

「一応は大丈夫だ。成功する可能性は低いが私に策がある」

サクラは冷静な口調で魔王に告げた。開き直ったという雰囲気でもなく、恐怖を感じているという雰囲気でもなく、ただ冷静に。だがその目はいつになく輝いていたのだった。

第一一二話 緊迫の一分間

第一一二話 緊迫の一分間

迷宮の闇の奥深くにある第五十階層。そこで、サクラたち四人は額をつきあわせて話し合いをしていた。それを魔王は穏やかな表情をして見守っている。だがその瞳は絶えず、眠っている龍の姿を視界の端に捉えていた。

「一分、それだけ持たせれば良いんやな?」

エルマが声をひそめ、念を押すよじにサクラに言った。それにサクラは深く頷いて応える。

「そうだ。攻撃してくる龍を一人で何とか一分、持たせてくれ」

サクラの言葉は重く、抑揚がなかつた。ショリカとエルマは眉間にしわを寄せ、緊張を隠せない。龍の猛攻に一分間耐えることは、無茶と難しいのちょうど間ぐらいの難易度であった。

だがここでシアが少々不思議そうな顔をした。そして感じていた疑問をサクラに投げかける。

「一分の間、隠れているのはダメなの?」

現在、龍はサクラたちを倒したと思って眠りについている。一分たつても起きるとは思えない。だがしかしサクラは首を横に振った。

「ダメだ。私は一分の間に技を放つ準備をするのだが、その時に膨

大な氣が発生する。それに龍が気づかないとは思えない」

「なるほど。そういうことなのね」

納得したシアは口を閉じた。そしてシェリカとエルマに視線を送り、そのあと祈るように手を合わせる。手を合わせた彼女は、顔を上げてそのまま天を仰いだ。

「神よ、三人にご加護を」

お金が大好きでいつも冷ややかな笑いを浮かべているシア。そんな彼女のらしくない行動に三人は固まつた。だが、その心づかいが伝わったのか三人はすぐさま気を取り直すとシアに笑い返す。そして、龍を倒すべく行動を開始した。

「では……始めるぞ」

サクラは右陰から出ていくと、目を固く閉じて精神を集中しはじめた。サクラの身体の輪郭が蜃気楼のように揺らぎ出し、気が満ちていく。地面に落ちていた小石が浮かび上がり、サクラの髪の毛が波打ち始めた。

「グウ？……ギャアアアア！」

ただならぬ気配を感じ取つた龍が目を覚ました。龍は寝ぼけ眼でサクラの姿を確認するや否や咆哮を上げ、地面を踏み鳴らしながら彼女に向かつていく。だが一方、サクラは向かい来る龍に対して微動だにしなかつた。いや、この場合はできなかつたのかも知れない。

そのサクラの様子を確認したシェリカとエルマは互いに視線を交

わした。そして一人は声を掛け合つ。

「行くわよ！ 援護よろしく！」

「もちろん、どーんと任せてやー！」

ショリカとエルマは岩陰から飛び出した。エルマはサクラと反対方向に走りながら残り少ない魔力を振り絞つて魔鏡を乱射。光が線を引いて龍の顔を次々と穿つ。その光はさきほどまでより込められている魔力が弱く、ほとんど見かけ倒しである。しかしそれでも、龍の注意を引き付けるのには十分だった。

「龍はん、こっちやでー！」

「グギヤアオオ！」

龍は迷宮を揺るがす叫びとともに、エルマに向かって突っ込んでいった。その大木のような前足が振り上げられ、爪が冷たく光る。空気が揺れて嫌な風が起きた。

だがその時、いつのまにか龍の顔に上つていたショリカがその巨 大な眼に剣を突き立てた。眼に切っ先がめり込み、赤く充血していく。そのあまりの痛みに龍はエルマどころではなくなった。

「グゴアアアーー！」

龍は身体を丸め、洞窟の中をのたうちまわる。切り裂くような絶叫が轟き渡り、地面が揺れ動く。天井の岩が降り落ちてきて次々と地面に穴を開けていった。その大地震のような揺れの中では、いかにシーカーであるシェリカたちでも立つてはいることすら難しい。

「うわー、わわわ！」

間一髪、龍の身体から飛び降りたシェリカはエルマの元へと駆け寄つていった。揺れと降り注ぐ岩のせいでまともに歩けないなかを、何とか彼女に近づいていく。

「シェリカはん、大丈夫やつたんやね！」

「もちろん、それよりサクラは？」

「見ての通り、大丈夫や！」

エルマは顔をサクラの方向に向けた。シェリカもそれに続く。すると、さきほどと変わらず集中しているサクラの姿がそこにはあった。この大揺れの中、地面に突き刺さっているかのように直立不動だ。しかもその身体は気に満ちて、今にもあふれ出しそうなほどである。

「ギシャアアア！」

痛みから回復した龍が地を裂くような雄叫びを上げた。その眼は怒りに染まり、裂けんばかりに見開かれている。その憎悪の眼差しの先にはシェリカとエルマがいた。二人はその焼き尽くす炎のような圧倒的殺氣に思わず身構える。

「これはやばいで！ サクラはん、まだなんか？」

エルマがどこかすがるような調子で尋ねた。するとサクラは目を閉じたまま、かすれた声でつぶやく。

「まだだ……あと少し……」

「仕方ないわ、あと少し頑張るわよ！」

シェリカがそういうと、龍が攻撃を仕掛けってきた。前足が唸り、風を切る。シェリカとエルマはすばやく後ろに飛びのいた。前足が二人のいた地面にあたり、轟音とともに碎けた岩が飛び散つていく。後には巨大な爪痕だけが残されていた。

「シャアアアア！」

龍はその後も信じ難い速さで攻撃を繰り返した。前足、尻尾、顎の牙などあらゆるもので二人を引き裂かんと迫つていく。それらを二人がかわすたびに地面が揺れ動き、砂や岩が舞い上がった。

「は、速くなつてるうう！」

シェリカが思わず叫んだ。なんと龍の攻撃速度は落ちないばかりか上がつていたのだ。龍の身体が風を切る音が、だんだんと洗練され硬質的になつていく。一人の背中を恐怖感が走り抜けた。

すばやさには自信のある一人であつたが、だんだんと攻撃をかわすのが厳しくなつてきた。余裕でかわせていた前足が、二人の長い髪を掠めていく。

「あかん、そろそろ……」

エルマの身体がいよいよ動かなくなつてきた。だが、龍の体力に限界はないのか攻撃はなおも続いていく。そしてついに……

「くつ、痛あ……」

エルマの足がつった。普段は援護役で精密な動きはしても激しい動きはしない彼女。速い動きに筋肉が限界を超えた故であった。

エルマは痛みに負けず、足を引きずつて何とか動こうとはした。しかしこの状況でそんなことは無意味。岩龍の爪が迫り、その柔らかい肉を裂こうとする。

「エルマあ！」

シリカが感情を爆発させて声の限りに叫んだ。甲高い絶叫が迷宮の中を幾度となくこだまする。この時であった。瞬間にではあるが、激情に燃え立つシリカの身体がにわかに強烈なオーラを放つた。遠くでもはっきりと認識できたその大きさに、魔王は眉をひそめて首を捻る。

するとどうしたことだらう、エルマに迫っていた前足の軌道がなにかをぶつけられたようにずれた。それによつて龍がほんの一瞬、動きを止める。まさにその時であった。

「グア？」

龍の背後で何かの気配が爆発した。かたかたと地面が震えて、大気が火花を散らす。その巨大な気配に龍は何事かと攻撃を中断して後ろを振り向いた。

するとそこには鬼気迫る表情をしたサクラが立っていた。眼光は鋭く、気が溢れて空気を揺らめかせている。そしてその手には黄金

色の炎に輝く刀が握られていた。

「準備完了だ…… まあ行くぞ！ 裁きの星をその身に刻め、北神・

星刻斬！」

気迫の籠つた叫びとともに、黄金の輝きがいつそつ明るさを増した。それはまさに太陽の「」とく、闇に沈む迷宮の洞窟を鮮明に照らし出す。そしてその直後、サクラの身体が空に舞い上がったのだった。

第一一十四話 恐怖は一度あり！

第一一十四話 恐怖は一度あり！

「やあああ！」

サクラは魂からの叫びとともに「流星の」とき光となつた。その身体は迷宮の洞窟を一直線に飛び、光の道を形作る。黄金色に輝く刃は龍の巨大な身体に煌々と光る線を描き出した。

一本、一本と光の線は増えて交わっていく。そしてサクラが地面に降り立つた時、線は黄金の輝きに満ちた五芒星となつていた。星は龍の身体に消えることなき刻印の如く刻み込まれ、その身体を焦がしていく。

「キギヤアアア！！」

龍はこれが最後とばかりに咆哮し、迷宮の洞窟を揺らした。だが、その身体に刻まれた星の輝きは増していくばかり。無駄な抵抗であった。

「……滅びよ」

刀が鞘にしまわれた。刹那、星の頂点が輝き、白い光がほとばしる。閃光は結び付いて金色であつた星を白に染め上げた。

純白の爆発、鳴り響く轟音。龍の身体が光に飲み込まれて、迷宮その物を吹き飛ばすような爆音が鼓膜を裂く。暗闇に白く燃えた星の光が、迷宮の中のすべてを飲み込んでいった。

その焼きぬくすかのような光の洪水に、すでに雷陰へと待避していた仲間たちも思わず田を閉じた。そして龍の方を向いて割れんばかりに叫びを上げる。

「サクラはとやじ過ぎやでー。」

「まぶしつー！」

「ほつ……これはなかなか大したものだ」

四人の麻痺した感覚がようやく戻る頃、爆発は収まつた。そこには威風堂々たる龍の姿はすでに無く、代わりにその身体の無惨な破片だけが飛び散つていた。

「ふつ……こやんとか倒せたぞ」

龍の死骸を背にして、サクラが仲間たちの元へと帰つてきた。その足はふらふらで、舌すら満足に使えていない。仲間たちはそんな彼女を優しく抱き留めて、ねぎらひの言葉をかける。

「サクラはん、助かつたで！ みーんなあんたのおかげや」

「私もあなたには頭が上がらないわね」

「私も同感」

サクラは仲間たちの優しい言葉に田を潤ませた。感極まつて今にも泣き出しそうだ。その時、魔王が追い打ちをかけるよつこ小さくつぶやいた。

「言つただけのことはやつた。ゆつくりと休むがよい」

サクラの涙腺に限界が来た。彼女は頬を濡らしながら、仲間たちに感謝の言葉を述べる。その顔はとても晴れやかであった。

「あつ、ありがとみんにゃ……私はうれしいぞ」

サクラのネコのような言葉を聞き、みんなは盛大に笑つた。普段、堅物な印象が強いサクラなだけにネコ語なのはとても笑えたのだ。

そんな風にみんな揃つて談笑していると、シアがそわそわとし始めた。彼女はみんなを見回すと、じつそり岩の陰から出していく。背中を丸めて抜き足差し足、忍び足というような感じで。その手にはひよこの財布が抱えられていた。

「魔力球を回収……」

シアはスウツと龍の残骸の散らばる位置まで来ると、目を皿のようにして魔力球を探し始めた。その皿にはお金のマークが浮かんでいて、魔力球をネコババする気満々だ。ところがそこに見慣れた魔力球は無く、代わりに血のように紅い奇妙な文字が刻まれた骨しかなかった。

「これが龍の魔力球？ 骨にしか見えないわ……」

シアはその妙な骨を手に取ると顔をしかめた。魔力球といつのはその名前の通り球体だ。こんな骨のような形をしたものなどシアには見たことも聞いたこともない。

だが魔力球らしきものはこれの他にはない。なのでシアはしばらくその場でこの骨を持つて帰るかどうか考え込む。

「さあ、もう今日は帰つてパーティーでもしましょー。あれ……シアは？」

シアが考え込んでいると、ショリカがシアの「いない」とに気づいた。彼女に続いて他の三人もシアを探し始める。すると、魔王がすぐにはシアの姿を見つけた。

「何をやつておるのだ。帰るが！」

「ちょっと待つて」

シアはとりあえず骨を財布に押し込んだ。太つたひよこがさらにはち切れそうになる。魔王はそのひよこの財布を見て眉をひそめた。

「シア、今それに何か入れなかつたか？」

「……別に何も入れてないわ……」

「いや、何かを入れたはずだ。妙な魔力を感じる」

シアは沈黙した。罰の悪そうな顔をしてただじつとしているだけだ。すると、ひよこの財布がもごもごとうごめき始めた。そしてそれは限界以上に膨らむと、突然弾け飛んでしまう。飛び散った金貨の姿に、シアの顔が青ざめた。

「ひつ、ひいー！」

「いかん！」

魔王はシアの元へと駆け寄り、その身体を抱き抱えた。そして急いでその場から逃げていく。財布を弾き飛ばした骨が宙に浮かび上がった。骨に刻まれている紅い文字が生きているかのようにのたうち、揺らめく。その様子はちょうど、脈打つ血管のようであった。

「あれは一体なんや！」

「何なのよあれ！」

洞窟の奥に移動していたシェリカとエルマ、そしてその手に抱えられたサクラが戻ってきた。三人はそれぞれ宙に浮く骨に視線を向けている。その時、彼女たちの大きな目は限界近くまで開かれていた。

「あれはおそらく呪術に使う核だ。あの様子からすると死靈術だろうな」

魔王の一言に、四人は凍りついた。死靈術というのは、死体を蘇生させて操る呪術のことである。これが使われているということは、龍はすでに死んでおりその死体を何者かに操られていたということだ。しかも厄介なことに、死靈術というのは核を破壊しない限り解除されない。つまり、核を破壊しなければ死体はいくらでも再生するのだ。

「死靈術ですつてえ！ 誰がそんなことを！」

「わからぬが恐るべき術士であろうな。あれだけ完璧に龍を蘇生するとはそもそも人間にできるかどうかすら怪しい。……まあ今はそ

んなことは良い。あれを何とかせねば

魔王はそういうと鋭い視線で骨の方向を見た。骨を中心としてすでに無数の血管が網の目のように伸びている。それらは一定の感覚で脈打ち、その周りにはわずかながらも筋肉が再生し始めていた。

「ぐう……じうするのよー サクラはもう戦えないし、私たちだけじゃ火力不足よ」

絶望に染まつたシェリカの声が洞窟に響いた。その叫びに他の仲間たちも顔を俯けて何も言えない。魔王もまた、複雑な顔をして黙っていた。

そうしているうちに龍はどんどんと再生していった。骨格や筋肉が次々と再生され、辺りは血に濡れていく。骨と筋肉ばかりで構成されたその紅い姿は悍ましく、そして醜かつた。だが、その表面をめがけて飛び散つたオリハルチウムのかけらが張り付いていき、龍は元の勇姿を取り戻していく。

「グオオオ！」

八割がた再生した龍が空気を貫くような雄叫びを上げた。咆哮が天井を轟かせ、地面が震える。復活したことにより、龍の叫びは以前よりさらに凄みを増したようであつた。それを聞いたシェリカたちはたまらず恐怖におののく。その顔は青くなつていてまったく生気がない。

だが、魔王だけはその雄叫びを聞いて覚悟を決めたような引き締まつた顔になつた。そして、凜とした口調で四人に告げる。

「サクナには悪いが……。どいつもやら余が戦つべき時が来たよつだ」

第一一十五話 魔王の本氣

第一一十五話 魔王の本氣

魔王はゆっくりと龍に向かつて歩き出した。その大きな背中からは巨大な気配が放たれていた。シェリカたちはその悠然とした魔王の姿に息を呑む。

「ギジャアアアー！」

魔王の殺気に触発されたのか、龍が悍ましい声で叫んだ。迷宮を揺らすその叫びはまさに絶対零度のごとく、聞く者の心胆を凍えさせるものであった。

しかしそのような物は魔王には関係ない。彼は響き渡るけたたましい咆哮を、木のざわめき程度に無視した。そして何も聞こえてないかのように悠然と龍の前に立ち塞がる。

「行くぞ！ お前たちは下がつていろ！」

「わかつたわ！ ほら、みんな下がるわよ！」

三人は岩陰から素早く飛び出して、さらに後ろの大岩に隠れた。魔王はそれを後ろ目で確認すると、杖を身体の前に構える。龍と魔王の間に緊迫した空気がにわかに張り詰め、刹那の沈黙が訪れる。

瞬間、魔王の気配が膨れ上がった。増大した気配はたちまちのうちに迷宮中に伝わり、地面がピシッと鳴った。

「ふぬつ！」

魔王の姿が突風とともに消えた。隕げな陽炎のようく消えた魔王。彼のいた場所には窪んだ地面だけが残されていた。だが、龍が消えた魔王に気を取られた次の瞬間、その巨大な顔の前に魔王は現れた。

「ダークアローー！」

魔王の杖から周囲の闇よりなおも暗い闇の矢が飛び出した。無数の矢は龍の強靭な外殻をいともたやすく穿っていく。顔に空いた穴から鮮血ほとばしつて、龍は自らの血に染まっていった。

「ウギヤアアアー！」

肺が張り裂けんばかりに息を吸い、龍は壊れそうなほど悲鳴を上げた。火薬の炸裂音よろしく空気が押し揺るがされて、岩陰のシリカたちは恐怖に身を寄せ合つ。

だが魔王自体は龍の悲鳴になど頓着しなかつた。彼は魔法の反動で洞窟の中を高く高く舞い上がっていく。そして、洞窟の天井近くに差し掛かると、天井を強烈に蹴つた。天井が大きく窪み、魔王が砲弾のような速度で飛び出す。その速さたるや、音にも迫ろうかというほどだ。

「グウオ……」

魔王の蹴りが龍の首元に炸裂した。龍の巨体が揺らぎ、崩れ落ちる。ぐらぐらと洞窟が揺れ、天井から岩がいくつも崩れ落ちてきた。地面が裂けて、そここの見えない亀裂が走り抜けていく。

魔王はそこから龍に次々と技を繰り出し、再び立ち上がる隙を与えなかつた。だが、その攻撃のせいでいよいよ洞窟内は危ない状況になつてきた。天井から細かい石が降り注ぎ、ときどき大人より大きな石が落下する。

魔王はそれでも別に良かつた。岩が当たるぐらい大したことではない。だが、この洞窟には魔王と龍以外にもあと四人いた。シェリカたちだ。

「うわああー！ こりゃあかん、避難するでー！」

「避難するつてどーへよー！」

「えつと……」

「あそここの門を越えたところならたぶん安全」

シアが洞窟の入口の門を指差した。確かに、門の向こうでは岩は降つていない。エルマとシェリカはともに領き、サクラに肩を貸して避難を開始しようとした。だが……。

「待つてくれ、私は避難などしない」

サクラが突然、きつい口調で言つた。その声はさきほどまでのふやけた物ではなく、いつもの引き締まつた凜々しい声に戻つてゐる。シェリカたちは思わずその言葉に耳を疑つた。

「何を言つてゐるのよー！ そのままだと生き埋めよー！」

「そりやでー！ 危険過ぎるー！」

「……死んでしまうわよ？」

「確かに死ぬかもしれない……。だが！　だからといって、魔王に全部押し付けて自分たちだけ安全な所に逃げるのは良いのか！？」

「それは……」

「うう……」

「……言い返すのは無理だわ……」

三人は拗つて言葉に詰まった。彼女たちは困ったような顔をして立ち尽くすことしかできない。そうしてシェリカたちが呆然としている間に、サクラは地面にどつかと腰を降ろした。さらにあぐらを組み、刀の鞘を突き立てて、決して動かない構えを取る。

サクラのその態度を見たシェリカたちは、その意志の固さを悟った。三人は顔を見交わして苦笑すると、優しい顔になる。そしてシェリカがサクラの肩に手を掛けながら告げた。

「……わかった、私も残るわよ」

シェリカは腰の剣を地面に置いた。そしてサクラと同じように地面にしゃがみ込む。その目には固い意志が燃えていた。

「……仕方ないわね、私も付き合つわ。ただし、私が死んだら困るから防御用の魔法陣を張るわよ。私だけじゃ魔力が足りないからシェリカ、エルマ、二人とも魔力をかして」

シアはいつもの無表情のままシェリカとエルマに手を差し出した。シェリカはその手をなんのためらいもなく握りしめて、魔力を注ぐ。だが、エルマの方は何故か顔が強張った。

「えつ、シヒリカだけやのうつけちも?」

「そうよ……。まさかあなた、この雰囲気の中で逃げるつもりだつたの? もしそうだつたら私はあなたを『ヘタマ』って呼ぶわ」

「そ、そんな訳ないやろ! だからヘタマは勘弁して!」

エルマは泣きそうな顔をして手を差し出した。シアはそこからエルマの魔力を存分に受け取る。そして、先に受け取っていたシェリカの魔力と合わせて魔法陣の構築を始めた。

一方、魔王は攻撃を一時中断して、四人の様子を見守っていた。幸いにも龍は魔王の連続攻撃に気を失いかけていたのだ。

しばらくして、サクラやシェリカたちを淡い光が覆った。シアの防御魔法が完成したのだ。魔王はそれを確認すると、龍に不適に笑いかけた。そのとき龍は、半気絶状態から脱しつつあった。

「戦闘再開だ」

「グアオオオ!..」

戦う者の心は通じ合つのだろうか。魔王の言葉に龍は咆哮を持つて応えた。そして、さきほどの中傷を晴らすべく怒涛の攻撃を開始する。

爪が風を切り、地面を深々と裂く。尻尾が唸りを上げて、巨大な岩を粉微塵に打ち崩す。さきほどまでよりもさらに速くなつたそれらの攻撃を、魔王はなんなくかわしていった。一切の無駄がなくそれでいて優美に。銀の髪を揺らして戦う魔王の姿はさながら舞踏会の貴公子のようであつた。

「ギヤオオオーー！」

龍にとつて魔王の舞は、いろいろさせられるものでしかなかつたようだ。魔王に対する苛立ちが極限まで募つた龍は、その口に膨大な魔力を蓄え始める。小癪な獲物を丸焼きにしようという腹だ。

「ブレスか……しかもかなり魔力を込めているようだ。……かわせぬな、守護陣一式！」

ショリカたちに向かつて放たれたものより、さらに数段強力な魔力を帯びたブレス。さすがに素で耐えるには分が悪いと思った魔王は、杖で手早く地面に魔法陣を描いた。そして、己の持つ莫大な魔力を惜し気もなく込める。オレンジ色の光の壁が魔王を包み込み龍に立ちはだかつた。

ちょうどその時、岩龍の方も魔力を蓄え終えた。口から青い魔力の炎が放たれる。空気を焦がし、岩を溶かし、炎は魔王へと迫つていく。しかし、魔王の方に一切の動搖はなかつた。眉一つ動かさぬまま魔法陣ごと炎に包まれていく。

魔王がいた辺りの地面が灼熱の溶岩になつたところでブレスは収まつた。龍はいなくなつたであろう生意気な獲物を想像して満足したのか目を細める。だがここで、彼にとって想定外のことが起きた。何かが溶岩の中から跳んだのだ。その出来事に龍は開けていた口を

閉じることもできない。

「油断したな……。ハイプロージョンー」

無防備な龍の口から閃光がほとばしつた。洞窟の中が一瞬、白くなるほどの光だ。しかもそこはオリハルチウムの外殻に守られていな岩龍の最大の弱点であった。

もはや龍になすすべはなかつた。龍の頭は内側から粉々に吹き飛ばされて、巨大な身体が轟音と埃を連れて崩れる。

「よし、後は……」

龍が倒れたところで、魔王は呪術核を探し始めた。目を閉じて微弱な魔力の流れを探つていく。魔王の精神は瞬く間に無に達して、極限まで感覚が研ぎ澄ました。その結果、魔王はすぐにそれらしき魔力の波動を感じとつた。

「これか……うむ、間違いない」

それは肉に埋もれて血で濡れていたが、白い骨に紅く刻まれた幾何的な文字、間違いなく呪術核であつた。魔王はそれを今だ血の流れる肉の塊から引っ張り出すと、手で握り潰した。乾いた音がして、骨は粉と化し消えていった。

「ほつ、これは……」

龍の身体が光となつていった。巨大な骸が淡い燐光となり、空中へと消えていく。光の花が咲き乱れたようになつて、あたりは一面彩色の海に飲まれていった。こうして、魔王たちはようやく龍を倒

したのだった。

第一一十六話 神と職業

第一一十六話 神と職業

龍との戦いを終えた魔王。彼はぐるりと龍のいた場所に背を向けると、仲間のもとへと歩き始めた。だがその時、魔王の頭の中に声が響いた。それは様々な音の混ざりあった、不協和音の権化とも言うべき声であつた。

「龍討伐おめでとう~」

「混沌神か。何のようだ?」

「まあまあ、そんな怖い声しないで。龍を倒したあなたとその仲間にちよつとしたプレゼントがあるだけよ」

「プレゼント?」

魔王は少し驚いたような顔をした。彼は頭を上げて、ビコに潜んでいるであろう混沌神に向かって疑わしげな視線を送る。すると、けらけらと薄意味悪い笑いが聞こえた後、混沌神の言葉が返ってきた。

「そうよ。迷宮ができた遙かいにしえの昔よりの決まりでね、試練の龍を倒した者にはその者にふさわしい力を神から授けるの。今回は龍を倒したあなたたちのパーティー全員に、神を代表して私が力を授けるわ」

「どのような力なのだ? るくでもないものならこらぬが

魔王は口元をにやりと歪めて問い掛けた。混沌神はその問い掛けにわずかばかり心外そうに答える。

「人間たちが職業とかクラスとか呼んでいるものよ。肉体を改造してより戦いややすい身体にするの。例えば戦士という職業につけば力が強くなったり身体が頑強になったりするわ。まあ、身につけておいて損はない力よ」

「ほら、かつての勇者どものよ」

魔王はかつて自らを襲つてきた勇者を捕らえた時、似たようなものの話を聞いたことがあった。昔のこととは言え、自らを倒そうとした者たちと似たようなことをするとは、魔王は自らに起きようとしている事態を皮肉に思つて苦笑した。

魔王がそうしている間に、混沌神はその姿を現した。紫にたなびく靄のような一力所に集まつて人の形をなす。神殿の時とは違い明瞭な姿をとつた混沌神は、まさに精緻を極めた人外の美貌を誇つていた。白く揺れる衣にたつぱりと蠱惑的な曲線を描く身体。顔は彫りが深く、高く抜けた鼻と大きな瞳がえもいわれぬ魅力を放つている。

姿を現した混沌神は、手頃な大きさの岩に腰掛けた。そしてけだるい様子で長い足を組むと、魔王に向かつて言つ。

「儀式を早く始めたいから、あそこにいる女の子たちを呼んできてくれない？」

「わかった、呼んできてやる」

魔王は今度こそシェリカたちの方へと歩き出した。そしてほどなくして彼は防御魔法による光の壁の前に到着する。すると魔王が来たことに気づいたシアが魔法を解除した。魔法陣が消えて、壁もすぐにはなくなってしまう。

壁が無くなつた瞬間、シェリカが魔王に抱き着いた。彼女はそのまま少し赤く充血した目で魔王の顔を見上げる。魔王は訳がわからず混乱をきたした。

「どうしたの？　目も赤くなつているが」

「べつ、別に何でもないわよ……それより、あの人気が何かを待つてるんじゃないの？」

シェリカはすいぶんと慌てた様子であつた。言葉は噛んでばかりで様子がおかしい。だが、混沌神を待たせる訳にもいかないので魔王はすぐに用件を告げた。

「ああそうだ、忘れかけておつたな。……四人とも、あそこにいる混沌神が呼んでいるぞ」

「うひ、混沌神さま！」

四人の顔つきが変わつた。みんな揃つて目を見開き、驚いた様子で混沌神の方に振り向く。混沌神は四人の視線に、含みのある笑いでもつて応えた。

「あれが混沌神さまか……。うひつい美人やなあ。せやけどあんま神様らしくないな……」

「うーん、確かにあの笑いはな。シアみたいだ」

エルマとサクラは共に複雑そうな顔をした。だがその時、シアの鉄拳が二人の頭に炸裂した。景気の良い音がして、二人の頭ががくんと揺れ動く。

「……不謹慎。ぐだらないことを言つてないで移動しましょう」

シアはすたすたと、魔王たちよりもさらに一足先に混沌神のもとへと歩いていった。それを見た魔王やシェリカたちは急いで後を追いかけていく。数十秒も経たないうちに魔王たちは全員、混沌神の前に揃つた。

「全員揃つたようね。それじゃああらためてはじめまして、私が混沌神よ。今日は五人に職を授けに来たわ」

シェリカたち四人の顔が固まつた。彼女たちはきょとんとして混沌神に無垢な目を向ける。彼女たちが何も言葉を発しようとしないので、辺りに重い沈黙が現れた。だが、その沈黙はすぐにシェリカによつて破られることとなつた。

「……職業を授けるつてもしかしてクラスアップのことですか？
でもあれは五百年前に絶えたと聞いたことがありますけど……」

「クラスアップのことよ。絶えていたのは別にできなくなつたという訳ではなくて、誰もクラスアップの条件である龍討伐をしなかつたから。一応、龍討伐をしたパーティーの一員であるあなたたちは大丈夫だわ」

「やつ、やつたあ！」

シェリカたちは歓喜に包まれた。五百年絶えていた伝説の儀式を執り行つてもらうのである、喜びもひとしおだらう。四人は互いに笑いあつてしましお互いの幸福を喜びあつた。

「はいはい、喜ぶのは良いけどそこまでにしなさい。私は忙しいんだから。それでは早速……」

どこか呆れたような顔をした混沌神は、地面に指で大きな円を描いた。すると円が青く輝き、円周から複雑にして幾何学的な文様が中心に向かつて広がつていぐ。光輝く文様は瞬く間に円の中を埋め尽くしてしまつた。

「よし、オッケー。さてと、まずはその紅い髪の子。こっちに来なさい」

「はい！」

シェリカはかくかくと硬い動きで歩いた。そして混沌神に誘導されるがままに魔法陣の上に乗る。魔法陣は混沌神の特徴を反映したのか絶えず靄のようなものを出していたが、シェリカは問題なくその上に乗れた。

「それじゃ、クラスアップの儀式を始めるわ」

混沌神の口から儀式の開始が宣言された。すると、シェリカの身体を緊張が走り抜けて背筋が硬直したのだつた……。

第一一十七話 新たな力

第一一十七話 新たな力

静けさ漂う迷宮第五十階層。暗く、闇に閉ざされたその奥で今まさにクラスアップの儀式が始まろうとしていた。

「さてと……この娘はどんな職業が向いてるかな？……ふぬ？」

混沌神はシェリカの目を見つめて眉をひそめ、首を捻った。そして何度も、訝しげな顔をしてシェリカを見る。その表情と行動に、シェリカは緊張して息を呑んだ。だがしばらくして、混沌神は落ち着きを取り戻すとシェリカの職業を決めた。

「……何か妙な気配を感じたけど気のせいしから？……それよりもそうねえ、あなたの職業は魔法戦士が良いかしら」

「それでお願いします！」

「よし、なら早速クラスアップしましょー！」

混沌神はシェリカの肩に手を乗せると、目を閉じて呪文を唱え始めた。魔法陣が輝き、中から光の粒が吹き出してくる。その七色の光はたちまちシェリカを中心に渦巻き、その身体に吸い込まれていった。その時のシェリカは心地好いのか、恍惚とした顔をしていた。

光はものの数分で收まり、残さずシェリカの身体に吸い込まれた。

混沌神はそれを確認するとショリカの肩から手を離して空中でぽん、と叩く。

「これでおしまい。これではあなたは魔法戦士よ。新たに魔法剣といつ技が使えるようになつたから、使ってみなさい。」

「ありがとうございました！」

ショリカはぺこりと頭を下げる、後ろに戻つていった。それを混沌神は微笑みながら見送る。そしてまた次の者を呼んだ。

「次はそこの着物の娘。いらっしゃいに来なさい。」

「次は私が。はい、いま参ります。」

サクラが前に出て行くと、ショリカの時と同じように儀式が行われた。その結果、彼女は『侍』という職業に就いた。これは刀を使って戦うと能力が上がるという職業であった。

その後も特に何事もなく儀式は進行していく。シアもエルマも無事にそれぞれ『僧侶』と『銃士』という職業についた。シアがクラスアップする時に混沌神が『僧侶にしては……黒過ぎるかな？』とか言つていたが、それはたいした問題ではないだろう。

こうして四人の儀式が終わった。そしていよいよ最後、魔王の順番がまわってくる。彼はショリカたちの暖かい視線に見送られながら混沌神のもとへと歩み寄る。すると混沌神は待つてましたと言わんばかりの顔をした。

「魔王、あなたの職はすでに決まっているわ」

「ほひ……。いつたい何なのだ？」

「混沌魔法士よ」

「混沌魔法士？ 聞いたことがないな」

魔王はわずかに眉を寄せた。長く生きてきた彼にもそんな職業、聞いたことがなかつたのだ。すると混沌神の両手が淡い光を帯びた。さらにそこから色とりどりの光の球がつぎつぎと現れる。混沌神はそれを手で弄びながら、魔王に言つた。

「混沌魔法士といつのは、複数の属性の魔法を重ねて使える魔法使いのことよ。実演するからちよつと見てて」

混沌神はそういうと手の平を前に突き出した。するとさきほど出した魔力球が集まり重なつていいく。光の球は一つ重なる度に稲妻を辺りにほとばしらせて輝きを増した。そこからは濃密な魔力があふれて景色が揺らぎ始める。

やがて七つあつた魔力の球が一つになつた。その魔力の球は夜空にきらめく億の星のことく光り、大海の水のように莫大な魔力にたがふ。

「この世を支えし七つのヒレメントよ、我が手に集まり力を示せ！
アブソリュート・ブレイク！！」

光の球が勢いよく放たれた。光は七色の虹を迷宮の闇に描き出し

ていく。一呼吸もたたないうちに、球は迷宮の大空間を突つ切つた。そして弾丸よろしく岩壁に突き刺さり、そこから光の大洪水を巻き起こす。瞬間に迫ってきた濁流に、シェリカや魔王たちはなすすべもなく飲みこまれていった。

「すつ、すゞー……」

「この頑丈な迷宮に穴が……」

「強烈すぎやで」

光が過ぎ去った後、五人の目の前にあつたのは一直線に続く長い長いトンネルであった。一体どこまで続いているのか、その果てを見ることすらできない。しかもその壁は岩とは思えないほどなめらかで、つやつやとしていた。ショリカたちはそれを覗き込んで、にわかに顔を青くする。

その一方、混沌神は得意な顔をしていた。俗な言い方をすればどや顔といつやつであるうか。さらに魔王もにやりと口もとを緩める。彼の表情はどこか楽しそうですらあつた。

「面白い技だ」

「でしょう? じゃあ早速クラスアップするわね」

混沌神はさきほどと同じように魔王の肩に手を置き、呪文を唱えた。するとどこからか紫の靄が沸き起こり魔王を包む。魔王は一瞬身構えたが、それはどこか暖かで心地好いものであった。それゆえに魔王は構えを解き、なされるがままにしておく。

一分だつたか、はたまた一時間だつたか。魔王にとつて短かつたよつた、長かつたよつた、なんともあやふやな感覚の時間が過ぎた。儀式を終えた混沌神は、魔王の肩からゆっくりと手を離す。

「クラスアップはこれで終つよ。あとは……」

混沌神は急に真剣な顔をした。彼女は手に魔力を帯びさせると空中に円を描く。するとどこかに通じる歪みのような穴が開き、中から古ぼけた銀の槍が現れた。槍はところどころ赤錆が浮いていて、お世辞にも綺麗なものではない。だがそれを見た瞬間、魔王の目の色が変わった。

「……これが槍か。なるほど、恐ろしい存在だな

「へえ、少しほれの危険性がわかるのね」

「ああ、朧げだがな」

混沌神は魔王の返答に満足そうに頷いた。そして手にした槍をゆっくりと撫でながら魔王に説明を始める。

「そつ、なら話は早いわ。これはあなたも思つた通りただの槍ではない。破壊と混沌を司る最強の槍よ。ひとたび真の力を發揮すれば、攻撃対象となつた存在を全時間軸、全平行宇宙から因果率レベルで抹消するわ。それが存在してい立つという痕跡すらもね。もつとも、今は力を封印されているからただのぼろい槍だけど」

「想像以上にろくでもない物だな。だが、それを余にじりじりして欲しいのだ？　出したからには何かあるのであるつ？」

「勘が良いわね、ならば单刀直入に言つわ。魔王、これを預かつて欲しいの」

「何?」

魔王は鋭い目を混沌神に向けた。混沌神はいつもの飄々とした態度とは異なり、刺すような険しい顔をしている。その目は澄み切つていて曇るところがなかった。

魔王はその真剣そのものな態度に何かを感じ取つた。そして、目を閉じてしばらく考え込む。その後、魔王はゆっくりと重い口を開いた。

「良からう、預かつてやる。だが、一つ質問に答えてくれ。そなたが槍を預けたことは龍が操られていたことと何か関わりがあるのか? 仮にも神の管理する迷宮で試練の龍と呼ばれるものが操られ続けていた上に、今の槍の話だ。何があるのであらう?」

「結論から言うと関係あるわ。だけど詳しく述べは言えない。私も言いたいのはやまやまなのだけどこれまた規則でね。すまないわ」

混沌神はなんと魔王に頭を下げた。さすがの魔王もこれには面食らつた顔になる。プライドの高い神、しかも最高位に近い存在が魔族に頭を下げるなどありえないことであった。

「頭を上げてくれ。神に頭を下げるなど氣味が悪い。事情はわからぬがそなたが真剣なのはわかつた。槍は預かつてやらう

魔王は無愛想な様子で混沌神に手を差し出した。混沌神はその手に向かつて微笑むと、丁寧に槍を握らせる。

「……預けたわよ。良い、今は封印されていて力を発揮できないけどそれは世界で一番危険なものだわ。だから丁寧に保管して」

混沌神は魔王に向かつて最後に念を押した。魔王はその言葉に深く頷く。それを見た混沌神は安心した顔をした。その姿はだんだんと薄らいでいき、やがて神聖な気配だけを残して消える。魔王はそれを、割合真剣な顔で見送った。

「さて、帰るか。だがその前に……」

魔王は槍を手品のようにマントの中へしまつと、シェリカたちを見回した。すると、何故か呆れたような視線が魔王に帰ってきた。

「さつきから何を突つ立つてゐるの?」

「……混沌神め、また記憶をいじつたのか」

魔王はシェリカの言葉にしばらく前の神殿での出来事を思い出し、苦笑した。そして、どこか知りたがりな顔をして近づいてくる彼女たちをうまくごまかして煙りに巻く。

こうしてそのあとは特に何事もなく、魔王たちは迷宮から帰還したのであった。

第一十八話　闘神祭へ向けて（前書き）

今回は主に敵サイドの話です。

第一一十八話　闘神祭へ向けて

第一一十八話　闘神祭へ向けて

龍との戦いの翌日。一晩かけて戦いの疲れを癒した魔王たちは、シーカークランへと来ていた。いつもの受付嬢に、龍を倒したことを見告するためだ。

五人は混み合つクランのカウンターにつくと、早速報告をするべく受付嬢を呼ぶ。するとたまたま仕事がなかつたのか、彼女はすぐ現れた。

「ああ、魔王さんたち！　おはようございます。今日は何の用ですか？」

「「」の間の龍のことだな」

「あれのことですか……。やっぱり無茶でしたよね。いいですよ、気にしてませんから」

「いや、きちんと倒して来たぞ。ほれ」

魔王はマントの中から大きなメロンほどもある魔力球を取り出した。受付嬢は驚きのあまり、その魔力球に顔をぶつけそうなほど勢いで近づける。そのとき彼女は目をぱちくりさせていて、口も半開きになっていた。

「「」の色といい大きさといい……。これ間違いなくボスのものじゃないですか！　ほつ、本当に龍を倒してきたんですね！」

「ああ。間違いなくな」

魔王は少し誇らしげに微笑んだ。その後ろでショリカたちもいたずらっぽく笑う。すると受付嬢は五人の様子を見て、みるみるうちに顔をほころばせていった。

「良かつたです～！ まさか皆さんがあの厄介な龍を倒してくれるなんて！ でも私にはわかつてましたよ、皆さんならやつてくれそうな気がしたんです！ だから……」

受付嬢は耳に響くような大きな声で、次から次へと言葉を発した。洪水のごとく溢れ出したその言葉は、たちまち周りのシーカーたちの耳に留まつた。噂好きなシーカーたちはすぐにひそひそとざわめき始めて、魔王たちの方ににわかに視線が集まつてくる。

「すげえなあいつら、聖銀が断つた依頼を達成したのかよ

「そうらしいな。まったくたいした奴らだぜ」

「しかも話を聞いてれば無名の新設ギルドじゃねえか」

クランにいたシーカーたちの話題は、たちまち魔王たちのことで独占された。無名の新設ギルドが、最強と謳われた聖銀騎士団が受けなかつた依頼を成し遂げたのだ。シーカーたちが驚愕して騒ぎ始めたのも当然だつた。

そうしてクランの中は騒然とした雰囲気に包まれた。だが、そんなクランの端の方で苦い顔をしている集団がいた。彼らは全員胸に銀のブローチを輝かせている。そう、聖銀騎士団だ。

「魔力の反応からもしやと思つていましたが……。彼らは五体満足な状態で完全に龍を倒したようです。」これでは計画は失敗ですよ」

コリアスはその刃のような翡翠の瞳で騎士団の面々を射抜いた。その眼光の鋭さには屈強な騎士団のメンバーたちもたじろぎ何も言えない。気まずい沈黙がコリアスを中心として沸き起こった。

しかしその時、一人の女がコリアスに向かつて一步前へと進み出た。色白で長い金髪をした妖艶な女だ。彼女は手にした傘をかつたと鳴らしながら前に出ると、コリアスにうやうやしく頭を下げる。そして、甘い溶けるような声でコリアスに告げた。

「ユリアス様、確かに今回の計画は上手くいきませんでした。現に半死状態になつているはずのシェリカたちがぴんぴんとしております。しかし……」

「しかし、なんですか？」

「一定程度は今回の計画も成功したのではないでしょうか

「ふふつ、これは面白いことを言いますね、アイリスさん……」

コリアスは口元を押されて笑うとアイリスの目を見た。コリアスの絶対零度のごとく冷たい視線が容赦なくアイリスに襲い掛かる。だが、その常人なら一瞬で気絶しそうなプレッシャーにアイリスは軽い調子で応えた。

「今回の計画は龍に再起不能までシェリカたちを痛めつけさせた上で死靈術を解除、ぼろぼろになつたシェリカたちに槍を継承させる

「ええ、そうでしたよ。混沌の継承者が試練の龍と戦いその最中に

龍が死ねば、龍の死因がどうこう理由であれ、継承者の状態がどういう状態であれ、混沌神は盟約により槍を渡さなければなりませんからね。今回はそれを逆手に取った計画でした。ですが……」

コリアスは忌ま忌ましげに魔王たちの方に視線を向けた。そこには受付嬢の話にうんざりしながらも、至つて元気そうな魔王たちの姿があった。決してコリアスたちが想定していたような、再起不能な様子ではない。コリアスはそれを改めて確認すると、唇を血が出るほど噛み締めた。

「きこい……！　連中はああして元気そうにしますよ！　本来なら再起不能なほどぼろぼろになっているはずだったのにね……。これのどこが成功なのですかアイリスさん？」

「コリアス様は連中をずいぶんと過大評価しているように私は思います。特にあの魔王とかいう男には異様なほどに。ですが私が思うに連中はたいした脅威ではありません。連中が健康であれば、瀕死であれ槍は奪えるでしょう。ですから、計画は成功したも同然かと」

「ほつ……ではアイリスさん。あなたはあいつらに勝てるのですね？」

「間違いなく勝てます」

アイリスはきつぱりと断言した。その言葉は余裕に満ちあふれていて、その目は確かな確信に輝いている。その瀟洒でゆとりのある彼女の態度は、彼女の自信のほどをコリアスにも感じさせた。

「わかりました、自信がおありのようですね。良いでしょう、あなたに良い機会を与えます。今度の闘神祭にあなたが聖銀騎士団の代表として出なさい。もしそれであなたが、きっと出場するであろうあの魔王とかいう男に勝てたら、あなたに団長職をおゆすりしますよ」

「本当ですかユリアス様！？」

「もちろんですよ。あと、ついでに『杯』も貸して差し上げましょう。その力をこへり使っても構いませんから、必ず勝つのですよ」

「必ずや……」

アイリスは片膝をつき、緊張した顔をしてユリアスに頭を垂れた。ユリアスはそれに深い頷きでもって応える。

じつしてユリアスたちの話が終わつた時、ちょうど魔王たちの方も受付嬢の長すぎる話が終わつた。魔王たちは微妙にやつれたような表情をしてクランから出ていく。ユリアスはそれを見ると、アイリスたちに後をついて行かせた。そして自分は近しいわざかな団員だけを残して一息つく。

「ふう……。アイリスさんもあれでなかなか単純でしたね。まさかあれほど期待通りに動いてくれるとは。これで危険なことをやらなくて済みますよ」

「どうこういとですか、ユリアス様？」

ユリアスのつぶやきに、近くにいた団員が驚いた顔をして聞き返

した。するとコリアスは皿を細めて、いつものように薄氣味悪い笑みを浮かべる。

「単純なことです。私はあの魔王とかいう男に杯の力を使わないので勝つ自信がなかった。だからアイリスさんを上手く利用して、闘神祭に私の代わり出てもらつたのですよ。杯は大きな力を使って不安定で使うわけにはいかないですし、かといって負けるわけにもいかないですからね」

「なるほど……。しかしそれならアイリス様ならなおさら勝てないのでは」

「素の状態ならば勝てないでしょうね。しかし、杯の力を使えば勝てるでしょ。そのために杯を貸し出したのですから」

「えつ…… わきほど杯は不安定で使えないと言いましたか？」

団員の顔に困惑の色が浮かんだ。彼は皿を白黒させてああでもない、こうでもないと考え始める。するとそんな団員の姿にコリアスはけらけらとからかうように笑つた。

「杯は使えないわけではありませんよ。危険性さえ考えなければ」

「コリアス様、もしやアイリス様を捨て駒にするお積りなのですか

……？」

「捨て駒とは失礼ですよ。彼女は我々の未来のための尊い犠牲となるのですから。……さて、闘神祭が楽しみですねえ……ほほほほほ

！」

ユリアスは高笑いを始めた。彼女の翡翠の瞳は狂気に燃えていておよそまともではない。さらにその全身からは真冬の冷気の固まりのようなオーラがあふれていて、とてもまともには見えなかつた。彼女の近くにいた団員たちもその破滅的な気配を恐れてユリアスからわざかに距離を取る。

「のよつにして、魔王たちの意図しないところで事態は着々と次の戦いへと向かっていたのであつた。

第一一十八話　闘神祭へ向けて（後書き）

一応、今までで改訂も終わり一区切りです。次回からは第一章、闘神祭編となります。

第一十九話 サクラのついてない朝

第一十九話 サクラのついてない朝

魔王たちがクランに龍討伐を報告した日から時間は流れ、いよいよ闘神祭当日の朝がやって来た。魔王たちは未だ風の冷たさの残る朝に、会場となっている闘技場へと出かける。

街はすでに、祭の前特有のそわそわとしたような熱氣にあふれていた。各地から集まつた商人たちが自慢の商品を広げてしたり、大道芸人たちが群衆を集めたりする。道を行く人々の服装もどこか華やかで、街全体が着飾つているようだ。

「みんな盛り上がつてゐるわね。こいつは雰囲気、私は大好きよ。魔王も好き?」

「まあ嫌いではないな……」

魔王はどこか上の空であった。心ここにあらずといった面持ちで、視線もふわふわとしている。どうやら、大会を前にして考え方をしているらしい。

「別に緊張することないなんてないわよ。あんたに勝てる奴なんてまずいないから」

「つひもせつひで。自信持つたひつや?」

「試合に勝つ自信はある。だが、どうにも嫌な感覚を覚えてな……」

魔王はショリカたちの励ましにも煮え切らない態度で答えた。そして、どこか空の遠くの方を見る。今日の空は快晴で透き通るようであつたが、魔王は何か嫌な胸騒ぎを感じずにはいられなかつた。

魔王がそうしてすつきりしない様子でいると、その後ろからシアが近づいてきた。シアは魔王の横に並ぶと、彼に何か薄い紙を見せつける。

「魔王、これを見て！」

「うぬ……。魔王も愛用していた特製ブレスレットだと？」

シアが魔王に見せた紙には『あの魔王も愛用！ シア神官の特製開運ブレスレット！』と書かれていた。魔王はそれを見てさすがに驚いたような顔になる。するとシアは事もなげに言つた。

「このチラシに書かれているブレスレットを限定千個で販売するの。売れ行きはあなたの活躍しだいだわ、だから頑張つて。優勝することを期待してるわ！」

「やうか……。なら頑張るとしよう……」

魔王は目をお金のように輝かせるシアに、呆れたように言つた。シアはそれを聞くと、ほくほく顔をしてまた後ろに下がつていく。だがその時、サクラの手がシアのチラシへと伸びた。

「ひつ、人に無断で商売を始めるんじゃない

「あつ、それを返して！」

「ダメだ。こんなインチキ臭い商売を私は認めんぞ」

「むう……」

サクラにチラシを取り上げられたシアは膨れつ面でサクラを睨みつけた。だがサクラはそれを見ても馬耳東風、まったく気にしない。しかし、その後のシアのつぶやきにサクラの背筋が凍つた。

「そつ……なら良じわ、あきらめる。でも、この商売に必要なお金手に入れるためにサクラの刀を担保にしたわ。商売できないならそれも返つてこないけど良いの?」

「えつ……あああーー！」

サクラが確認してみると、なんと新しく買つたはずの刀が元の竹光に戻っていた。しかもばれないよつこにするためか、鞘の中に重しの砂まで入つている。

サクラの顔がみるみるうちに赤くなつていつた。瞳に怒りの炎を燃やし、頭から湯気が立ち上る。背中に炎を背負つているよつこも見えるその姿は、まさに鬼のようであつた。

「シャーアアーーーー！ 今日とこいつ今日は絶対に許さんぞオーーー！」

「うわ、恐い！ 助けてみんなー！」

「……これはシアが悪いわね」

「すまんな、うちにもフォローできへんわ」

「そつ、そんな……みんな薄情なの！」

……結局、シアは拳ほどの大きなたんこぶを一つもつくりた。サクラはたんこぶを押さえて涙目になつて、シアを見ると、すつきりしたのか良い笑顔になる。

そうして大騒ぎしているうちに魔王たちは闘技場に着いた。闘技場は大きな円形をしていて、その周りを大群衆が取り囲んでいる。闘技場は大きな屋敷がすっぽりと收まり、その大きさで、重厚な石で出来ていた。しかも広さだけでなく高さもあり、遠くからでも見上げるような大きさだ。

魔王は闘技場の持つ迫力にしばし感嘆した。魔界でもっとも大きな建物は魔王城だが、この闘技場ほどの大きさではない。それゆえ魔王は闘技場の圧倒的な大きさに感動したのだ。

シェリカたちはお上りさんのように関心しきりの魔王を引っ張つて、大会の受付へと向かった。すると、すでに受付の周りには黒山の人だかりが出来ている。だがその全員が出場選手ではないようでもしろその応援に来ている人の方が多いようであつた。

その人ごみの中をシェリカたちはかきわけかきわけ、進んでいった。すると、周りをたくさんのギャラリーに囲まれた一人の選手が彼女たちの姿を仔ざとく見つける。

「おや……あの娘たちなかなか……。右からハ十八、九十、九十三といったところか……むむつ！　あの着物娘、百三だと！」

男の目の色が変わつた。彼はキヤアキヤアと騒ぐギャラリーたちを置き去りにすると、一瞬でシェリカたちの前に姿を現す。そして

突然のことにならぬとするサクラの方を見て、気障つたらじい口調で言つた。

「ハーアお嬢さん。今日は出場しに来たのかい？ それともこの僕の応援かな？」

「なつ、なんだお前は？」

「おつと、僕としたことが名乗るのが遅れたね。僕は薔薇十字騎士団団長カルマーセ、これから闘神祭で優勝する男だ。覚えておいてくれたまえ」

「はあ……。それでそのカルマーセさんは私に何の用があるのだ？」

サクラは呆れかえつた様子でカルマーセを見た。すでにサクラの隣に立つているシアなどは、カルマーセの白いえんび服のような服装と気障過ぎる態度に爆笑している。

だがカルマーセは神経が太いのか鈍いのか、そんなシアたちの笑いにまつたく反応しなかった。そして、大袈裟で芝居がかつた態度で話を続ける。

「あまりにも美しいお嬢さんがいたのでね、つい声をかけてしまつたのさ。どうだい、このあと『テートしないかい？』

「……無理だ」

「そつ、即答だね……。一応、理由を聞いておこつつか？」

「これからこの男の応援をしなければならんからな、無理だ」

連れの男の話をすればさすがに引き下がるだろ？と思つたサクラ。彼女は魔王の方に目を向けて笑いかける。だがカルマーセはそちらのナンパ男とは違つた。

「ほづ、この男の応援を？　ふふつ、それは残念だね。なぜならこの僕が優勝するからこの男が優勝することはありえないのさ。……そうだね、君には試合で僕の凄さをわかつてもらおう。こんな男よりも數十倍強くてかつこいいということをね！　それではさらば、僕の凄さを理解した君が僕の前にまた現れることを期待しているよ！」

カルマーセはそれだけ言い残すと、また一瞬にしてギャラリーたちのもとへと戻つていく。その場には、呆然と立ちつくす魔王たちだけが残された。

「刀は質に入れられるし、馬鹿男には絡まるるし……。サクラ、今朝はあなた最高についてないわね……」

じつしてシェリカのどこかサクラに同情したかのよつなさやさが、寂しく辺りの喧騒に消えていったのだった。

第三十話　闘神祭、開始！

第三十話　闘神祭、開始！

群衆の熱気の渦巻く闘技場前。その人波の中で、魔王たちはしばし呆然としていた。だがずっとそうしている訳にもいかないので、彼らは気を取り直すと受付へと向かう。

受付にはすでに列が出来ていた。いかにもといった雰囲気のシーカーたちが並んで、次々とテーブルの上の紙に記入をしている。受付待ちのシーカーたちの数はざつと二十人ぐらいはいるだろうか。

魔王はそのシーカーたちの列の最後尾に並んだ。するとシェリカたちは魔王から少し離れ、彼に向かつて叫ぶ。

「良い、あんたは深層旅団の代表なんだからね！　大丈夫だとは思うけど、頑張るのよ！」

「そうだぞ、私たちの代表なんだからな！」

「サクラの刀がかかつてるんやからなー頑張り！」

「勝たないと私が儲からないわ。だから頑張る」

四人の声援には様々な思いが詰まっていた。それを聞き届けた魔王は四人に向かつて軽く手を振ると、不適に笑う。

「もちろんだ、負ける気はない」

ショリカたちは魔王の余裕のある顔を見ると、どこか安心したような表情になつた。そして、手を振りながら闘技場に向かつて去つていいく。魔王は彼女たちが闘技場の入口に吸い込まれたのを確認すると、改めて前を向き直した。

「次の方、『記入をどうぞ』

そうして魔王が待つていると、順番はすぐにやつて來た。彼は受付の黒服に呼ばれるとすぐに紙に必要事項を記入していく。さらさらと流麗な筆致で、魔王は記入を完了した。

黒服は記入された用紙を確認するため自分の顔に近づけた。だが、その記入欄の名前と書かれている部分を見ると露骨に眉を歪める。

「プロイス・フリード……」

「魔王で良い。長いからな

「そうですか。では魔王さん、あちらの選手入場口の方へお進み下さい」

黒服は受付の奥の方向を手で示した。そこには確かに選手入場口と貼紙がなされた入口がある。すでに受付を終えたらしいシーカーたちは、続々とそこから中へと入つていった。

魔王は黒服に軽く会釈すると、入口へと向かうシーカーたちの中に紛れていいく。そしてゆつくりと、小さな選手入場口をくぐつたのだった。

魔王が受付を終えて闘技場に入った頃、ショリカたちは観客席に

到着していた。しかし、数万単位であるはずの観客席はすでにかなり埋まつていて、空席はほとんど見当たらない。シェリカたちはそんな辺りを見渡して、しまつたという顔をした。

「出遅れたわね。まさかこんなに早く集まつてるとば

「私は初めて来るが……。こんなに混むものなのか？」

「一年に一度の楽しみやからね。毎年超満員で立見が出るんや。……でも困ったなあ、これじゃあ魔王はんの活躍が全然見えへんで」

戦闘の行われる舞台が良く見える前方の席は、例外なく人であふれかえっていた。選手の応援にきたシーカーや一般の見物人の猛者たちが、激しく押し合つて席を争つていて。その戦いは時折、弾き飛ばされる人が出でているほどだ。

さすがのシェリカたちもその白熱する場所取り戦争に参戦するのはごめん被りたかった。なので彼女たちは仕方なく後方の空いている席へと移動しようとする。

だがその時、シアガとある集団を見つけた。その集団は熾烈な場所争いの中、巨大な岩のようにがつちりと席を確保して動かない。彼らは全員、十字架の描かれた長い帽子をかぶつていた。

その集団を見た時、シアは何かを閃いた。彼女は前を歩くシェリカたちを呼び止めると、そつと耳打ちする。

「みんな、今いくら持つてん？」

「えつ、急に何よ。何するつもりなの？」

「いいから、いくらあるの？」

シアは有無を言わせぬ迫力で言った。まるで目から炎が出ていて、うなほどだ。その勢いに押されて、渋々ショリカたちは所持金の額をシアに告げる。

「……わかったわ、私は三万ルドよ。サクラは？」

「私は一万五千だ。エルマはいくら持っている？」

「一つかは一万七千やで」

「それだけあれば十分ね。ちょっと行ってくるわ

「あつ、ちよつとどびこ行くのよ」

シアはショリカの静止を聞かず、さきほどの集団のもとへと駆けて行つた。そして彼女は、集団の中でも一際豪奢な帽子をかぶつて、いる老人に話し掛ける。

「神官長、シアですが四つ席を譲つて頂けますか？」

「かまいませんよ。ですが……」

神官長は手を差し出して、親指と人差し指で輪を作つた。彼はその輪をシアに向けると、わかっているだらうとも言つよつた顔をする。するとシアも心得たもの、神官長の望んだ通りの答えを返した。

「一席あたり一千九百八十で」

「ダメです、三千九百八十です」

「三十二五、これできつさりです」

「三十五百、これが限度ですよ」

「三十四百。これで目一杯です」

「……わかりました、お譲りしましょう」

神官長は横にいた神官たちに配せした。四人の神官たちはすぐに立ち上がり退出していく。シアは神官長に頭を下げるときぐにシリカたちを呼びに行つた。

「みんな、一人三千四百ルドで席を確保してきたわ。ついて来て」

「えつ、ああわかつたわ」

シリカたちは何がなんだか良くなきまアに続いていつた。そして、神官長に怪訝な顔をしながらもお金を払つて席につく。

シリカたちは手に入れた席は最前列だつた。そこからは闘技場全体が見渡せて、舞台もはつきりと見える。舞台の四角いタイルのわざかな欠け具合が確認できるほどはつきりだ。

シリカたちは席に腰を落ち着けるとそこからの眺めに満足そうな表情をした。だがその後、彼女たちはシアを複雑な目で見る。

「良い席ねえ……。でもちょっと高かつたわ」

「あれでも知り合い価格で格安なのよ。……それより見て、そろそろ開会式が始りそう」

シアは舞台に向かつて走つている男を指差した。彼は黒いえんび服を来ていて、シルバーの髪をオールバックにしている。さらにその額には『実況魂』と書かれた長いハチマキを絞めていた。

男は円筒形をした魔法具を手にして、舞台の上に駆け上がつた。観客席がにわかに静まり、男に向かつて視線が一気に注がれる。彼は大きく息を吸つて、肺を膨らませると割れんばかりの声で高らかに宣言した。

「お～ま～た～しましたア～！　ただいまより、第一三百三十回闘神祭の開会式を開始致します～！」

「つおおお～！」

闘技場が大歓声で揺れた。声はさながら津波のごとく、闘技場を飲み込んでいく。散々待たされた群衆たちは騒ぎに騒いで、闘技場の中は留めようのない興奮に覆われた。

だがこの嵐のような状況の中でも、さすがプロといふべきか黒服の男は動することなくプログラムの進行を開始した。彼は群衆のざわめきにも負けない良く通る声を、力一杯張り上げる。

「まずはこの闘神祭の運営委員長であるシーカークランの長、マルト様より開会の言葉をいただきます！　それではマルト様、どうぞ

！」

黒服の男は後ろの貴賓席に田をやつた。すると筋骨隆々とした熊のような大男が立ち上がり、舞台をゆっくりと踏み締めるように上がりしていく。そして、彼が舞台の中央につくと黒服は魔法具をそつと手渡した。大男はそれをむんずと受け取り咳ばらいをすると、闘技場の岩にヒビが入りそつたほどの大声を出す。

「諸君！ 今年も闘神祭がやつて來た！ 今年もハイレベルで歴史に残る闘いがここで繰り広げられるだろ？！ 君たちはまばたきすることなくそれを目に焼き付けてくれ！ それでは第一回、闘神祭の開催を宣言する…！」

「うわあああ…！」

闘技場が爆発した。群衆のもつエネルギーが弾けて、熱狂の嵐が吹き荒れる。見物人たちみな顔を真っ赤にして、隣と肩を組みながら叫べるだけ叫んでいた。

いひして闘神祭は熱狂と興奮の渦巻く中で始まつたのだった。

第三十話　闘神祭、開始！（後書き）

雰囲気を出せつとしたらなかなか話が進まない……（涙）

第三十一話 予選開始！

開会宣言がなされ、闘技場の熱気は最高潮に達していた。数万の群衆が沸き立ち、歓声が響き渡っている。さらに闘技場の近くから花火が打ち上げられ、いやがおうでも雰囲気は盛り上がりについた。

司会の男は宣言を終えたマルトから魔法具を受け取ると、その金網の部分を軽く叩いてみる。そして調子がおかしくなつていないと確認した彼は、再び声を上げた。

「続きましては大会の予定について申し上げたいと思います！ 本日は今から準備ができ次第予選を開始、予選が終わりましたらお昼休憩を挟みまして、本選の準決勝までを行わせていただきます！ そして明日の朝十時より、決勝戦を開始致します！」

「つおおおーー！」

「それでは予選の準備に取り掛かりますので、しばらくお待ち下さい」

司会の男は舞台から下りていった。それと入れ代わりにつなぎを着た作業員たちが現れ、てきぱきと予選の準備をしていく。実況と横に書かれたテーブルが舞台の脇に置かれ、飾りつけの花などが撤去されていった。

舞台で予選の準備が着々と進行している頃、魔王は選手控え室にいた。アーチ型を多用したホールのような広い控え室は、出番を待

つ屈強な選手たちでいつぱいだ。魔王はそのむせ苦しい選手たちに辟易したのか、部屋の端にある小さな窓の近くに寄り掛かっている。

「うへして魔王が渋い表情をして窓からの風に吹かれていると、控え室のドアが開けられた。開いたドアの隙間から、セキセキの同会の男がバタバタと入ってくる。

慌ただしくやって来た男は、手に穴の開いた箱を抱えていた。彼はその箱を控え室にあつたテーブルにドンと置くと、選手たちの方をざつと見渡す。

「えへと、選手の皆さん。今から予選のプロック分けを行いますのでここにあるクジを引いて下さー。」

「クジ引き? そんなもん去年はやらなかつただろ」

「今年は出場者が多いので予選の方式を変更したんです。去年までは総当たりのトーナメント方式でしたが、今年はハツのプロックに分かれてのバトルロワイアル方式となりました」

「ほう、そりゃあにいやー、つまらねえ奴との試合をこりこりやらなくて楽だぜー。」

逞しい体つきをした一部の選手たちは豪快に笑うと、一斉に魔王の方を見た。さきほどから一人で風に吹かれているこの優男風の選手を、彼らは気に入らなかつたのだ。彼らは魔王に近づくと、嫌らしい笑みを顔いっぱいに浮かべる。

魔王はそんな選手たちの下品な嘲笑に、睨むことも文句を言つこともしなかつた。ただ黙つて、さきほどまでと同じ態度を貫くのみ

である。馬鹿は相手にしないに限るのだ。

「……」
「いつ怖くて何も言えないのか？ ガハハ、氣の弱い奴だぜ。みんな、もうこんな奴ほかっておいてさつとクジを引こうぜ」

選手たちは魔王の態度を勝手に都合良く解釈すると、大声で笑いながら去っていった。騒がしさから解放された魔王は、若干疲れたような顔をしてクジを引きに行く。

その時、一人の選手が彼に近づいていった。長い傘を手にし、黒いサマーワードレスのような服を着た艶っぽい女だ。魔王はその色香の溢れるよつた姿に、どこか見覚えがあった。

「すまんが、どこかで会ったか？ 余ははつきりと覚えておらぬが……」

「直接話すのは初めてですわ。でも、私はいつもコリアス団長の陰にいましたから、顔自体は何回も合わせてますよ」

「ああ、コリアスの脇にいたあの。名前はなんと言ったかな？」

「アイリスと申します。お見知りおきを」

「アイリスか。余は魔王だ。……して余に何の用だ？」

魔王は怪訝な顔をしてアイリスに尋ねた。するとアイリスは冷ややかな視線を一瞬、さきほどの選手たちに送る。そして魔王に向かって含みのある笑みを浮かべた。

「いえ、あなたがあの馬鹿たち相手に黙つていらしたから氣になり

まして。あなたなら睨むだけで、黙らせぐりこでさぬでしょ」「てうみ

「馬鹿は下手に構つとよつひるわく騒ぐからな。ほかつておくに限る」

「ふふ、たしかにそうですわね、私も同感です。……それでは健闘を祈つておりますわ。もつとも、私が祈らなくとも大丈夫でしょうけれど」

アイリスはそういうと、甘い香りを残して歩き去つていった。魔王は彼女の後ろ姿に鋭い目を向けるが、すぐになんでもなかつたような表情に戻る。そして彼も、クジを引くために司会の男のもとへと向かつた。

「あなたで最後のようですね。さあ、引いちゃつて下せー」

魔王が前に立つと、男は箱をズイッと押し出してきた。最後だというのに球はまだいくつか残つていたのだ。参加者がちよつとハで割り切れる数ではなかつたのだろう。

魔王は球を手早く何の気なしに引いた。そして出てきた球には一と書かれている。魔王からそれを受け取つた男は、番号を確認して紙に書き留めた。そして軽く魔王に会釈して、舞台の方に走つていいく。魔王はその後を一人、ゆっくりと舞台へと移動したのだった。

長い準備時間の間に、闘技場の中はどこかおだやかな空気になつていた。待ちくたびれた観客たちの目は、おだやかな陽気に緩んでいる。特にシアなどは、船をこいでサクラに怒鳴られたりしていた

ほどだ。

そんな最中、舞台の上に司会の男が戻ってきた。さらに選手らしき姿が舞台の周りに現れる。闘技場の空気がにわかに慌ただしくなつて、観客席の空氣も一変した。

「お待たせしました！ 準備の方が完了しましたのでただいまより予選を開始したいと思います。ではまずルールの説明から。今回の予選は本選に出場する八つの選手枠を賭けて争われます。出場した八十三人の選手たちはそれぞれ、第一から第八まで八つのブロックにすでに分かれて頂きました。そのブロックから各一名、合計八名の代表者をバトルロワイヤル形式にて決定するのです！」

男の告げた方式は、これまでの闘神祭の予選とは違つていた。観客たちはにわかに色めき立つて様々な話を始める。どうして方式が変わったのか、自分の戦闘の選手に影響はないかなど、その話の内容は実際に多様であった。

だが、そんな観客席の動搖はすぐに収まった。方式が変わった影響などやつて見ればすぐにわかるし、何よりみんな早く戦いが見つかつたのだ。観客席のざわめきは急速に消えていき、変わりに待ちわびるような視線が舞台の上に注がれる。

その観客たちの意を汲んだのか、司会の男はすぐに実況と掲げられた席についた。さらに隣の解説席に、どこからかスースで決めた胡散臭い雰囲気の老人を呼び寄せる。そして彼は、さつそく予選開始に向けたアナウンスを始めた。

「それでは予選第一ブロックの試合を始めたいと思います。この試合に参加する選手は、バルム、メイスト、ケインズ、スルベム、オ

ービス、コール、マイラ、ゴルドン、タリム、キャロル……えつ……
プロイス・フリー

「魔王で良い」

「あつ、そうですか。では魔王選手の以上、十一名です。ではさつ
そく選手入場！」

名前を呼ばれた選手たちは、次々と舞台上に上がつていった。観客
席から熱い声援が出席選手たちに飛ぶ。その中には当然、シェリカ
たちのものもあつた。

「魔王、頑張つて！」

「絶対勝つんやでーー！」

「お前が負けるなどありえんだろうが……頑張るのだぞ！」

「……予選はかませ犬ばかりだから応援するのもやる気が入らない
わ……。でも一応頑張つて」

一人やる気がないようだつたが、おおむね気合いの入つた応援を
送つたシェリカたち。魔王はそれに手を軽く振つて応えた。だが、
そんな魔王に一人の選手が忌ま忌ましげな目を向ける。その男はさ
きほど魔王を笑つていた一人だつた。

「女とつるんで……これから優男はダメなんだ。この試合で俺が
お前に、ほんとの強さつてやつを教えてやる！」

男は腰に手を当てて、魔王の額をビシッと指差した。魔王はそんなわかつてない男に疲れたような顔をする。その魔王の態度に男は沸騰したように赤くなり、今にも魔王に殴りかかりそうになつた。その時……

「貴様、準備は良いよつですね。試合開始です……」

実況の男の渾身の叫びとともに、戦いを告げる鐘が鳴り響いたのであつた……。

第三十一話 圧倒

第三十一話 圧倒

陽光を反射して白く輝く舞台。滑らかな石が硬く光っている。その上は今、選手たちの熱気で蜃気楼のごとく揺れていた。殺氣や霸気が渦巻いて、鮮やかな火花が飛び散っている。

魔王はその緊迫の中で、一人の選手に睨みまれていた。選手の男は魔王より頭一つ大きく、使い古された革の鎧を着た体はどっしりと筋のよび。田つきは肉食獣のようでいかにも鋭い。

「うひああ！」

男は巨大な剣を振り上げた。次の瞬間、男の身体がぶれる。男の足元の石が軋み、舞い上がった砂塵とともに巨大な身体が風をきる。質量を忘れたかのような速度と軌道を見せる大剣は、たちまちのうちに魔王に迫った。

「速いが真つすぐ過ぎる」

「なに…」

男が剣を振り落とした時、魔王の姿はそこにはなかつた。大剣はむなしく石を碎いて舞台に減り込む。男が青い顔をして魔王の姿を探した時、魔王の足が横から彼の身体に炸裂した。

「ぐはああ…！」

男の口から血が飛び散った。筋肉の塊とでもいうべきその身体は有り得ない方向に曲がり、空中を滑り始める。彼は直線上にいた二人の選手を吹き飛ばしながら、観客席の壁に叩きつけられた。石でできた壁にヒビが入つて、男の身体はその間隙に潜り込む。地震のよつた轟音が闘技場の空気を激しく揺さぶつた。

にわかに闘技場に沈黙が訪れた。選手や観客たちはみな息を呑み、魔王に視線を向ける。彼らの表情には驚愕と衝撃が入り混じつて、開いた口がふさがらないよつだつた。

「…………これは凄い！ 予選開始からわずか十秒足らずで、三人の選手が舞台から弾き出されてしまいましたア！！ しかも一人の無名選手の手によつてです！ こんなことを誰が想定したのでしょうか！！ ……今の流れをどう思いますか、解説のマスター…………ごほん！ ではなくミスター×さん！」

司会の男は慌てた様子で叫ぶと、隣の解説席に魔法マイクを移動させた。すると解説の老人は、もつたぶるよう掛けていたサングラスの位置を直す。そして彼は、落ち着いた重々しい口調で解説を始めた。

「つむ、今のは氣を瞬間的に使つたのじゃうつな。おそらくマントを着た男は大男の攻撃をすれすれでかわし、入れ違いざまに氣で強化した足で蹴つたのだ。これだけ言うと簡単に聞こえるが、あの大男の攻撃をかわすだけでも達人級の技量が必要じゃぞ」

「なるほど！ 解説ありがとうございました！」

司会の男はミスター×からマイクを受け取ると、再び舞台の上に視線を注ぎ始めた。その額からは汗が滴り落ちて、頬は興奮してい

るのか紅い。

一方、そんな騒然としている闘技場の中でシェリカたちは落ち着いていた。魔王のレベルを知っている以上、これくらいは有り得ると思っていたのだ。そのため周りの観客たちが言葉を失っている中、四人はさきほど魔王の戦いについて比較的冷静に話している。

「サクラ、あなたは魔王の動きが見えた？」

「かるうじてといったところだな……。シェリカの方は？」

「私はダメね。ほとんど見えなかつたわ……」

シェリカは手を上げて、文字通りお手上げといったポーズをした。サクラはそれを見ると深刻そうな顔をして頷く。

「姿が消えたようにみえる速さだつたからな、無理もない。だがあの攻撃の本質は速さではなく力だるう。一瞬で気を練り上げた蹴りを入れるなど、並大抵ではない……」

「そうね。ほんつと魔王つて一体何者なのかしら……」

それきりシェリカとサクラは黙り込んでしまつた。俯いた二人は、再び鋭い目を舞台に向ける。するとちょうどその時、舞台の上の選手たちに動きがあつた。

「……みんな、こいつを先に片付けるぜ！」

「よしッ！ その作戦のつた！」

「俺も参加させても、うづぜー！」

舞台に残っていた魔王以外の七人の選手たち。彼らの心がにわかに一つになつた。彼らは魔王の周りを取り囲み、武器を構える。その表情はいづれも強張つていて、魔王に対する明確な恐怖が見てとれた。

選手たちによって強固に包囲された魔王であつたが、彼の表情には余裕があつた。にやりと口を歪ませて微笑むその様子は、かかつてこいと言わんばかりだ。その余裕を選手たちは恐れ、彼らの恐慌状態が深まつていいく。

そうして舞台の上の緊迫が頂点を極めた時であつた。

「行くぞオ！」

不意に一人の選手が雄叫びを上げ、魔王に突撃した。その後を他の選手たちも次々と続いていき、魔王に向かつて数々の攻撃が繰り出される。

まずははじめに魔王に襲い掛かつたのは、巨大な斧であつた。鍛え上げられた丸太のごとき腕により繰り出されるそれは、恐るべき速度をもつて魔王を引き裂かんと空を切る。

魔王は重心をずらし、それをなんなくかわした。攻撃をかわされた男は前にのめり、バランスを崩す。魔王はその無防備となつた背中に強烈な手刀を振り下ろした。みしりと嫌な音がして、男の身体は舞台の石に崩れ落ちる。

続いてその魔王の背中を目がけて、一人の男が突つ込んだ。男た

ちはそれぞれメリケンサックとナイフを手にして、瞬速で魔王に接近する。魔王といえど後ろに田はない、背中には隙がある……はずだった。

「あばあ……！」

「ふぐはああ！」

男たちの腹に、魔王の裏拳がめり込んだ。彼らは腹を押さえながら白目を向き、意味不明な叫びとともに倒れる。その身体は倒れた後もしばらく痙攣していた。

「ちつ、接近戦は無理だ！ 遠距離で行くぞ！」

残った四人は魔王からすぐに離れていった。彼らはある程度魔王から距離をとると、あらためて武器を構えて魔王を包囲する。

魔王と選手たちの睨み合いはしばらく続くと誰もが思つた。だがその包囲網は、大方の予想に反してあっけなく崩れさつた。

「……やつ、やっぱり無理だ！ こんな奴を倒せるわけねえ！ 僕は棄権する！」

「おっ、おい！」

一人の選手が、武器を捨てて自分から舞台の外に逃亡していった。恐怖が男を支えていたプライドを超えてしまったのだ。さらにその後を、二人の男が恥も外聞もかなく捨てるかのように追いかけていく。舞台の上には少し呆れたような魔王と、呆然として固まる人の男だけが残された。

「お前は逃げなくても良いのか？」

「くそったれHHH……」

最後の男はもはや武器すら持たず、全身全霊、身体の全ての力を拳に込めた。拳は残像を残し、雷を追い越すような一撃となる。ひとたび地面に炸裂すれば、地が裂けるのが容易に想像できるほどだった。

魔王はその拳を避けなかつた。かわりに手を出してそれで拳を受け止める。拳が魔王の手にぶつかった瞬間、大砲が撃たれたような轟音と衝撃が闘技場に轟いた。

「なつ……」

魔王の身体は揺れもしなかつた。さきほどと一寸足りとも変わらぬ位置に、彼は立つてゐる。ほんのわずからぶれも、その時の魔王には存在はしなかつた。

男の顔は蒼白となつた。そして皿もすぐに皿のみとなる。魔王の攻撃により、悲鳴を上げることもなく彼は氣絶したのだ。

男の身体はゆっくりと地面に倒れていつた。魔王はそれをつまらなさそうに見送る。そして試合の終わった魔王がどこか物足りらないような顔をして舞台から立ち去ろうとした時、観客席から割れんばかりの拍手が巻き起つた。

「……凄い……。圧倒的だアア！ 強い、強いぞ魔王！ これほど の試合を私たちは見たことがあつたでしょうか！ ！ どうか皆さま、

彼に盛大な拍手を……

司会の男が叫ぶともはや観客席は総立ちであつた。観客たちは全員歓喜したように沸き立つていて、その顔は明るい。

「ハハして魔王の予選は彼の圧勝によつて拍手とともに終わったのであつた。

第三十二話 怪しい選手たち

第三十二話 怪しい選手たち

魔王は闘技場を揺さぶるような大歓声と拍手の中、悠々と舞台から降りていった。彼はそのまま解説席の方に移動すると、未だに興奮した様子の司会の男にそつとしゃべる。

「本選が始まるのはいつ頃になる?」

「ええっと、一時半頃を予定しておりますが」

男は少しばかり面食らったような顔をして魔王に答えた。すると魔王は、空を見上げて太陽の位置を確認する。太陽はまだ中天に差し掛かるわずかばかり前であった。

「ならば一時頃までに戻つてくれれば出かけても問題ないか?」

「ええ、構いませんよ。ですが時間までには戻つてきて下さいね」

「もちろんだ」

魔王は怪しげに笑うと、闘技場の壁に円く空いている通路に向かって歩き去つて行つた。司会の男はその背中をどこかぼんやりと見送る。だが一方で、魔王の背中に鋭い眼差しを送つてゐる者たちもいた。

「思わぬつわものがいたぜ……！　はははっ、コリアスが出なくてがっかりしてたがこれは面白いかもなあ！」

闇色のロングコートで身を包んだ男が、狂氣を孕んだ笑いを上げた。その顔は蒼白で紫がかったおり、瞳は血走ったような紅である。だがその紅い瞳には力がなく、人工的な冷たさにあふれている。

さらにこの男のシルエットには違和感があった。コートの右腕に当たる部分が異様に膨らんでいるのだ。しかもコートが風で揺れるたびに、膨らんでいるあたりから鈍い鉛色の光が現れる。実を言うとこの男の目は義眼で、右腕も鋼でできた義手であった。

この修羅のような男は、地獄からの叫びのような悍ましい笑いを続けていた。すると、近くにいた少女がうんざりとしたようにゆっくりと男に振り返る。膝までかかる深緑のローブとフードで身体をすっぽりと隠した少女は、不気味な仮面を被っていた。白くのっぺりとした、笑いの表情の仮面である。

「少しうつむかしいのです。黙れです」

「こりゃあ、ずいぶんと可愛い声のお嬢ちゃんがこんなとこにいたもんだ。……だが俺にはわかるぜ、お嬢ちゃんの強い魔力がよ。おめえ、どこの有名な魔法使いだな？」

「戦士で冒険なのによく当たですよ。そうです、私はギルド紅杖魔法団の団長ルーミスです」

ルーミスは誇らしげに胸を張った。仮面に陽光が当たって、複雑な陰影が生まれる。それはちょうど、仮面の笑いの表情を強調しているようだった。男はその自信に溢れたルーミスの様子を知つてか知らずか得心したように頷いた。

「やつぱりな、あの魔法使い系では最強のギルド紅杖の団長か。道理で馬鹿みたいな魔力のわけだ」

「ええ、それに私の魔力は紅杖でも歴代最強なのです。ですから優勝間違いななのです！」

「はははっ、大した自信だなあ！ だがそう簡単にはいかないだろうぜ！」

男はずいっと顔を回した。紅いガラスの瞳が、周囲を威圧するようである。その時、男の口もとは歪んでいて微かな笑みを湛えていた。だがそんな男の態度に、ルーミスは不服そうな声を出した。

「どうしてなのです？ ゴリアスさんは出場しませんし、いつも準優勝しているあなたは去年の決勝で眼と右腕を失つてますよ。さきほどの男は強そうですが、私の優勝は間違いないのです！」

「甘い、甘いなあ……。俺の見立てではお嬢ちゃんぐらいの強さの奴は、俺たちとさつきの男の他に四人はいるぜ」

「そんな訳……ない！」

ルーミスはそう吐き捨てるように言つた、ドタドタと足を踏み鳴らし歩き去つていった。それを見た男はますます顔を歪め、壊れたよつた醜悪極まる笑い声を響かせる。

「はははっ！ 子供だなあ！ だが予選が終わつたら分かるだろうぜ……ふははあ！」

男が狂ったように笑っている頃、魔王は観客席にやつてきていた。そして、数万もの観客の中からシェリカたちの姿を探している。どこもかしこも似たような服装で埋め尽くされた観客席の中を、彼は舞台の上から見ただいたいの位置だけでシェリカたちを探していた。

しかし、彼は意外なほど早くシェリカたちしき姿を見つけた。大群衆の中でもひときわ目立つ神官服の一団。その真ん中に挟まるよみにして彼女たちがいたからだ。

「おい」

「あつ、魔王！ 戻ってきたのね」

「みんな昼食を取ろうと思つてな」

「そうね、早く出かけないと今日は混むからね。じゃあみんな行きましょうか」

シェリカたちは出かける準備を始めた。彼女たちは席を立つて荷物をまとめ始める。だがその時、シェリカたちの近くに座っていた神官長が慌ただしい彼女たちに声をかけた。

「どうかに出かけられるのかな？」

「あつ、はい」

「どうか、いや実は我々もそろそろ出かけなければならなくてね。席から離れるのであれば、誰か一人を場所取りに残しておぐと良いだろ？」「どう

神官長はそう言い残すと、神官たちを引き連れて去つていった。すると空いた席にすぐに入りがなだれ込む。またたく間に人で埋まつた空席に、シェリカたちは顔を青くした。

「これは絶対に場所取りがいるわね……。誰か一人が残らないと」

シェリカは目を細くして、隣の三人に目をやつた。すると彼女たちは困惑したように互いに顔を見合わせる。

「うう、うちは困るで！ 対人戦闘力なんてあれへんから」

「私もよ。この群集を追い返す自信はないわ」

二人は揃つてサクラを見た。そして、じつと見つめるような熱い眼差しを彼女に送る。サクラはそれに戸惑つたような顔をしたが、二対一では彼女に勝ち目がなかつた。そうして彼女は悔しそうに顔を歪めると、開き直つたように言つた。

「……うう、仕方ない……。私が留守番をしよう。その代わり、何か食べ物を買つてきてくれ」

「わかった。買つてくるからよろしく」

「ああ、任せておいてくれ」

サクラは大きな胸をどんと叩いた。豊かな膨らみが誇らしげに波打ち、たぷたぷと音でも立てそつなくらいだった。シェリカと魔王たちはそんなサクラの様子を確認すると、早速昼食を食べに出かけたのであった。

第三十四話 シア的食事法

第三十四話 シア的食事法

魔王とショリカたちは闘技場から出で、街へと繰り出した。すでに日は中天へと差し掛かりつつあり、街は人であふれている。あちこちに出た屋台から美味そうな匂いがながれてきては、四人の鼻を刺激した。

「早く何かを食べないと。お腹が空いてたまらないわ

「そうねえ、どこが良いかしら」

腹をさすりながら不満を言つたシアに、ショリカは少し困ったようになつた。だが、すぐに良い店を思い出した彼女は曇らせた顔をまた明るくする。

「ヒヨドリ亭に行きましょ。あそこなら屋からやつてゐし、なにより空いてるわ」

「ちよつと待て、マスターがいないのに営業してゐわけなかひつ」

「えつ、じつして魔王がそんなことを知つてゐるのよ」

ショリカはぽかんとした顔をして魔王を見た。すると魔王は彼にしては珍しく呆れたような顔をする。またそれに加えて、シアたちも冷ややかな視線をショリカに送つた。

ショリカは三人の態度に戸惑つた。彼女はあたふたと顔を右に左

にと移動させる。そうしていると、エルマが訳知り顔でシェリカに説明を始めた。

「あのなシェリカ、闘神祭で解説してたミスターXとかいうじいさん。あれ間違いなくヒヨドリ亭のマスターやろ。うちはマスターにあんまり会つことないけど、見てすぐ分かったで」

「あれ……そう言われて見れば似てたような……」

シェリカはミスターXと名乗った胡散臭い老人の姿を思い出した。確かにサングラスを外せば、マスターに良く似ていなくもない。そう思つたシェリカの顔はたちまち曇つていつた。

「……困つたわね。そうなるとどこもいっぱいよ」

あたりの店はどこもかしこも行列ができていた。しかも行列は時間が経つに連れて短くなるどころかどんどん伸びている。どの店に入つたとしても、ざつと一時間以上は待たねばならなさそうであつた。

別に時間があるのならば待てば良いのだろう。だが魔王は本選に出場しなければならないし、シェリカたちもその応援をしなければならない。困つたことに使える時間は限られていた。しかしそんな時、思いもよらぬ人物が四人の前に救世主として現れたのだった。

「やあ君たち、また会つたね！」

四人の前に現れた人物はなんと、カルマーセであった。彼は朝とは違つがやたら光る白銀の鎧に身を包み、長い金髪を盛んに撫でている。しかしその一枚目半程度には整つていた顔はすっかり赤く腫

れて、前歯が一本抜けていた。彼の今の顔を端的に総評すると、かなりの間抜けだ。

「ナンパ男！」

「おバカがうつるわ……近づかないで」

「そんなボコボコの顔で格好つけてもなあ……格好悪いで。というか試合はどうしたん？」

「そこにいる男も強いようだけど、僕はそれ以上に強いからね。あつという間に勝負がついたのさ。……ところで君たち、何か困ったような顔をしてたようだけじどつかしたのかい？」

カルマーセは気障つたらしくシェリカたちに尋ねた。シェリカたちは一瞬、眉をひそめるものの隠すほどのことでもない。すぐに元の顔に戻つてカルマーセに困つていた理由を説明した。

「」飯を食べようと思つて出てきたんだけどこも混んでてね。それで困つてたのよ」

「ハハハ、そういうことかい。それなら僕は良い店を知つているよ」

「えつ、本当？」

「ああもちろんさ。稲穂亭といつレストランなんだけど、味も雰囲気も最高でこいつの時でも「みごみとしないよ。」ぜつだい、これら四人でランチでも？ もちろん僕の奢りさ」

カルマーセは自信たっぷりに言つた。やうに胸元からさりげなく

薔薇を取り出して、ショリカの手に握らせる。その顔は緩み切つて、だらしがなかつた。

ショリカたちはカルマーセの態度に引いてしまつた。しかしここでシアが一人の前に出て行く。そしてにたにたとしているカルマーセと話しを始めた。

「良いわ。ただ四人じゃなくて五人になるけど良い?」

「五人だつて?」

「私たちにもう一人仲間がいたのは覚えてるはず」

「もちろん覚えてるさ。あれだけの巨……失礼、美人だつたんだからね。あつ、なるほど。彼女も来るから五人なのか」

「ふふふ……」

シアはただ怪しく笑つただけだつた。決してそうであるとかは言つていない。しかしカルマーセはその笑いを肯定の意味だと捉らえて、話をどんどん進めていった。

「そうかい、彼女も来るのか。ならば早く行つて待つっていた方が良いね。ほらつ、こっちだよ」

カルマーセは通りを東に抜けて、稲穂のマークを掲げたレストランの前に移動した。その店はいかにもといった立派な店構えで、大理石をふんだんに使つてゐる。さらにその店先のカウンターには、えんび服を着た執事のような男が立つてゐた。

「ああ、ここだよ。入りたまえ」

カルマーセは店の重いガラスの扉を開けると、中から手招きした。四人はカルマーセに促されるまま店の中に入つていいく。そして數十分後……。

「着物の娘は来ないし、野郎はついてくるし……どうなつてるんだ……」

「私はただ五人になるつてことど、仲間が他にいると言つただけ。サクラが来ると勝手に勘違いしたのはあなた」

店の勘定を終えて青い顔をしているカルマーセに、シアはどこまでも冷たく告げた。カルマーセはその言葉に目を細めるものの、文句は言わない。彼は筋金入りのフロミニーストだったのである。

だが彼はここで、自分にとつてストレスを発散するのに都合よい相手を見つけた。この集団の中で彼以外には唯一の男である魔王だ。

「くつ……こいつたのは君のせいだ！ きっと本選でメッタメタのギッタギタにするから覚悟していまえ！」

カルマーセは魔王をバシッと指差して、響くような大声で宣言した。そしてそのまま何故か闘技場とは逆方向に走つていく。しかしその時の魔王は腹が膨れて眠くなつていたので、カルマーセの宣言をほとんど聞いてはいなかつた。

こうしてカルマーセに食事を奢らせたシアやシェリカは、ご機嫌で闘技場に戻つていこうとした。だがその時、体を揺らすかのような爆音が空に轟いた。シェリカたちは身を固めて立ち止まり、辺り

を見回す。

道行く人々もそのほとんどが足を止めていた。時が止まつたかのように入々は固まり、闘技場の方向に視線を向けている。さきほどの爆音は闘技場の方から響いてきたようであった。

「予選で何かあつたのだな。急ぐぞ」

すっかり眠気の取れた魔王。彼は呆然とした顔のシェリカとシアの手を掴むと、闘技場に向かつて走り出した。その後をエルマも急いで追いかけてゆく。闘技場からは煙が上がつていて、何か良からぬ事が起きたようだつた……。

第三十五話 危険な傘使い（前書き）

今回は少し短めです。

第三十五話 危険な傘使い

第三十五話 危険な傘使い

魔王たちが闘技場についた時、彼らの目に大変な惨状が映つた。白かつた舞台の上が黒く煤けて、石があちらこちらで剥がれてい。それらは熱で溶けたのか、ガラスのようになつていて。光をテラテラと反射する黒いそれらは異様な迫力をもつて魔王たちの感覚に訴える。

その舞台の惨状の上に、人の残骸のようなものが横たわっていた。彼らは完全に焼け焦げて、もはや形以外には人であったことを感じさせない。その脇に残された鋼の鈍い輝きだけが、彼らが選手であったことを物語つていた。

この世界に地獄があるならば、その見本とでも言つべき光景。その惨劇の中心に、一人の女が立つていた。黒いサマードレスを着た彼女は傘を手にしていて、その姿は晩餐会の帰りのようだった。その顔に浮かべられた微笑みは美しく、上品にして優雅。貴婦人と称するのがふさわしいものだ。

しかしその足元には地獄が広がつていて。その対比が、彼女の笑みを悍ましく危険なものへと変えていた。観客たちは微笑みの裏に淒惨なものを感じて、背筋を完全に凍てつかせている。

「これは……なんてことよ」

「あつ、あの女一体なんなんや……」

ショリカたちはたちまち表情を固めた。目は裂けそうなほど開かれ、口には手が当たられる。色を失った彼女たちは、慌てて観客席の通路の階段を駆け降りていった。そして見慣れた着物姿の女を見つけると、すぐに走り寄っていく。着物姿の女、サクラの方もショリカたちに気がついたようでこちらに振り向いた。

「何があつたのよサクラ！」

「ああつ、ショリカか。今、最後の予選が終わつたところなのだが……。見ての通りだ、あのアイリスとか言つ女が魔法で他の選手をすべて吹き飛ばしたんだ！」

「魔法で？ どんな魔法よ」

「手に持つてゐる黒い傘があるだろ？ あれから光線が出たんだ！」

サクラはアイリスの方向を指差した。ショリカたちも目を細めて、傘に注目する。瀟洒で華奢な傘は細い一本の黒木のようであった。柄は艶のある黒檀のような木で、布地の部分はビロードのよう。布地に何か複雑な紋章のような意匠がほどこされてはいたが、なんと言つことのない普通の傘だ。

ショリカたちはとてもそれが光線の出るようなものには見えなかつた。しかし魔王だけはふつむと息をつき、納得したような顔をした。

「ほう、なるほど」

「何かわかつたの？」

「ああ。あの傘は布地の部分に魔法陣が印されているのだ。だから開けば魔法陣が展開されて魔法が発動する。傘から光線が出せたのはそういうことである」

「つまく考えたものね。それなら複雑な魔法陣が必要な大魔法も、魔力さえあればすぐに使えるわ」

普通、大規模な魔法を使用する際には魔法陣をその場で描くか、あらかじめ魔法陣の描かれた布を用意しておるものである。この時描く場合はむろん、布を用意する場合でもしわ一つなく広げなくてはならないためなかなか面倒である。しかも一部の攻撃魔法は魔法陣に対して垂直に放たれるため、布を貼る板を用意したりせねばならずいちいち大変だ。

しかし、傘の布地に魔法陣を描けばすべて解決できる。一瞬で布をピンと張れる上に、魔法陣の角度も調整可能。しかも板とは違つて置んでおけば邪魔にならない上に、近接武器の代わりにもなる。

一見奇抜だが、恐ろしいほどに実用的。ショリカたち、特に魔法を多用するシアやシェリカはその事実に気づくと恐怖を感じた。彼女たちの背筋をにわかに冷たいものがたどり、心が凍る。得体の知れないものへの恐怖がそこにはあった。

「魔王、私の刀のことは考えなくても良いぞ。むろん魔王が勝てると思つならば戦うこと止めはしないが……。」

サクラは懇願するような顔で魔王を見上げた。その目には行かないと欲しいという思いがはつきりと見て取れる。

「無理はしないでも良いのよ……」

「魔王はんのことなんだかんだ言つてもひからは心配なんやで……」

…

ショリカたちもサクラに続いて魔王を見た。不安や心配が彼女たちの心を埋めているようで、その目は潤んでいる。しかし魔王はそんな心配症な彼女たちに、小さくも力強くさやきかけた。

「大丈夫だ、心配ない。必ず勝つて戻つてじよ」

魔王は真つすぐな目をしてそう告げると、観客席の階段を降りていった。その顔には微かな笑いが浮かべられていて、戦いを楽しみにしているようである。魔王とはやはり、戦いが好きな種族なのであつた。

魔王はしつかりと、それでいて軽い足取りで観客席から消えていった。ショリカたちはその大きな背中を熱い眼差しで見送る。

「魔王……。必ず戻つてきてよ……」

ショリカは微かに口を開けて弱々しくつぶやいた。それはすぐに柔らかな陽射しの中に溶けていく。それはちょうど、冷たい冬の氷が春の陽光に溶けていくようであつた。

麗らかに広がる水晶の空のもと、いよいよ波乱の本選が幕を開けようとしていた……。

第三十六話 挿った選手と第一試合

第三十六話 挿った選手と第一試合

晴れ渡つた青いストレートの空の下、闘技場では昼休憩が終わりいよいよ闘神祭の本選が始まるとしていた。観客たちはすでにさきほどの衝撃からは立ち直り、落ち着かない様子で司会の男や選手たちが現れるのを待っている。あちらこちらで選手を応援する旗や横断幕が今か今かと出番を待つていた。

観客たちは賭け事をしている者もいるようで、時折どの選手が勝つだの負けるだのといった声が風に流れてくる。まわりの観客たちはそれに顔を歪めながらも、内心ではその予想に聞き耳を立てていたりした。

じつして観客たちがそわそわと落ち着かない雰囲気でいる、ついに司会の男と選手たちが控え室から姿を現した。彼らは舞台に次々と登つていき、続いて司会の男が闘技場全体に『届く声で叫ぶ。

「お待たせしましたア！　ただいまより闘神祭本選を開始いたします！」

「わあああーー！」

「それではまず、二二二まで勝ち残った八人の選手の紹介をさせていただきます！　皆さまから見て一番左がカルマーセ選手！」

司会は彼の右手に居並ぶ選手たちのうち、一番右側にいたカルマーセを示した。彼は回復魔法でもかけてもらつたのかすっかり元の

一枚目半な顔に戻つてゐる。司会の手が向けられると、彼は白い歯を光らせて気障つたらしく笑つた。その微妙なかつこいいと言えなくはない笑顔に司会は苦笑する。そして次の選手の紹介をするべく彼は正面に向き直つた。

「続きましては魔王選手！」

司会の男に呼ばれると、魔王は口を歪めて不敵に笑つた。いかにも魔王らしい、底の見えない笑いである。シェリカたちはその笑みに応じるかのように声を張り上げた。顔を紅くしながら、手を口に当てて叫ぶ。広い闘技場にも若い女性特有の高い澄んだ声は良く通つた。

シェリカたちがそうして必死に応援しているうちに、司会は次の選手の紹介に移つた。さきほどルーミスと話していた黒いロングコートの男だ。

「三人目はクレイル選手！」

「ハツハツハア！」

クレイルは呼ばれると同時に血も凍るような高笑いを上げた。彼は身体を大きく揺すり、壊れたかのように笑う。その恐ろしいまでの異様な迫力に、司会の男は冷や汗を流して歯をカタカタと鳴らした。だがここで選手の紹介を中断するわけにはいかない。なので司会は震えながらも次の選手の紹介にうつる。

「よつ、四人目はフウタロウ選手です！……おや？」

司会が示した先には誰もいなかつた。司会はさきほどまではいた

はずだと首を捻る。彼は消えたフウタロウを探して彼が立っていたはずの場所まで移動した。すると……。

「あっ、あれ？ デコから現れました？」

そこには黒装束の瘦せぎすな男が何事もなかつたように立つていた。彼は紛れもなくいなくなつていたはずのフウタロウである。司会の男は思わず目を疑つて、何度もまぶたを擦つた。それを見たフウタロウは消えるような渋い声で司会の男に言つ。

「……気配を消しておつた。それゆえ汝には我を感知できなかつたのだ……」

「はあ……。今度からは消さないで下さこよ。心臓に悪いですから

「……善処する」

フウタロウはそう小声でつぶやくと、細い目を閉じてしまった。そのまま腕を組んだ彼は何事かをぶつぶつとつぶやき始める。そのある種の怪しげな雰囲気に司会の男はあとずさり、またもといた舞台の中央へと戻つていった。

「……ふう、やれやれ。え~続きましては五人目、コウラン選手です！」

中央に戻つた司会は一息つくと、五人目の選手を紹介した。その伸ばされた手の先には紅い東方風のドレスを着た女が立つている。大胆に豊満な胸元を露出したその女は、紅い口紅を初めとするきめの化粧をしていた。さらにその手には大きな扇が握られている。

そんな一見しただけでは踊り子のようにしか見えない女、コウランは司会に呼ばれるとなんと観客席に向かって投げキッスをした。そのなんともなまめかしい行動に観客席の男がざよめく。あるものは興奮に満ちた視線を送り、あるものは鼻の下を伸ばし。甘い空気が闘技場にあふれた。

しかしそんな雰囲気の中でも、カルマーセ以外の男性選手はコウランに警戒しているかのような鋭い目を向けていた。踊り子のような格好をしていても彼女は警戒するに値する達人なのだ。

「ふにゃふにゃ……はつ！ つつ、次は六人目ルーミス選手です！」

一瞬だが色気でぼけた司会は不意に我を取り戻すと、慌ててルーミスを紹介した。するとルーミスは白い仮面に覆われた顔をくいつと司会に向ける。表情こそわからないが、どうやら彼女は自分の紹介がおざなりになつたことを怒つてているようだつた。

司会は陽光に笑う不気味な仮面にまたもや冷や汗をかいだ。生温い汗が背中を伝つてぼたりと滴り落ちる。だがすでに彼の精神は鍛えられたのであらう。冷や汗はすぐに収まつて彼はまた選手紹介へと戻つた。

「続きまして七人目はバリウル選手です！」

バリウルと呼ばれた男はいかにもひ弱な文系青年といった男だった。学者が好むようなマントと丸い眼鏡を着用していることがそのような印象を与えるのだ。しかも彼は手に百科辞典のような分厚い本を抱えていた。

明らかに戦闘には向いてなさそうな人種ではあるが、彼は確かに

本線出場選手だ。故に観客たちは何があるのだろうと期待と不安の混じった目を彼に向ける。しかし彼はそれにたいしてただ柔らかく微笑むだけだった。

司会の男は闘技場に残された雰囲気が落ち着くのを確認すると、最後の選手の紹介をした。もちろん黒いサマードレスを着た女、アイリスである。

「いよいよ最後となりました。八人目はアイリス選手！」

彼女に紹介の手が向けられると、観客席は水を打つたように静まり返った。さきほどの衝撃が抜け切っていないのか、観客たちはアイリスを見つめて戦慄に顔を凍らせる。闘技場は冬の凍てつく朝のような静けさに包まれた。さきほどまでの騒々しさは毛布にでも包まれたようになりをひそめている。

司会の男は深刻な顔をしている観客たちを一瞥すると、大きく息を吸い込んだ。そして十分に肺を膨らませたら、その貯まつた空気を一気に叫びに変える。観客席の重苦しい空気を一変させるような声が、舞台から放たれた。

「それではいよいよ闘神祭本選、第一試合を初めます！ 第一試合はカルマーセ選手対魔王選手です！」

司会は拳を振り上げて思い切り叫ぶと、舞台から降りて行つた。それに魔王たち以外の六人の選手も続く。舞台にはカルマーセと魔王だけが残され、緊張が張り詰めた。見えない殺気がぶつかり合つて緊張の糸が互いに絡まり合つようだ。

その緊張にあふれる舞台を風が吹き抜けた。涼やかな風は男にし

ては長めのカルマーセの金髪を吹き上げる。髪を風になびかせたカルマーセは口をわずかに歪めたあとでゆっくりと開いた。

「僕は疾風とも呼ばれる騎士さ。仲間ついでにはこの迷宮都市最速なんて言われたりもする。今からそのスピード、とくと楽しませて上げるよ！」

こうしてついに、カルマーセと魔王の直接対決の火蓋が切って落とされたのだった。

第三十七話 必殺！ 残影剣

第三十七話 必殺！ 残影剣

「ふふつ……。行くよ！」

カルマーセが歯を光らせて笑うと、その姿が霞んだ。まるで砂漠に揺れる蜃気楼のようにカルマーセの姿が消えうせる。それと同時に魔王は神業的な速さで杖を振り上げた。

鋼をぶつけたような荒々しく激しい音が闘技場に響いた。魔王の杖から紅い火花が散り、白銀の刃とカルマーセの姿がわずかに霞む。だがそれも一瞬、彼の姿はすぐにまた虚空に溶けた。

そこから人間の感覚を超えた戦いが続いた。常人の目には影しか見えないほどの速さで動くカルマーセと、それを杖一本で捌く魔王。その戦いは観客を初めとする周りの目には、まるで魔王が杖で空を激しく叩いているようにも見えた。カルマーセはほとんど彼らの目には見えない領域で魔王に攻撃しているのだ。

「カルマーセ選手、信じられないほどのスピードです！　これは魔王選手、スピードに手も足もないといった状況でしょうか。ミスターXさん、どう思われますか！」

司会は椅子から立ち上がり叫ぶと、となりのミスターXに勢い良くマイクを差し出した。それをまたミスターXは引ったくるようにして自らの口に寄せる。そしてもつともらしく咳ばらいをしてから話をした。

「いや、押されてるのはカルマーセの方じゃな。よく魔王選手を見てみい」

「へつ？」

司会の男は額に手を当てて、舞台の上に目を凝らした。しかし視界に写るのは姿すら霞むほどスピーデのカルマーセに、一方的に攻撃されているようにしか見えない魔王だけだった。それゆえ彼はミスターXの真意をはかりかね、疑わしげな目を何度も向ける。しかし一方で、ミスターXの言葉の意味を瞬時に理解した者もいた。

「なるほど……。そういうことか」

サクラは魔王の様子を見て、納得したように手をほんと叩いた。どうやらミスターXの言葉の意味がわかつたようである。彼女はフムフムと頷くと感心したような顔になった。すると隣に座っていたショリカやエルマが身を乗り出してサクラに迫ってきた。

ちなみにこの時、シアはいなかつた。試合前に倍率表と書かれた板を抱えてどこかに出かけていたのだ。……一応、シアの職業は神に仕える神官である。

「何がわかつたんや、サクラはん？」

「そつよ、一人だけ納得してないで私たちにも教えてよ」

「魔王の足元を見てみるんだ。そうすればショリカやエルマにもすぐ分かる」

「足元……？ どれどれ」

ショリカたちは魔王の足元を注意深く見た。一人ともシーカーとしての優秀な視力を遺憾無く發揮して、魔王の足元を見つめる。二人の目はさながら望遠鏡のように、魔王の足元にある小さな埃の存在すら彼女たちに伝えた。そうして魔王の足元を見ていると、二人はすぐにあることに気がついた。

「砂が積もってる……？」

どこからか風で飛ばされてきたのだろう。魔王の足元には結構な量の砂があった。それがうつすらと、白い舞台に浮かぶ島のように魔王の周りに積もっている。その島には魔王がつけたと思われる足跡がいくつかあった。

しかし島にはそれ以外のどんな足跡も残つておらず、ずいぶん綺麗に整つていた。魔王が動いたならば搔き消されてしまうであろう、風の波紋などまでくつきりと残つている。

「はは～ん、さすが魔王はん。押されっぱなしに見えるけど実際に遊んでるんやな。あの場所から一歩も動いてへんもの。砂でわかつたで」

「ああ、その通りだ。……見てみる、魔王は余裕だがカルマーセはもう息切れしてきたぞ」

サクラは前の手すりに身体を預けて、前のめりの姿勢で舞台を指差した。ショリカとサクラもすぐに身を乗り出して確認をする。すると舞台の上にはさつきまでよりかなり動きが遅くなつたカルマーセがいた。

「ゼエ……はあ……やるじゃないか……。！」今まで僕の攻撃を受けたことはね。パパン以外では君が初めてだよ……」

カルマーセは真っ赤な顔をして息も絶え絶えで魔王にいった。その足はふらふらと震えていてかなり苦しそうである。剣もすでに下ろされて、軽く叩かれただけで倒れてしまいそうな様子だ。しかし、魔王はそんなカルマーセの様子などお構いなく、かなりきつい言葉を彼に告げた。

「それなりに速かつたが一発一発が軽かつたからな。あれなら杖でいちいち受けずとも単純に耐えることだつてできた」

「なんだとオ……！」

カルマーセの顔がにわかに青く染まつた。だがそれも一瞬ですぐさま赤みを帯びていく。顔はあつという間に灼熱のマグマのように熱く赤くなり、頭から湯気が出た。その全身はかくかくと細かく震えて鎧がかちかち音を立てる。

そうして燃え立つ炎のように怒りに染まつたカルマーセは、いきなり大声で笑い出すと魔王を睨みつけた。

「ふふふ、いいだろ？！君は僕を怒らせた。その事実がどんなことか、君に今から教えてあげよ？！」

「……三流魔族に良くこんな連中がいたな」

「さつ、三流！魔族といふのは知らないが僕が三流！きつ、貴様ア！絶対に許さア～ん！」

カルマーセは渾身の叫びとともに、再び姿が消えるような速さで動き出した。怒りが疲れを忘れさせているらしい。それにたいして魔王もまた瞬時に杖を構えるものの、剣がそれにぶつかることはなかつた。

魔王の目には、だんだんと速度を増しながら彼の周りを回つているカルマーセが見えた。その一見すると無駄にしか見えない行動に魔王は首を傾げる。

魔王が首を傾げていると、カルマーセの速度はいよいよ最高点に到達した。つむじ風が起きて、魔王の髪を吹き上げていく。魔王はその髪を抑えるとさらに疑問を深めた。カルマーセの真意を彼はまだ掴みかねていたのである。

だがここで奇妙な現象が起きた。無数に見えたカルマーセの残像が、次々と重なつていくのだ。ひとつひとつと重なつていく残像は、重なる度にはつきりとしていき、やがて本物のカルマーセと区別がつかなくなつていく。そしてその残像が四つにまで減った時には、魔王の目にもカルマーセが四人いるようにしか見えなくなつていた。

「ははは、どうだい？ 僕の必殺技『残影剣』は、僕が四人いるようには見えないだろ。本物がわからないから君にも手だしはできないよ！ ハヽハツハツハ！」

四人になつたカルマーセによる、いつもの四倍は寒い高笑いが闇技場に響き渡つた……。

第三十八話 カルマーセの脅威

第三十八話 カルマーセの脅威

風が吹き抜ける舞台の上で、魔王は四人に分身したカルマーセに睨まれていた。カルマーセたちは分身ゆえかすべて同じように下卑な笑みを浮かべて魔王を見下しているようだ。絶対の自信と余裕が、彼にこのような表情をさせているのだろう。

「ブッ……」

魔王はそんなカルマーセたちにふつと息を吹き出した。彼は口を手で抑えて笑いを堪えられないようだ。そのままピエロでも見るようカルマーセを見ている。

カルマーセはその態度に眉を吊り上げた。彼は肩を怒らせて、炎の燃えるような目で魔王を睨みつける。そして、身体を震わせながら声を絞り出した。

「何がおかしい……。不愉快だ、さつさと行くぞ！」

「四人に増えたからな、どれ少しあは相手してやる！」

魔王とカルマーセは互いに地を蹴り、加速した。四人に増えたカルマーセと魔王の身体が交錯する。刹那のうちにぶつかりあつた四つの刃と杖は、激しい音を巻き起こした。大気が揺さぶられて五人の足元が軋みを上げる。

「四人分の力がかかるつているな。影にも実体があるのか……？ ま

あ良い、ふんっ！」

魔王が唸ると、彼の杖がカルマーセの剣を弾き返した。魔王はその勢いでもつてカルマーセたちの腹に重い一撃を加える。風を切つた杖は、唸りを上げながらカルマーセたちの鎧をないだ。

魔王の一撃を受けた二人のカルマーセ。その鎧の胴は、霞みのごとく消えうせた。杖はわずかに霞みのようなものを切つただけである。その手から伝わる軽い感触に、魔王はわずかに眉をひそめた。

「実体があるようでないか。なかなか面白い」

魔王が口元を歪めて笑つてはいるが、カルマーセたちは隙のできた彼に一斉攻撃を仕掛けってきた。魔王はそれらをすべて交わすと、カルマーセたちに再び杖を放つ。だがその杖はまたも宙を切り、カルマーセにダメージを与えることはなかつた。

「どうだい、僕の残影剣は。この影たちはそれぞれ実体がありながらも、攻撃でダメージを受けることは無いんだ。それに君にはどれが本体だかわからぬ。つまり、僕は君に一方的に攻撃できるとうことさ！」

カルマーセたちは魔王を取り囲むと、高らかな勝利宣言をした。その人差し指は魔王の顔をまっすぐに示しては、背中は反り返つてはいる。まさに強者の態度の見本とでも言ひべき態度だ。

カルマーセの宣言に闘技場は震撼した。一方的に攻撃を加えられる上に、自分は攻撃を受けない。カルマーセの言葉が本当ならば恐るべき脅威である。観客や司会、さらに他の選手にいたるまでがにわかに騒ぎ出した。

「なかなか楽しい特技を持つてるのですよ。一応、敵として認識してあげるのです」

「あの男、口先だけかと思つたらやるじやない」

「影分身で『ざわらつか』……。いや、それとは別か……」

舞台の脇で試合を見ていたルーミス、コウラン、フウタロウの三人は口々に残影剣の批評をはじめた。かなり驚いている様子である。だがその顔に驚きはあっても恐れはない。三人にとつては大した脅威ではないのだろう。

その一方で、観客席のシェリカたちは気が気でなかつた。彼女たち三人は額から冷や汗を垂らして、互いに顔を見合わせる。その目にはわずかな不安があつた。

「あんな技、反則やで！ 魔王はんでも厳しいんとちやうか？」

「そうかも……。でもまだ魔王は魔法を使つてないわ。魔法を使えばカルマーセなんて四人まとめて……」

「いや、あの速さでの戦いだ。魔法を使つている間に攻撃されてしまうぞ！」

「確かに……！」

サクラのもつともな話に、シェリカたちの顔が一気に暗くなつた。彼女たちはわずかにうなだれながらするよつた眼差しで魔王を見る。その時そんな鬱な彼女たちの後ろから、鈴の音のような透き通

つた声がかかった。

「ずいぶん不景氣そうね。大丈夫?」

「シアー!」

シアは魔王の状況が良くないのに、ほこほことした気分の良さそうな顔をして席に着いた。その手には倍率と書かれた板と膨れたひよこの財布がある。賭けの胴元でもやって、かなり金を集めてきたようだった。

シェリカたちはシアのそんな態度に目を見張った。シアが金を儲けてにやけているのはいつものことではあるが、時と場合がある。今はあまりに場違いだった。そこで、シェリカはサクラやエルマに目配せすると三人を代表してシアに注意する。

「ちょっとシア、魔王が苦戦してるのよ。あんたもちょっとは深刻な顔をしなさいよ」

「魔王が苦戦……？　どこがなの？」

「どこがって……」

シアの呑気な様子にシェリカは頭を抱えた。彼女の額には深いしわが刻まれてその苛立ちを鮮明に表す。しかし、シアはシェリカの気持ちなどお構いなく自分の意見を述べはじめた。

「三人とも魔王がカルマーセー」ときに負けると本気で思つてるの？
だとしたら三人は魔王を信用していしないのね」

「信用していないってそういうわけじゃ……」

「魔王が勝つと信じてるならば、どんな状況でも優しく明るい顔で見守るものよ。それに魔王を見て、彼は笑ってるわ」

「えつ？」

ショリカたちは前の手すりに張り付き、舞台の上の魔王に注目した。するとその顔は確かに笑っている。いつものあの余裕たっぷりの底知れぬ笑いだ。

その笑いを見たサクラは少し複雑な顔をした。そして彼女は隣のシェリカに向かって語りかける。

「ほんとだな……。ということは魔王にはこの状況を開拓する策があるのか。私にはまったく思いつかないが……」

「そうみたいね。私もさっぱりだけど……」

ショリカもお手上げといったよつと手の平を上に上げた。その様子に、サクラは首を捻る。シアやエルマもまた同様で、魔王が何を考えているのかわからないようだった。

一体何を考えているのか。それを明かさぬまま、魔王はただ不敵に笑うのであった……。

第三十九話 勝利の鍵は……

第三十九話 勝利の鍵は……

「カルマーセ選手、衝撃的な宣言です！ これは魔王選手、大ピンチなのでしょうかアアア！」

司会の男は観客席から声を張り上げた。彼の額からは汗が吹き出して、手に汗握っている。その彼が紅い顔をして試合の状況を伝えるたびに、観客はどよめきに包まれていく。大声を上げる者から立ち上がる者まで、数万の群衆に埋められた観客席は揺れに揺れた。

その一方で舞台の上は気味悪いほどの静けさに包まれていた。大気は凪いだ海のように一切の揺らぎもなく、地面も動かない。魔王とカルマーセは互いに笑い、牽制を続けていた。

「ほら、攻撃してきてござんよ。怖いのかい？」

「良いだろ？ だがその前に……」

魔王は杖を高く掲げた。黒紫色の杖はつややかに陽光を反射して煌めく。その光にカルマーセは目を細めた。

「魔法を使うのかい？ 呪文を唱える間に倒しちゃうよ！」

「黙つて見ている。早い男は嫌われるぞ！」

魔王は腕に全身の力を込めて杖を振り下ろした。杖は舞台を穿ち、地震のように揺れ動く。地が裂けるような轟音とともに砂埃が舞い

上がり、石畳が次々と持ち上がりていった。重い石が木の葉のように飛んでいき、地面が現れていく。カルマーセは揺れる舞台の上に膝をつき、険しい顔をしたまま動けなかつた。

二人のいる舞台の上は、たちまち膨大な砂埃に包まれた。火山の噴煙のように濃密な砂埃は、魔王とカルマーセの姿を覆い隠してしまつ。砂埃はしばらくの間、舞台の上をすっかり隠していた。

風が吹き抜けた。砂埃は残らず搔き消されて、舞台の上の様子があらわになる。その時、舞台は一変していた。石畳が剥がれてその下にあつた地面が晒されている。ちょうど円形をした白いさらさらとした砂地が晒されていた。

その地面に膝をついていた四人のカルマーセたちは、その円の中にいる魔王を忌ま忌ましげな目で睨みつけていた。彼らは剣の鞘を杖がわりに立ち上がると、魔王に向かつて同じことを寸分違わぬタイミングで吐き捨てる。

「何をするんだ！ 僕に勝てないからつてハつ当たりかい！」

「そうではない。まあ、戦つてみればわかるだろ？」

「ふつ、それもそうだな！」

再び杖と剣の激突が始まった。カルマーセたちは次々と入れ代わり立ち代わり魔王に突撃していく。本体が誰であるのか悟られぬよう、素早く位置を交代しながら魔王へと果敢に挑む彼らは実に統制が取れていた。姿が伸びて見えるほどの速さであるにも関わらず、彼らはぶつかることなくそれでいて絶え間無い攻撃を魔王へと繰り出していく。

幾重にも重なる白銀の煌めきが、魔王の身体を目掛けて放たれていく。曲線を描き出す剣は、刹那の間に雲から差し込むよう陽光のようになつて魔王の杖とぶつかりあつた。剣と杖は弾き弾かれ、原始の打楽器よろしく激しい音をうち鳴らす。光が弾けて大気が揺れ、闘技場の観客たちは息を呑んだ。

魔王とカルマーセたちは一進一退の攻防を続けた。いや、四人の攻撃を捌きながらも隙をついては攻撃を決める魔王の方が、実は優勢だったのかもしれない。しかし魔王が攻撃したカルマーセたちはいずれも分身で、攻撃されても一瞬にして元に戻つてしまつた。そのためカルマーセたちは本体をうまく匿いながらも、圧倒的な実力の魔王にたいして互角以上に戦つていた。

「手も足もでないじゃないか。このままじゃ負けるのはもつすぐだね！」

「それはどうだううな？」

魔王はシンクロしているように同じことを言ったカルマーセに余裕の笑みを浮かべた。カルマーセはそれがカンに障つたらしく、顔を紅く染め上げてさらに激しい攻撃の嵐を決めていく。

手数が多いというのは圧倒的なまでのアドバンテージである。レベルならばカルマーセは魔王の五分の一もないが、それを四人に増えることで彼は見事に補つた。彼らはわずかづつではあるが魔王を圧倒し始める。もつとも、魔王は終始余裕の表情をしていたので精神的にはカルマーセの方が追い詰められていたのかもしれないが。

じつしてカルマーセは魔王を舞台の方にまで追い詰めてきた。

魔王はここにきて、ようやく魔法を使ってカルマーセを吹き飛ばしてしまおうかと考え始める。呪文を唱えながらでも魔王ならばカルマーセの攻撃くらい、余裕で捌くことができるのだ。つまり、魔法を使うと決断すれば確実に魔王は勝てる。しかしそれでは原始的で面白味にかけるのでそのやり方を魔王は避けていたのだ。

そうして魔王が恼み出した時、ようやく彼の策が身を結んできた。彼はにやりと、こつもの不適な笑いをカルマーセに向ける。

「お前が本体のようだな」

「なつ、馬鹿な！」

魔王は一人のカルマーセに向かつて杖を突き付けた。杖を突き付けられたカルマーセは驚きで目を見開き、よたよたと後ずさつしていく。

だが魔王から少し距離を取つた彼は、自身の分身を呼び寄せるとまた目にも止まらぬ速さで場所の入れ換えを始めた。分身と本体が入り乱れて、すぐにまた本体がどこへ行つたのかわからなくなってしまう。とても、目で追いかけられる速さではなかつた。

「どうだ、わからないだろう。偶然見つかった時の備えも万全なのさ。よほど慣れていなければ、超人的な動態視力の君でも本物の僕がどこにいるのかはわからないはずだよ！」

「こいつだな」

魔王は自分から見て左の奥にいたカルマーセを何のためらいもなく杖で指した。カルマーセは今度こそ本気で狼狽し、顔を青くする。

四人同時に頭を抱えた彼は、化け物でも見るような絶望的な顔で魔王を見つめた。そして認めたくないとばかりに魂からの雄叫びを轟かせる。

「馬鹿な！ どうしてわかる、わかるんだア！」

「簡単なことだ。今のお前には田印がついているからな」

「田印だと！」

「そうだ、足元を良く見てみる」

カルマーセは魔王に促されるまま自分の足を見下ろした。すると特別に何も起きていない自分の足がある。膝の当たりまで砂にまみれて汚れてはいるが、田印となるような物は見当たらなかつた。

「田印なんてないじゃないか！」

「わからぬのか。ならば分身の足も見てみるのだな

「田印は分身の方にあるのかい？ どれ、見てみようか……」

カルマーセは隣に立っていた分身の足を覗き込んだ。彼の目にはさきほどまでとほとんど変わらない足が映し出される。しかし、カルマーセにはそのわずかな違いに気がついた。

「……そつかー！」

本物のカルマーセと分身の間にあつた違い、それは足の汚れだつた。本物のカルマーセが膝ぐらいまで砂や土で汚れているのにたい

して、分身の方はまったく汚れていないのだ。分身のカルマーセは魔王に攻撃を受けるたびに実体を消すため、汚れがたまらず下に落ちてしまったのだろう

それに気づいた瞬間、カルマーセの頭の中で一つの謎が解けた。魔王がさきほど行った不可解な行動、それは恐らく自分の身体を汚すためだったのだろうとわかったのだ。石畳より下が地面の方が数段足元が汚れるのだ。

カルマーセの顔は深い絶望に包まれた。海の底に沈んでいくような先の見えない感覚によつて、彼の心は埋められていく。泥のように黒くて粘着質な絶望感が彼に纏わり付いた。分身はすぐに消えてなくなつて、彼は絶海に漂流する船の孤独や絶望を理解するまでに至る。

魔王は膝をついて魂が抜けたようになつているカルマーセ元に歩み寄つた。そしてその首筋に杖を突き立てて冷ややかに宣言する。

「余の勝ちだな？」

「ああ……そうだな」

カルマーセは力なく剣を手放した。剣は地面に横になり、寂しい光を放つ。それは敗者となつたカルマーセの悲哀を表しているようだつた。

こうして魔王は意外にも粘つたカルマーセを倒し、一回戦へと駒を進めたのであつた……。

第四十話 憑かれた女

第四十話 憑かれた女

「決まったアア！ 一回戦第一試合は魔王選手の勝利です！ 皆さま、どうか魔王選手に拍手を…」

司会の男はその場で立ち上ると、マイクを振り上げて叫んだ。それに応じて観客たちも一斉に立ち上がり魔王に盛大な拍手が送られる。数万の観客たちは総立ちとなり、地鳴りのような拍手が響いた。それにはときおり歓声も混じり、魔王に暖かい応援の数々が捧げられている。

ショリカたちも例外ではもちろんなく、魔王に向かつて声の限りに叫んでいた。普段はあまりしゃべらないシアまでもが声を張り上げている。四人は身を乗り出しながら、魔王に手を振つて必死にアピールしていた。

魔王はショリカたちに気づくと、手を挙げて笑つた。いつもの得体の知れない笑いではなくどこか温かみのある笑みだ。彼はそうしてショリカたちの声援に応えると、舞台からさつと下りていく。そして闘技場の端にくると、彼は観客席との間にある高い壁にけだるい様子でもたれたのだった。

「え、ただいまから舞台の復旧作業を始めますので第一試合は二十分後からとします。繰り返します……」

司会の男がそう連絡すると、通用口から次々と作業員が現れた。彼らは手際よく瓦礫の除去などを進めていく。魔王はその様子を壁

にもたれてぼんやりと眺めていた。昼下がりの太陽に照りされた、細くなつた目はいかにも眠そつた。

するとそんな魔王にビームからか現れたアイリスが近づいてきた。彼女は長い金髪を揺らしながら、そつと魔王の傍に立つ。魔王は横を向いて彼女の整つた顔を見ると、怪訝な顔をした。

「何だ？」

「時間がありますから、少しお話でもと思つまして。私と話すのは嫌ですか？」

「いや、そんなことはない。余も暇をしていたところだ」

魔王は苦笑すると、アイリスの方に改めて向き直つた。アイリスは自らの方を向いた魔王の顔を軽く見つめると、冷え冷えとした笑いを浮かべる。そして彼女はからかうような口調で話をはじめた。

「あなた、さきほどの戦いでずいぶんと手間取つてましたけど……。私にはわかりましたわよ？ あなたはまだほとんど力を出していい」

「ああ、そうだ。一割と少しどこつたところか」

「やつぱりそうですね。でもどうして？ わざわざ引かせるしないでしょ？」

「あの男の技が面白かつたからな、興がのつた」

アイリスは一瞬、目を細めた。わずかにだがその身体から殺気が

にじむ。だがすぐに彼女は気を取り直すと、魔王にゆつたりとした口調で語りかけた。

「私はああいう技は嫌いですわ。弱さを『まかすためにしか思えない』

「ほひ、といふことはそなたは弱いことは嫌いか？」

「ええ、罪だと思つてます」

きつぱりとアイリスは断言した。そこに一切の躊躇いや思考はなく、その考えが身体全体に染み渡つてゐるよつだつた。魔王はその毅然としたアイリスの顔を見ると、不意に目を逸らして上を向く。眩しい陽射しに目を細めているその顔は、遠い過去に思いを馳せているようだつた。

「……余もこうこう考へだつた。だがある時から何を持つて強いのか、何をもつて弱いのかがわからなくなつてしまつてな。だから今は何でも受け入れている」

「へえ、なら今はざいぶんと寛容ですね。何でも受け入れるその寛容さが混沌に合つているのかも知れませんわ」

「……余が混沌に属すると知つていたのか？」

魔王は眉を吊り上げた。その目は鋭くなり、射るような眼差しがアイリスに向けられる。魔王の周囲は殺氣立ち、底冷えのするような雰囲気となる。

アイリスはそんな魔王の殺氣をものともしなかつた。彼女は至極

優雅な立ち振る舞いで、懐から手の平より少し大きい程度の袋を取り出す。彼女はそれを顔の前に掲げると、なにかに憑かれたような光の無い目をして言った。

「この袋の中には私がユリアス様より預かつた至宝がおさめられております。それが私に教えてくれるのですわ。あなたが混沌の加護を受けていると」

「物の意思が分かるのか？」

「もちろん。今、この至宝の意思と私の意思は同調しておりますわ。だからあらゆることがわかるんですよ」

「悪いことは言わぬ、そのような物はユリアスに返すが良からず。そなた、憑かれてあるぞ」

魔王は袋の中から背筋をそばだたせるような気配を感じていた。聖なる物のようだが深遠の闇を感じさせる気配。強烈な光に射す陰のようなそれは、魔王をしても奇妙で気味が悪かった。アイリスが手にしている物の正体はわからないが、ろくな物ではないことだけは魔王にもはつきりとわかつた。

アイリスはそんな魔王からの忠告を聞くと、何故か笑いはじめた。けたけたと笑うその様子はどこか魂が抜けてしまつているようで、そこに彼女の意思を感じることはできない。もはや完全に、なにかの意識に乗っ取られているようであつた。

「あははっ、返せですって？ これは素晴らしい力を貰えてくれるんですのよー たとえユリアス様が返せと言つても、もう手放しませんわ！」

「ふむ、ますます精神を犯されているな。急いで返さねば取り返しがつかなくなるぞ。それで良いのか？」

「しつこいですわね、殺しますわよ？ 最近の私は少しばかり凶暴です。さきほども予選の選手をみなごろしにしたおかげで、少し落ち着いていたのですから！」

アイリスは傘を手にすると、魔王の首筋に突き付けた。光なき目をして殺氣を放つその姿からは、すでにやつきまでの余裕は失われている。彼女は今にも、魔王の首を傘で刺しそうであった。

魔王はアイリスからすっと身を引き、距離を取った。もはや手遅れだと悟ったのだ。彼は疲れたような顔になると、アイリスに告げる。

「どうやら遅かったようだな。もはや戦うしかないらしい」

「もとからそうではありませんか？ まあでも、もし私が恐いのならば棄権して下さっても構いませんわ。もつとも、あなたが混沌の加護を受けている限りそのうち殺しますけどね……」

アイリスはそう言い残すと、どこへともなく去って行った。その後ろ姿を、魔王は眉間にしわを寄せて見送る。ちょうどその時、舞台の整備が終わり第一試合が始まったのだった……。

第四十一話 修羅と忍び

第四十一話 修羅と忍び

「お待たせしましたア！　ただいまより第一試合を開始させていた
だきます！　第一試合はクレイル選手対フウタロウ選手です！」

司会の男が、修繕の終わった舞台の上で絶叫した。それと同時に
舞台の両端からクレイルとフウタロウが舞台の上へとあがる。試合
の開始を待たされていた観客たちはにわかに色めき立ち、闘技場に
活気が満ちあふれた。あちらこちらから応援の声が上がり、旗や横
断幕が翻る。

魔王はそんな熱狂渦まく闘技場の通路を素早く走り抜けていった。
階段を駆け登り、通路にはみ出した観客たちを搔き分けながら全速
力で闘技場を走り抜ける。そしてどうにか、選手の一人が動き出す
前にシェリカたちの元にたどり着いた。

「あつ、魔王！　どうしたのよ」

「シェリカに一つ聞きたい」ことができてな。ただ、遅くなつたから
試合を見てからにしようつ

「そつこつこと。じゃあみんな、場所をちよつと空けるわよ」

シリカが促すと四人は少しずつ場所を詰めて、魔王が座る場所
を確保した。もとからゆとりを持つて長椅子に座つていたので一人
分くらいはなんとかなつたのだ。魔王はそうして長椅子の通路側に
空けられたスペースに細い身体を押し込む。

「ちよつときついけど大丈夫ね。あつ、いよいよ始まるわ」

ショリカは声を上げて舞台を指差した。それはちよつび、同会の男が舞台から下りていくタイミングのことであった。いよいよ舞台には選手の一人だけが残されて、緊張が高まっていく。一触即発、今にも激しいぶつかり合いが始まリそうであった。観客たちも高まる緊張に息を呑み、闘技場が一瞬だけ静かになる。

「はつはははア！ わて、まずは貴様を蜂の巣にしてやるつか！」

「……笑止」

クレイルはコートの中から大型の魔銃を取り出した。彼は一抱えほどもあるそれを正面に構えると、神業のごとき速さで引き金を引いた。軽快な発砲音が続け様に重なりながら響き渡り、黒い銃口が絶えることなく白い光を放つ。

無数の魔弾が筋を描き出しながらフウタロウに迫った。さながら雷のようなそれらは、刹那のうちに接近してフウタロウの身体を穿とうとする。しかしその瞬間、その身体が遙か上空へと舞い上がった。

「陰影流・刃雨」

フウタロウの手から無数の手裏剣が放たれた。黒雲のようなそれらは重力に従い、舞台めがけてまっすぐに降り注ぐ。濃密な密度をほこる手裏剣の群れは、激しい雷雨のような音とともにクレイルの頭上近くへと至る。

「かアつー

「……何?」

クレイルは「トーークから何かを取り出して上に放り投げた。直後、黒い橢円形をしたそれは手裏剣とぶつかり爆風を巻き起こす。嵐を倍にしたような風が舞台上空を吹き荒れて、手裏剣の雲はあとかたもなく消し飛ばされる。

手裏剣は散り散りになつて闘技場に降り注いだ。観客たちは巻き添えを食つまいと椅子の下に隠れたり、頭を何かで隠したりする。観客席はある種の恐慌状態に陥つた。観客たちの怒号や悲鳴がこだまして状況すらもよくわからなくなつていて。それはシェリカたちも例外ではなく巻き込んでいた。

「サクラならきっと大丈夫!」

「うわああー 私を盾にするなあー!」

「シアはん何をやつとるんやー 椅子の下に避難するでー!」

エルマが逃げ遅れたシアとサクラを強引に椅子の下へと引っ張り込んだ。二人はもつれたり、椅子に肩をぶつけたりしながらも何か避難に成功する。一人はぶつけた場所をさすりながらほっと息をついた。

「よしこれで大丈夫……。あれ、魔王はどうしたのだ?」

「さうね、姿が見えないわ

「ああ、魔王なら大丈夫だとか言ってそのまま座ってるわ」

シェリカは自分の脇に垂れているマントの端を掴んだ。それを見たサクラたちは尊敬したような呆れたような、何とも表現しがたい顔をする。いくら大丈夫だとは言え、刃物の降り注ぐ中で座つているのは少し呑気過ぎるよう彼女たちには思えた。

一方の魔王はそんなシェリカたちの考え方をよそに試合を集中していた。彼の目はクレイルやフウタロウの動きを追つて、右へ左へと視線を走らせている。観客たちが大騒ぎをしていようが、それに關係なく試合は進んでいるのだ。

「もうつたア！ バインドハーンド！」

クレイルは身体を弓なりに反らせて右腕を大きく振りかぶつた。その次の瞬間彼の腕は唸りを上げて振り下ろされ、その手の部分が弾丸のように飛び出していく。

飛び出した右手は繋がれている鎖を鋼の蛇のように揺らしながら、宙を飛んだ。カシャカシャと耳障りな金属音を鳴らしてその鋼の魔の手は、バランスを崩して動けぬフウタロウのもとへと向かっていく。

「くつ……！」

フウタロウは身体を無理矢理にねじ曲げた。上半身が下半身に対してありえない角度で曲がって、どうにかクレイルの手の軌道からはずれる。だがやはり身体にかかる負担は大きかったのか、その口からは苦悶の声が漏れて曲線を描いていた眉は真一文字になってしまつた。

しかしその甲斐あつてクレイルの手はフウタロウの身体を捕らえることはなかった。手はフウタロウの身体のあつた場所をすり抜け、虚空を掴む。それを見たクレイルは、観客にも聞こえるような大きさの舌打ちをした。彼はそのまま鎖を巻き戻して手を元に戻すと、人を殺せる刃ですでに地上に戻っていたフウタロウを睨みつける。その目は醜い感情で燃える炎のようであった。

「見苦しくて足搔くやつだ。あそこで捕まつておれば楽だつたのを」
「……勝たねばならぬからな。だが、真正面から挑んだのでは不可……。」
「……。」
「忍びらしくて行くとじよつ」

フウタロウの指が盛んに動き出した。彼の指は互いに絡まりあいながら次々となにかの形を現わしていく。数が増えて見えるほど速度で、指は踊るように素早くなめらかな動きをした。

「陰影流・影隠れ」

フウタロウの小さくも重みのある声が響いた。すると彼の身体は晴れた田の雪のように、溶けてどこかに消えてしまったのだった……。

第四十一話 危険、破滅の光

第四十一話 危険、破滅の光

「消えた！ フウタロウ選手、完全に消えてしまいましたア！ さらにその足音なども私の耳にはまったく聞こえません！ これは一体どうしたことなのでしょうか、ミスターXさん！」

司会の男は額の汗を拭いながら絶叫した。彼はそのまま勢い良く司会とかかれた席から立つと、隣のミスターXにマイクを手渡す。マイクを渡されたミスターXは、額のしわを深くするとせつとせつしに咳ばらいをした。

「『J』のほん、これはある種の魔法で光を曲げ、姿を見えにくくしておるのじやりうな。そしてさらに気配や存在感を完全に消して、その存在すらも認識できんようにしておるのだろう。これならば盲目のクレイルにも有効だ」

「なるほどー、それではこの戦にはフウタロウ選手が断絶優勢といふことじょうか？」

「おわらぐ……」

ミスターXは深刻な顔をして、わずかばかり自信なさげに言った。彼もこの試合の展開は読みかねていたのだ。司会の男はそんな彼の態度に何も言つことができない。ビックリでも先の見えない切迫感がありを包んでいった。

一方、手裏剣の落下から落ち着いてきた観客席では魔王が笑つて

いた。声こそださないが、非常に滑稽そうである。その微笑みを近くで見たショリカたちは、たまらず魔王に笑いの理由を聞いた。

「どうしたのよ、そんなに笑っちゃって」

「なに、これから試合が面白くなりそうなのでな」

「面白くなる？ もうすぐに決着がついたやつわよ」

「セツはならないだらうから面白そうなのだ」

魔王は体を揺らしていつも不適な笑いを顔に浮かべた。軽薄そうだが、それでいて深みのあるいつもの得体の知れない笑いだ。それを見たショリカたちは、なにがあるのだろうと舞台の上に視線を注ぐ。

そうして彼女たちが熱い視線を注いでいると舞台の上で動きが止った。クレイルが突然、狂つてしまつたような高笑いを始めたのだ。彼はそのままどこにしまつっていたのだろう、コートの中から大砲を思わせるような魔銃を取り出す。黒い銃身が陽光にきらめき、目が覚めるような冷たい光を放つた。さながらそれはフウタロウへの死刑宣告をしているようだ。

「それで見えなくなつたつもりか？ わしには感じられるぞ、お前のかすかな動きや脈拍さえもな！」

「……はつたりだな」

「……からともなくフウタロウの声が聞こえた。」

たのかまったくわからないそれは、舞台の上を包み込むかのように重く響く。重い声の響いた舞台は、さながら鉛の布団をかけられたよつて静まった。

その声の響きが消えると同時に、クナイがクレイルへと飛んだ。背後から放たれたそれは一切の物音を立てるのことなく、瞬時にクレイルの背中へと殺到する。クレイルの背中に穴が開くのは観客たちの目には必定のように思われた。だが……。

「甘いー。」

「……む」

クレイルの鋼の右腕が一閃してクナイをはじき返した。紅い火花が散つて、クナイがはたりと舞台の石畳に落ちる。それと同時にどこからフウタロウの悔しげなうなり声が聞こえてきた。物音がないどころか気配すらないフウタロウの存在を、クレイルはたしかに感知できているようであった。

「どうしてわかるのだ、私の隠密は完璧のはずだ。この術は気配や足音すらも消すから眞田のおぬしにも通用するはずなのだ……」

「わしは視力を失つてから気を感じする技を身につけてな。今のわしにはその程度の術、児戯にも等しいのだ」

「……そうか。ならばー。」

フウタロウは再び舞台の上に姿を現した。それはちょうど、細かい積み木が一瞬でつみあがつたようなさまであった。その術の見事さに観客たちは度肝を抜かれて歎声を上げる。闘技場の緊張した雰

囲気が一瞬、やわらかいものに変わった。

しかし、クレイルはそのようなことに興味はないようであった。いや、盲目の彼にはわからなかつたのかもしれない。ともかく無関心に見えた彼は、再び姿を現したフウタロウを黒光りする銃口で向かえた。それに対しフウタロウも印を結び、手際よく術を完成させていく。舞台の上の空気がざわめき、にわかに空白の時間ができた。

「死ね、ジエノサイドカノオーン！」

「陰影流・豪炎滅波！」

青い極彩色の閃光と紅く燃えたきる炎の塊が真正面からぶつかりあつた。雷が落ちたような衝撃音が闘技場を揺らして、観客や司会の耳を直撃する。彼らはたまらず耳を押さえて身を小さくした。さらには砂漠の熱波のような風が吹き荒れて闘技場はさながら熱の海と化す。

「粘るな！ だがこれならどうだア！」

クレイルはコートを熱風にはためかせながら、魔力をその身体に満たしていった。膨れ上がつた魔力はほのかな炎のようになり、銃へと注がれていく。銃口から放たれる閃光が急速に太さを増して、炎を押しはじめた。

「くつ……あああ！」

身体にかかる膨大な圧力に、フウタロウが押され出した。彼は顔をしかめながら、ギシギシという音とともに舞台を滑つていく。鉄

の入った足袋が火花を散らして、石畳がわずかづつではあるが削られていった。

「ぬおおー、まざこつー！」

とつとつ、フウタロウは舞台の端にまで来てしまった。彼は端にある石のわずかな出っ張りを足場にして、なんとかクレイルの攻撃に耐える。顔から汗を吹き出している彼には余裕が一切なく、限界は間近であった。さらに彼が足場にしている石も、いつ剥がれ落ちてもおかしくない状況だ。

「もう限界のようだなア！ はははっ、消えろオ！」

「……もはや、これまでー！」

フウタロウはもはや抵抗することを諦めた。彼はすばやく懐から黒い球を取り出すと、地面に向かってたたき付ける。すぐさま球が炸裂して白煙が沸き上がった。フウタロウの姿は白煙の内に消えて、閃光は虚しく彼の影だけを貫く。

妨げるもののなくなつた光線は、金属性の音を轟かせながらそのまま観客席へと直進した。光は石畳の石や地面の砂を吹き飛ばしながら、距離をまたたく間に詰めてくる。くしくもそのあたりの席にはショリカたちも座つていた。

「ひええ！ あかアア～ん！」

「これはだ、だめだわ……！」

「今から防ぐのは無理！」

「くつ、もう私たちは終わりなのか……」

「……仕方ないな」

ショリカたちがにわかに絶望したり悲鳴を上げたりする中、魔王は目の前の手すりに飛び乗った。銀色の髪と深紅のマントをたなびかせながら、彼は眼下に迫る青い光を確認した。そして薄い唇を震わせるように素早く動かし、息もつかせぬうちに魔法陣を編む。

「守護陣二式！」

魔王が叫びを上げると、深い闇色の杖から紫と紅の混じったような魔力が放たれた。それはすぐさま薄い銀色の鏡のような膜を造る。蝙蝠傘のごとく一瞬で広がつたそれは光の前にふさがり、そのつややかに輝く表面をもつて光を上へと弾いた。

ほぼ直角に打ち上げられる格好となつた光は、周囲を太陽のように照らしながら空の青の深くへと消えていった。その光がさながら流れ星のように完全に消えたところで、遙か彼方より音だけが闘技場に届く。その腹を打たれたような音の衝撃は、遠くで起きた爆発の規模を物語つていた。

そうして光が消えた時、舞台の上にはクレイル以外には誰もいなかつた。その代わり、舞台の下に黒い影が見える。その瘦せぎすな後ろ姿は間違いなく、逃亡するフウタロウのものであつた。

「どうやら逃げたようだな。情けないやつだ」

クレイルはそう言い残すと、魔鏡を担いで舞台から去つていった。

彼の厭味な高笑いだけがこだまして、観客や司会の耳に残る。その残響があらかた消えたところで、司会の男が舞台に上がった。

「……しょ、衝撃の結末です！ フウタロウ選手の逃亡によつクレイル選手の勝利です！」

観客席を襲つた攻撃により今だ衝撃を受けている観客たち。その半ば呆然としている彼らの間を少し戸惑つたような司会の声が抜けていつたのだつた……。

第四十一話 危険、破滅の光（後書き）

この小説もだいぶ話数が増えてきたなあ……。私が目標にしてた
とある迷宮物の小説の話数を今回で越えました。これは私的には結
構感慨深いものがありましたよ。なのでこれを機会に、そろそろ設
定をまとめたものを作ろうかと思います。かなりいろいろと増えて
きましたからね。

ただ、設定集を別に作るとパソコンが壊れているためシリーズ機
能が使えないでの、読者の皆さんのが読んでくれるか不安です……。
かといって本編に挟むとそれを嫌がる方もいるんですね。結構な
ボリュームになりそうですし……。

本気でどうしたものか……。もし読者の方で意見のある人は感想
やメッセで送ってくださるとありがたいです。どうしようか本当に
迷っているので……。

第四十二話 ユリアスの謎

第四十二話 ユリアスの謎

第一試合にともなう舞台の破壊により、大会は三十分間の休憩となつた。さきほどまで沸騰していたような観客席もいまは落ち着いて、観客たちはしばしの休息をとつてゐる。それは魔王たちとて例外ではなく、彼らは深く椅子に座つてほつと息をついていた。さらに試合中の緊張感から解放されたためか、女の子四人はいづれもうとつとつしていた。

シリカはそのアンティーク人形のよつに氣品にあふれた顔を、あたたかな日差しに照らされていた。彼女はまばゆい太陽にその紅い瞳を細めながらも、実に心地良さそうである。するとそれを見た魔王は、小さな声で彼女に耳打ちした。

「すまぬが起きてくれんか？」

「ふえ、なんで……？」

「試合前にも言つたであろう。聞きたいことがあるとな

「……そうだつたわね。うー、ふわああ

シリカは両腕を伸ばして背伸びをすると、そのあとで口を抑えて大きなあぐびをした。基本的には荒くれ者の多いシーカーだからかも知れないが、女の子としては少々がさつな行動だ。だが、魔王はそんなことには頬着せずにさつそく話をはじめた。

「実は聞きたいことというのはコリアスについてなのだ。知つていることを余に話してくれないか」

「……けど、どうしてコリアスのことなんて聞きたいの？」

「やきほどな……」

魔王は試合前のアイリスとの出来事をシェリカに伝えていった。するとシェリカの額にどんどんしわが刻まれていって、顔つきも険しくなっていく。そして魔王が話を終える頃には、シェリカはすっかり渋い顔をしていた。彼女は俯き加減になるとフウッと息をつき、魔王に話を始める。

「そうね、あいつならどれだけ怪しい物を持つてもおかしくはないわね……。あいつ自身が謎の塊だし」

「謎の塊？　どういふことだ？」

「……いやさ、あいつに関しての情報は驚くほど少ないのよ。今の歳とか経験とかでさえ、知つてるつて人をあいつ以外に聞いたことがないわ」

「歳はともかく経験を知らない？　あれだけのギルドを率いているようなシーカーなら知られていると思うが」

シリカは魔王の疑問に対して両手を上げて、顔を横に振った。彼女は魔王に、わかつてないと言わんばかりに疲れたような顔をする。

「それが聖銀騎士団の団長になる前のコリアスのことは誰も知らな

いの。前の団長が死んだ時、どこからともなく現れたのよ。それで何故かすんなりと跡をついで、団長をやつてるわ」

「面妖な話だな」

「ええ、さらにそれだけじゃないわ。コリアスについての記録は神殿やギルドにさえもまったくないのよ。ギルドはなんだかんかいつても賛利組織だから何となるかも知れないけど、さすがに神殿は無理よね？」

シヨリカは横に座つているシアをわざかに疑わしげな目で見た。
「シアならお金を渡されれば記録をこまかすかもしれない……。
悲しいことにシヨリカは仲間のシアを完全には信用しきれていなかつた。

疑いの目を向けられたシアは、ビクッと身体を起こした。彼女は顔をぶんぶんと振つたあとで、少し向きになつてシヨリカに反論する。

「私は違反ストレスのセコいはやるわ。でも違反はしないの。それに神殿のシステム上、記録をこまかすのは神官長でも無理」

「違反ストレスのセコいことってそれはそれで……。いいわ、今は置いときましょ。疑つて悪かつたわねシア。……あれ、でもそうなるとコリアスは洗礼を受けてないことになるわ……。洗礼を受けたら記録に残るはずだもの」

「つづむ、しかし神の加護がなければ迷宮には入れぬぞ。それは余自らが体験済みだ。さすがにギルドの代表が迷宮に入れぬというのは無理があるぞ」

「そうよね。第一、ユリアスが迷宮に入るのを見たことがあるわ。……ねえシア、あの神殿で洗礼を受けないと絶対に加護は得られないのかしら？」

シェリカがそういうと、シアの顔が曇った。彼女は額に手を当て何やら考え込み始める。そうしてしばらくシアはうんうんと唸りながら、足をパタパタとさせて考え事をしていた。そしてそのあと、俯き加減になつていた顔を上げるとゆつくりと小さく口を開ける。

「……他の街にある神殿でも加護を受けられることはあるわ。でもすごく低確率な上に年数もかかる。それこそ信仰熱心な神官が生涯をかけて授かるといったレベルよ。ユリアスの見た目から考えるとまずありえないわね」

「他に方法はないの？」

「すこく眉唾ものの話になるけど……。神の加護は人の魂に与えられるの。だから位の高い神の加護を受けた人間は、生まれ変わつても加護を受けたままになるって話は聞いたことがあるわ。でも生まれ変わりなんて荒唐無稽で非現実的」

シアはきつぱりと断言した。シェリカはその様子にため息をついて頭を抱える。魔王もまた、上を向いて何か思案を巡らせはじめた。

ちょうどその時、舞台の上で修復作業が終わった。立ち去つていく作業員たちと入れ代わりに、選手一人と司会の男が現れる。それを見にしたシアは、いまだに悩み続けているシェリカたちに声をかけた。

「試合が始まるわ、集中するべき。……気になるなら、闘神祭が終わつたあとに神殿の地下図書館にでも行きましょ。あそこならたいがいのことはわかるわ」

「……わかつたわ。そつしましょ」

「余もそれに賛成だ」

魔王やショリカたちはシアの意見に賛成すると、まだうとうとしていたサクラとエルマを起こした。起こされた一人は慌てて姿勢を正すと舞台の上に真剣な眼差しを送る。

こうして五人が集中したところで第二試合が始まったのであった。

第四十四話 仮面魔導士

第四十四話 仮面魔導士

「お待たせしました、ただいまより第三試合を開始致します！ 第三試合はコウラン選手対ルーミス選手です！ それでは試合はじめ！」

司会の男はそう叫ぶと舞台から駆け降りていった。代わりに一人の女が舞台の上に上がってくる。片方は仮面をかぶった少女、もう片方は胸元の開いたチャイナドレスを着た東洋風の美女だ。

「一撃で灰にしてあげます！」

「まあ恐い！ でも簡単にはいかないわよ？」

ルーミスは付けていた白い仮面を、素早く紅いものと取り替えた。彼女は取った仮面を懐にしまうと魔力を練り上げ、手の平に火の玉を造る。赤々と燃え立つ炎の塊が次々と生成されて、コウランの元へ飛来していった。

飛来する火の玉を一通り交わすと、コウランは胸元から緑の扇を取り出す。彼女は一瞬でそれを開くと、思い切り仰いだ。

「むつ、風の魔法具ですか！」

扇から猛烈な風が放たれた。それに吹き飛びそうになるロープを抑えつけると、ルーミスは顔をしかめる。彼女がすでに放った火の玉はすべて焼き消されてしまった。暴風は砂や埃を巻き上げて竜巻

のようになり、ルーミス自身も吹き飛びそうな状況となつてくる。

そんな中、ルーミスは今度は黄色の仮面をつけた。その次の瞬間、彼女の指先から青い稻妻がほとばしる。稻妻は独特の轟音を響かせながら「コウランのドレスを焦がしていった。コウランの顔がたちまち驚愕に歪み、凍てつくような眼差しがルーミスを射抜く。

「雷！ あなた二属性の魔法を無詠唱で使えるの！」

「正確にはそうじゃないですが、まあ似たようなものですよー。」

ルーミスは指先から雷を次々と放つた。コウランはその光をなんとかすれすれで交わしながら、ルーミスに接近していく。くるくると回るようにして身体をずらしていき、コウランはルーミスの目の前まで近づいてきた。

ルーミスはコウランが接近してくると後ろに下がった。だが、雷は命中率に難があるのかある程度以上には離れない。着かず離れず、二人はダンスでも踊るような状態となつた。人が五人くらい入れるくらいの距離を開けて、一人は互いを出し抜こうとステップを踏みながら死の舞を踊る。

「これではラチがあかないのですよ！ だから遊びはここまでにす るです！」

互いに千回手となつてきたところで、ルーミスは雷を弾幕代わりにして素早くコウランから離れた。コウランはめちゃくちゃに放たれた雷をかわすので精一杯で、ルーミスに近づけない。そうしてある程度離れることに成功したルーミスは、またもや懐から青い仮面を取り出した。彼女はそれを手際よく装着すると今度は手から鋭利

な氷柱を打ち出す。

金属質な音を立てて、弾丸並の速度で迫った氷柱。それをコウランは完全にはかわせなかつた。わずかに移動の遅れた彼女の純白のふくらはぎを氷柱がかすり、柔らかな肉をえぐる。肌を破られたそこからはすぐに紅い鮮血が滴り落ちて、舞台の石を紅く変えた。コウランはその醜い傷を見るとたちまち眉をひきつらせた。

顔を強張らせたのはコウランだけではなかつた。試合を見ていた残りの選手や一部の観客たちも彼女と同様に、背筋を冷やす。シェリカとシアもその一部に含まれていたようで、彼女たちは揃つて青い顔をした。

「あつ、あの女三属性の魔法を無詠唱で使つたわよ！ 一体どうなつてんのよ！」

「……私にはわからないわ。だけど恐ろしいわね」

普通、上級の魔法使いでも詠唱を完全に破棄するのは難しい。一部の天才と呼ばれる者たちが成功する程度だ。だがそれも加護を受けた属性か、自分が先天的に得意とする属性に限られる。そのため三属性の魔法を完全無詠唱で自由自在に使いこなすルーミスは天才を超えて化け物とすら言えた。

魔法を得意としているシェリカとシアはすぐにそのことに思い至り、肝を冷やした。だがその時、パーティーの中でもつとも魔法を得意としているはずの魔王はそうではなかつた。彼は青くなる代わりにフムフムと頷き、満足そうな顔をしている。シェリカとシアはそんな魔王に、心底不思議そうな顔をした。

「魔王？ 何があつたの？」

「いや、あの魔法使いの戦い方が面白いのでな」

「面白い？ どんな風によ？」

「あの女、戦闘中に得意属性を変えていっているのだ」

「えつー！」

シェリカとシアは慌てて手すりに寄り掛かると、舞台の上のルーミスの姿をよく確認した。彼女の姿に特におかしな点はない。だがすぐにシェリカはることに気がついた。彼女ポンと手をつくと、どうだと言わんばかりの顔でまだわからないシアに説明をする。

「シア、仮面よー。あの女は着けてる仮面によつて得意属性が変わんだわ。赤なら炎、黄なら雷、青なら氷が得意属性になるのよ」

「なるほど、だからいちいちあの女は戦闘中に仮面を着け変えているのね。確かにこれなら全部説明がつくわ」

シアとシェリカは互いに納得すると、もとの表情に戻った。そして再び試合の流れに注目する。一人が集中を取り戻したちょうどこの時、試合の方も動きがあった。どうやらコウランもこのことに気がついたようだ。

「……わかつたわ、あなたその仮面で属性を補助してるのね。だつたらこれでどうかしら？」

ルーミスの視界を埋めるような熾烈な攻撃をかわしたコウランは、

胸元から一本目となる赤い扇を取り出した。彼女はそれを先ほど持っていた緑の扇に重ね合わせる。そして二つの扇が淡い光を放つた瞬間、彼女は空を地面にたたき付けるように扇であおいだのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3388q/>

迷宮の魔王さま 改訂版

2011年3月30日23時47分発行